ストライク・ザ・ブラッド 6
錬金術師の帰還

中等部の修学旅行で本土に行くことになった雪菜たち。その間、彼女の監視から解放されると知って喜ぶ古城と複雑な雪菜。そんな古城たちの前に現れたのは、天塚汞と名乗る錬金術師だった。

封印された錬金術の至宝――液体金属生命体〝賢者の霊血〟を復活させるため、〝魔族特区〟各地で襲撃を繰り返す天塚。そして〝賢者の霊血〟の暴走に巻きこまれた浅葱を待ち受ける悲劇とは……!?

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第六弾！

み-3-37

ストライク・ザ・ブラッド6
錬金術師の帰還
三雲岳斗
電撃文庫
590

9784048914079
1920193005905
ISBN978-4-04-891407-9
C0193 ¥590E
ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 590 円
※消費税が別に加算されます

ロウきゅーぶ!のすべて!!
電撃文庫編集部 編　定価 1,785円
好評発売中
収録内容
慧心女バスの魅力を全て詰めこんだ一冊が、ついに登場! ファン必見の特集が満載!! 原作、アニメ、ゲーム、コミックの見所はもちろん、様々な視点から小学生たちを丸裸に――!? さらに「ぐらびあRO-KYU-BU!」や「びじゅあるロウきゅーぶ!特別編」、スタッフインタビューなど、充実の内容でお届け!!
※定価は税込(5%)です。

電撃文庫
電撃20th
封印された雪霞狼!
洋上の雪菜に迫る危機!
大人気学園アクションファンタジー 第6弾!!
第5回電撃小説大賞《銀賞》受賞作家 最新刊
電撃小説大賞
第19回電撃小説大賞受賞作品 好評発売中!!
大賞 アリス・リローデッド ハロー、ミスター・マグナム 著／茜屋まつり イラスト／蒲焼鰻
金賞 明日、ボクは死ぬ。キミは生き返る。 著／藤まる イラスト／H_2SO_4
金賞 エーコと【トオル】と部活の時間。 著／柳田狐狗狸 イラスト／MACCO
銀賞 塔京ソウルウィザーズ 著／愛染猫太郎 イラスト／小幡怜央(スクウェア・エニックス)
メディアワークス文庫より2月23日発売予定!!
大賞 きじかくしの庭 著／桜井美奈
メディアワークス文庫賞 路地裏のあやかしたち 綾櫛横丁加納表具店 著／行田尚希

ストライク・ザ・ブラッド 6

STRIKE THE BLOOD

錬金術師の帰還

三雲岳斗

illustration マニャ子

藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生
暁古城［あかつき こじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

叶瀬夏音
『模造天使』Faux Ange
心優しき中等部の聖女
かなせかのん
姫柊雪菜
『剣巫』Sword Shaman
獅子王機関の可憐な監視者
ひめらぎゆきな
暁凪沙
『真祖の妹』Sister of Primogenitor
天真爛漫な騒々しき賢妹
あかつきなぎさ

南宮那月
「みなみやなつき」
『空隙の魔女』Witch of the Void
唯我独尊の高貴なる女教師
天塚汞
「あまつかこう」
『大錬金術師の弟子』The Great Alchemist's Apprentice
邪悪なる半人半金属の錬金術師
矢瀬基樹
「やぜもとき」
『過適応者』Hyper-Adapter
陽気な級友、あるいは双貌の道化師

ストライク・ザ・ブラッド
錬金術師の帰還
6

Contents

序章 Intro 11
第一章 剣巫の休日 Holiday Of The Watchdog 27
第二章 早すぎた葬送 The Premature Bereavement 87
第三章 錬金術師の帰還 Return Of The Alchemist 135
第四章 洋上の供物 The Sacrificial Victims 195
第五章 水精の白鋼 The Undine 255
終章 Outro 299
あとがき 310

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

序章
intro

「ぐ……あ……」

純白の陽光に全身を包まれて、暁古城は苦悶の声を上げた。

開け放たれた窓から降り注いでいるのは、灼けつくように眩い陽射しだった。オレンジ色の朝陽が強烈な紫外線を撒き散らしながら、横たわる古城の横顔を照らしている。

秋の終わりが近づいても、この亜熱帯の都市から見上げる太陽にはほとんど翳りがない。

ここは〝魔族特区〟絃神市。太平洋の ド真ん中、東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島——終わることのない真夏の街なのだ。

「暑い……焦げる……」

ベッドの上で悶えながら、古城はのろのろと瞼を開ける。

涙で霞む視界に映ったのは、見慣れた自室の風景と、そこに立つ小柄な人影だった。

制服の上に、グレーのダッフルコートを羽織った女子中学生。

結い上げてショートカット風にまとめた長い髪が、快活そうなイメージを彼女に与えている。大きな瞳が印象的な、見るからに表情の豊かな少女だ。

「おはよう、古城君！　目、覚めた？」

起き抜けの古城の顔を覗きこんで、妹の暁凪沙が明るく言った。普段から騒々しいところのある彼女だが、今日はいつにも増して愉しそうな表情を浮かべている。

彼女は、慣れた様子で部屋中のカーテンを次々に開けて、古城が頭から被ろうとしていたブランケットを引っぺがした。古城は弱々しく溜息をついて、観念したようにゆっくりと起き上がる。

「この直射日光をまともに喰らったら、さすがにな……」

寝癖のついた前髪をかき上げて、古城は頼りなく息を吐いた。

時刻は午前六時過ぎ。朝に弱い古城にとっては、深夜も同然の時間帯だ。強引に叩き起こされた混乱と眠気で、頭の中が錆びついたように動かない。

そんな古城の姿を眺めながら、凪沙は呆れたように苦笑して、

「大げさだなぁ。今ドキ、吸血鬼でも朝陽を浴びたくらいじゃビクともしないよ」

「……そうでもないみたいだぞ」

「ん？」

「いや、なんでもない」

怪訝顔の凪沙から目を逸らし、古城は、恨みがましい視線を窓辺に向けた。

窓の外には澄んだ青空が広がり、凪いだ海面が陽光を反射して白く輝いている。夜行性の吸血鬼には、正直つらい環境だ。たとえ世界最強の吸血鬼であってもだ。

「それより、なにかあったのか？　まだ寝てても大丈夫な時間だろ」

そう言って古城は、もう一度時計を確認する。登校時刻にはまだ早い。最低でもあと十五分、

駅までダッシュするのを覚悟すれば三十分は眠っていられたはずだ。失われた睡眠時間の貴重さを思って、古城の声には不機嫌な響きが混じる。

しかし凪沙は悪びれずに微笑んで、かすかに頬を赤らめた。

「うん、ちょっとね。せっかくだから、真っ先に古城君に見せてあげようと思ったんだよ」

「見せるって、なにを？」

くるくるとその場で回り始めた凪沙を見上げて、古城は困惑したように訊き返す。

その瞬間、凪沙の表情が凍りついたように固まった。

「もしかして……わかってない？」

「ああ」

無感情な瞳で睨まれて、古城は思わず肩をすくめる。

凪沙はむくれたように頬を膨らませ、威嚇するように両腕を大きく広げてみせた。

「じゃん！」

「……は？」

首を傾げる古城の肩に、凪沙が乱暴に身体をぶつけてくる。体重の軽い彼女とぶつかってもたいした衝撃ではないが、ダッフルコートの留め具があたってけっこう痛い。

「じゃっ、じゃん！　じゃじゃっ、じゃーじゃんっ！」

「な、なんだそれ？」

「うー……ファッションショー、みたいな？」

「いや、ファッションショーじゃねえだろ、その効果音は」

凪沙の攻撃をガードしながら、古城はやれやれと嘆息し、そしてふと引っかかりを覚えて眉を寄せた。ファッションショー……？

「そういえば、そのコート、どうしたんだ？　なんでそんな……」

なぜそんな暑苦しい格好をしているのか——と、うっかり質問しかけて、古城は慌ててその言葉を呑みこんだ。兄を見つめる妹の瞳が、期待で爛々と輝いていることに気づいたからだ。

「似合う？　似合う？」

うずうずと身を乗り出しながら、凪沙が古城の答えを待っている。

彼女の気迫に軽く圧倒されつつ、古城はぎこちなくうなずいた。

「お、おう。可愛いんじゃないか、なかなか」

凪沙がホッとしたように胸を撫で下ろし、口元をふにゃふにゃと緩ませた。

「そうかな。へへへ……通販で頼んでおいたやつ、昨日ようやく届いたんだよね。こういうの、前から着てみたかったんだ。裏地の柄も可愛いしね。裾の長さが重要なんだよね。制服のスカートがギリギリ隠れて、いきなりタイツが見えてる感じ？　でもこれ意外に安いんだよ、西ランゴバルドの有名なブランドのセカンドライン。浅葱ちゃんに教えてもらったんだー」

「へえ」

凪沙が言っていることはあまり理解できなかったが、古城は適当に相づちを打つ。やたらに口数が多いのは、この出来のいい妹の数少ない欠点のひとつだった。

「だけど、なんでコートなんだ？　まだそんな季節じゃないだろ……？」

凪沙の早口が途切れるのを待って、古城は素朴な疑問を口にする。

絃神島の気候は温暖で、真冬でも厚手のコートが必要になることは滅多になかった。実際、コートを着ている凪沙は、もうすっかり汗だくだ。

しかし彼女は、逆に驚いたように古城を見返して、

「なに言ってるの、もう十一月だよ。本土は寒いよ。もうすぐ冬だよ」

「そりゃ本土はそうだろうけどな」

「もう……駄目だなあ、古城君は。去年のこと、忘れちゃったの？」

そう言って凪沙は、呆れたように溜息をついた。

「去年のこと……？」

古城は、額に手を当てて曖昧な記憶を辿る。一年前といえば、当時の古城は今の凪沙と同じ学年。中等部の三年生だった。第四真祖などという、非常識な肩書きを受け継ぐ前の話だ。

そのころにあったイベントといえば――

「もしかして中等部の修学旅行か？」

「修学旅行っていうか、宿泊研修だけどね」

凪沙が、ほんの少し残念そうにチラリと舌を出す。

彩海学園中等部の宿泊研修とは、普段、外界から隔離されている〝魔族特区〟の学生たちに、一般社会の様子を見学させるという趣旨の旅行行事だ。行き先は有名な観光地などではなく、官庁街や工場などがメイン。自由行動の時間もほとんどない。

それでもクラスメイトたちと泊まりがけで旅行に出かける、というイベントが中学生にとって楽しみでないわけがない。

「本土に戻るのは久しぶりだな。小学生のとき以来だよ。古城君は部活の試合でたまに戻ったりしてたけど、ずるいよね」

「そんないいものでもなかったけどな……」

古城が顔をしかめて言い返す。なにしろ絃神島から本州までは、船で十一時間もかかるのだ。予算の少ない弱小運動部ということで、もちろん部屋はいちばん安い二等船室。半日かけて試合会場に辿り着き、バスケの試合を終えてそのまま港に直行。再び船に揺られて島に戻ってきたあと、一睡もしないまま登校するというハードな遠征に、うらやましがられる要素があるとは思えない。それに比べれば中等部の宿泊研修は、ずいぶん気楽だった記憶がある。

「まあ、おみやげを楽しみにしててよ」

懐かしそうに微笑む古城を見て、凪沙がちょっと得意げに言った。

「期待してるよ。じゃあ、そういうことで」

用は済んだだろ、と凪沙を追い払うように手を振って、古城は再びベッドに倒れこんだ　直射日光を避けるために、シーツの下に潜りこむ。

「こら、寝るな！」

そんな古城を慌てて引きずり起こそうとする凪沙。彼女の攻撃から必死で逃れながら、古城は頭の片隅で、ぼんやりとべつの少女のことを考えていた。

第四真祖の監視役と称して、古城につきまとっている中等部の生徒のことを。

宿泊研修で絃神島の外に出ている間、当然、監視はできなくなるわけだが。

姫柊はどうするつもりなのだろう――？

十

人工島北地区第六層――

一年を通じて陽光が届くことのない地下深くの研究所街に、その建物は建っていた。

灰色に薄汚れた小さなビルだ。

すべての窓が鉄板で塞がれ、出入口は有刺鉄線に覆われている。傍目にはただの廃ビルにしか見えない。

だが、魔術の心得がある人間ならば、ビルの周囲に張り巡らされた、幾重もの結界の存在に気づくだろう　普通の人間では近づくこともできないほどの、強力な人避けの結界だ

そのビルの所有者は〝魔族特区〟の管理者――人工島管理公社だった。訳ありの未登録魔族や、司法取引による協力を取りつけた犯罪者を隠匿し、保護するための隔離施設である。

そのような施設の性質上、内部の警備は刑務所並に厳重だ。銃器で武装した警備員が二十四時間体勢で警戒に当たり、部外者の侵入を拒んでいる。

そんな隔離施設内の静寂を破って、荒々しい雷雨のような銃声が鳴った。

警備員の短機関銃から撃ち放たれた銃弾が、不快な振動とともにビルの内壁を抉る。

銃撃が続いたのは、ほんの一瞬のことだった。代わりに響き渡ったのは、恐怖の絶叫だ。

やがて静寂の戻った建物の廊下には、一人ぶんの足音だけが残った。

警備員たちの靴音ではない。その証拠に、魔術によって施錠された廊下の隔壁が、無理やり引き裂かれていく気配がある。警備員たちを全滅させた侵入者が、施設の最奥部に近づいてこようとしているのだ。

やがて最後の隔壁を破壊して、侵入者が姿を現した。

痩身の若い男だった。

純白のマントコートを着て、シャツと帽子の柄は赤白のチェック模様。左手には髑髏の彫刻がついた銀色のステッキを持っている。奇術師めいた胡散臭い雰囲気を漂わせた青年だ。

帽子の庇に手を当てて、彼はゆっくりと周囲を見回す。

隔離施設の最奥部は、意外にも近未来的な実験室になっていた。最先端の分析装置を備えた、魔導技術の研究オフィスだ。

オフィスの中には助手代わりの機械人形が数体と、一人の男が立っていた。

敬虔な聖職者を連想させる、陰気な顔つきの中年男性だ。

――ノックにしては、いささか乱暴すぎるのではないかね」

引き裂かれた隔壁を無表情に眺めて、男が静かな口調で言った。

皮肉なユーモアの籠もったその台詞に、奇術師風の青年が苦笑する。

「そうだね。思いのほか、手荒い歓迎を受けちゃって」

悪戯な子どものような口調でそう言って、青年は右手を無造作に開いた。

掌の中に握られていた小さな金属の塊が、床に落ちて甲高く澄んだ音を立てる。

それは対魔族用の銀イリジウム合金の弾丸だった。四、五十発はあるだろう。警備員たちにそれらを撃ちこまれても、男は平然とここまで歩いてきたのだ。

「叶瀬賢生さん、ですよね。魔導産業大国アルディギアの元宮廷魔導技師。あなたが発表した霊的物質変換に関する論文は覚えてますよ。あれは画期的な着想だった。関連特許だけでも、かなり儲かったんじゃないですか？」

屈託なく微笑みながら、青年が続けた。

叶瀬賢生は眉ひとつ動かさず、得体の知れない侵入者に訊き返す。

「商談に来た、というわけではなさそうだが」

「まあ、そうですね。欲しいのは金じゃありません」

青年が酷薄そうに目を細めて叶瀬賢生を見た。

「きみを出迎えた警備員たちはどうした？」

「殺してはいませんよ。生きてると言えるのかどうかは微妙だけど」

背後の通路を振り返って、青年は無責任に言い放つ。

通路には五人の警備員が、立ったまま意識を失っていた。彼らに目立つ外傷はなく、血を流した痕跡もない。しかし彼らは銃を構えた姿勢のまま、凍りついたように動かない。制服の隙間からのぞく彼らの肌は鉛色の金属光沢に覆われて、彫像と見分けがつかなかった。

「まったく、あの程度の兵隊で僕を止められるつもりでいたのなら、笑っちゃうよね。正直、あなたが隔壁に張った結界のほうが、よっぽど手こずらせてくれたよ」

「なるほど……錬金術師か……」

生きたまま金属彫刻に変えられた警備員たちを眺めて、叶瀬賢生が低く呟いた。

どこか得意げな表情を浮かべて、青年が恭しく頭を垂れる。

「修行中の若輩者ですけどね。永といいます。天塚永」

「コウ・アマツカ……か。ニーナ・アデラードの弟子に、そんな名前の男がいたな」

「さすが、話が早いな」

天塚と名乗った青年は、感心したように薄い唇を吊り上げてみせた。
「だったら、僕がここに来た理由もわかるよね――師匠の形見、渡してくださいよ」
「なんのことだ？」
叶瀬賢生が、冷たく訊いた。天塚の唇が、怒りに歪む。
「とぼけないでよ。五年前にあんたが封印した〝霊血〟の心臓だよ。あれはもともと僕のものだ。返してもらうよ」
炎のような殺意を向けられても、叶瀬賢生の表情は変わらない。
「悪いが、それは出来んな。アデラードの弟子なら、その理由もわかっているはずだが？」
「あんたの都合は聞いてない！」
激昂したように天塚が叫んだ。
同時に彼の全身から、禍々しく奇怪な魔力の波動と、耳障りな高周波が放たれた。
その振動に呼応して、どこからともなく、かすかな反響音が聞こえてくる。音の源は、研究室の奥の保管庫だった。封印された魔導器が、天塚の魔力に共鳴しているのだ。
「ほら、見つけたよ」
天塚が獰猛な笑みを浮かべて言った。
「渡せない、と言ったはずだ」
そう呟いた叶瀬賢生の指先が、虚空に小さな魔法陣を描いた。

石人形に仮初めの命を吹きこんで、自らの忠実な従僕を生み出す傀儡創造の魔術。その魔術が発動した直後、背後からの銃撃が天塚を襲った。
錬金術によって金属に変えられていた警備員たち。彫像と化した彼らの肉体を、叶瀬賢生は魔術で、自らの従僕たるゴーレムに変えた。そして錬金術師の青年を襲わせたのだ。
動くはずのない彫像たちの奇襲から逃れるすべは、天塚にはなかった。
無数の銃弾をまともに喰らって、彼の白いコートがズタズタに引き裂かれていく。
それでも青年は笑っていた。嘲るように笑い続けていた。
「さすがは叶瀬賢生だな。魔力を封じられてるくせに、こんな術がまだ使えるのか――」
錬金術師の青年の指摘に、叶瀬賢生は表情を歪める。
犯罪者として拘束されている叶瀬賢生の魔力は、人工島管理公社によって厳重に制限されていた。今の彼は、魔導技師としての本来の魔力が使えないのだ。
「でも、惜しかったね。この程度では、僕は殺せないよ」
「ぬ……!?」
天塚が右腕を振り上げた。彼の袖口から迸ったのは、粘性を帯びた黒銀色の液体だ。
鞭のように長く伸びたその液体は、研ぎ澄まされた刃を瞬時に形成し、ゴーレム化した彫像たちの胴体を撫で斬りにした。そして従僕たちを失った叶瀬賢生を、袈裟懸けに斬り倒す。
肩から心臓にかけて斬り裂かれた魔導技師は、鮮血を撒き散らしながら、音もなくその場に

崩れ落ちた。

「愚かな判断をしたね。素直に渡してくれれば、痛い思いをせずに済んだのにさ」

倒れ伏す叶瀬賢生を蔑むように見下ろして、天塚は研究室の奥へと進んだ。

露になった天塚の右腕は、ぬらぬらと光り輝く金属質の液体に覆われている。

否——液体に覆われているのではなかった。彼の右腕そのものが金属なのだ。水銀のように流動する黒銀色の液体金属が、人間の右腕に擬態していたのである。

「〝賢者の霊血〟……そうか……あのときアデラードの修道院を滅ぼしたのは……」

天塚の右腕に気づいた叶瀬賢生が、苦しげな声で呟いた。

錬金術師は、その問いかけに答えない。ただ憎悪に満ちた眼差しで笑うだけだ。

「悪いね。師匠に奪われた僕の半身、今度こそ取り戻させてもらうよ」

分厚い金属製の保管庫を、天塚は紙のように易々と引き裂いていく。

錬金術師は、金属の組成を自在に操る。いかなる超硬合金も、彼の手に触れれば薄っぺらなアルミ箔より脆く変わるのだ。

そして天塚が保管庫から取り出したのは、直径十五センチほどの球体だった。透きとおった深紅の宝石だ。それを光に透かして確認し、天塚は満足そうに微笑んだ。

カツカツとステッキを鳴らしながら、錬金術師の青年が立ち去っていく。

遠ざかるその足音を聞きながら、叶瀬賢生の唇が、弱々しく震えて言葉を紡いだ。

鮮血の中に沈んだまま、赦しを請うように、娘の名前を一度だけ呼ぶ——

「夏音……」

Holiday Of The Watchdog

1

東の水平線がほのかに白み始めたころに、姫柊雪菜は目を覚ました。

野生の猫を思わせる動きでむくりと音もなく起き上がり、寝癖のついた髪をかき上げる。無防備に小さなあくびを洩らすと、目の端に涙のしずくが浮いた。それをぐしぐしと袖で拭く。

意外に思われることも多いが、実は雪菜は朝に弱い。意識がまだ少し朦朧としているせいか目つきも虚ろ。やや大人びた冷たい美貌が、普段よりもずいぶん幼く見える。

パジャマがわりに着ていた白いシャツをその場で無造作に脱ぎ捨てて、雪菜はそのまま浴室に向かった。何度か二度寝しそうになりながらも、冷水のシャワーを浴びているうちに、ようやく少しずつ目が覚めてくる。

浴室を出てタオルで水滴を拭い、鏡に自分の姿を映す。体調は良好。波朧院フェスタでの死闘の疲れももう残っていない。しかし華奢な体つきは相変わらず。それを確認して雪菜は無意識に溜息をついた。牛乳飲もうかな、などとぼんやり考える。

髪を乾かして制服に着替え、雪菜は簡単に朝食を済ませた。

それから武器――〝雪霞狼〟の手入れを始める。

銀色に輝く金属製の槍を磨き上げ、自らの存在がその槍と一体になる姿を脳裏に描く。

自然界の猛獣が身体を鍛えないのと同じ理屈で、獅子王機関の剣巫も特別なトレーニングは行わない。そもそも人間が少しばかり筋肉をつけたところで、魔族と対等に戦えるはずもない。代わりに彼女たちは、感覚と動作を徹底的に研ぎ澄ます。何気なく行われている呼吸や歩行、日常生活における立ち居振る舞いのすべてが、雪菜にとっては呪力を高める訓練なのだ。

しばらくするとマンションの隣の部屋が騒がしくなる。

普段よりも少し時間が早いが、暁家の妹が兄を叩き起こしているらしい。なんだかんだで仲のいい彼らのやりとりを想像しながら、雪菜は思わず微笑んだ。

「――！」

その柔らかな微笑が、不意に鋭い攻魔師の表情に変わる。マンションに張り巡らした雪菜の結界を揺らして、何者かの呪力が侵入してくる気配を感じたのだ。

空から舞い降りた侵入者が、雪菜の部屋の窓の外に止まる。

狭い室内では長い槍は不利になる。そう判断した雪菜は〝雪霞狼〟を置いて、学生カバンの底に仕込んでおいたナイフを抜いた。剣巫の基本的な装備のひとつで、〝雪霞狼〟には及ばないまでも、強い破魔の力を持った呪的武器だ。

油断なくそれを構えて、雪菜は勢いよく窓を開けた。

「……」

目の前にいたのは、一羽の鳥だった。鋼色に輝く猛禽だ。

その姿は雪菜の目の前で解けて、一通の書状へと形を変えた。式神　それも雪菜の結界を容易く通り抜けるほどの強力な使い魔だ。これほどの式神を放てる術者は、獅子王機関にもそう多くない。ただの伝令として使うには、あまりにも高度な呪術だった。

しかし術者からの敵意は感じられない。

そのことに困惑しながら、雪菜は書状を受け取った。そして今度こそ驚愕に声を洩らす。

「えっ……!?」

窓の外はすでに陽射しが強い。絃神島は今日も暑くなりそうだった。

2

車窓に映る海辺の風景が流れていく。

古城たちが通学に使ういつものモノレールだ。普段よりも時間が早いため、車内は少しだけ空いている。心なしか冷房の効きもいいようだ。

しかしなによりも普段と違うのは、隣に立っている雪菜の態度だった。

銀色の槍を収めたギターケースを背負って、古城を監視しているのはいつもと同じ。だが、彼女の態度はどこか上の空で、時折、遠くを見るような表情で溜息をついている。

「姫柊？　なあ、姫柊……さん？」

さすがに雪菜の様子が気になって、古城は彼女の耳元で呼びかける。

しかし雪菜の返事はなかった　どこか思い詰めたような表情で小さく唇を噛んでいるだけだ。目の前で掌を振っても反応はない。ただでさえ整いすぎた顔立ちの彼女が無反応だと、彫刻に向かって話しかけているような錯覚を覚えてしまう。

「大丈夫か、おい……もしかして体調、悪いのか？」

熱でもあるのだろうか、と不安になって、古城は雪菜の顔を覗きこんだ。

そして前髪に隠れた彼女のおでこに手を当てる。ひんやりとした冷たい肌の感触――それを掌に感じた瞬間、古城の視界が反転した。

「え!?」

なにが起きたのかわからないまま、古城の身体が宙を舞っていた。その場で垂直に半回転して、頭から車両の床に叩きつけられる。合気道というところの小手返し。古城の手首を握った雪菜が、体重移動と体捌きだけで古城を投げ飛ばしたのだ。

人形めいた無表情のまま、雪菜はそのまま古城の肩関節を極めた。対魔族戦闘のエキスパートである剣巫の武技だ。小柄な少女のものとは思えぬ凄まじい腕力に、世界最強の吸血鬼であるはずの古城が抵抗できない。想像を絶する激痛に耐えかねて、古城は情けない悲鳴を上げる。

「ぬおおおっ、ギブッ！　ギブッ　――！」

「あ……!?」

半泣きになった古城の悲鳴で、ようやく雪菜は正気を取り戻したようだった。あり得ない方向に湾曲していた古城の右腕を解放し、苦痛にうめく彼の隣に慌てて屈みこむ。

「先輩……だ、大丈夫でしたか!?」

「……思ったよりも元気そうで安心したよ……」

空虚な笑みを浮かべながら、皮肉っぽい口調で古城が言った。

うっかり古城が触れてしまったことで、雪菜の身体が無意識に自衛行動を発動したのだろうが、あらためて剣巫の持つ規格外の戦闘能力を痛感する。この先、眠っている雪菜を見かけても、迂闊に触らないようにしようと古城は心に刻みこむ。

切ないのは、古城が雪菜に痛めつけられている間、ほかの乗客が誰一人助けてくれなかったという事実だった。周囲にいた乗客の大半は、朝っぱらからいちゃつきやがっていい気味だ、と言わんばかりの表情を浮かべていたし、残りの一部は、どことなくうらやましそうな目で雪菜にいたぶられる古城を見ていた気がする。都会の人間関係の暗部を思い知らされる出来事だ。

「すみません。少し考え事をしていたので」

本気で反省したようにうなだれながら、雪菜が謝罪を口にする。いやまあ俺も不躾だったし、と古城は自虐的に笑って、

「なにか心配事か？」

「心配事……そうですね。ある意味では」

「ある意味では？」

彼女の奇妙な言い回しに、古城は眉を寄せた。そしてふと今朝の妹とのやりとりを思い出し、

「そういえば中等部はもうすぐ宿泊研修なんだろ。姫柊は準備、済ませたのか？」

「宿泊研修……」

雪菜がますます表情を暗くした。失言だったか、と古城は焦る。

雪菜はただの学生ではなく、第四真祖の監視役として獅子王機関から派遣されてきた攻魔師だ。彩海学園に通っているのは、あくまでも古城を監視する任務の一環に過ぎない。本来の任務とは無関係な学校行事に、彼女が参加できない可能性は当然あり得ることだった。

だとすれば、思い詰めたような彼女の表情にも納得できる。

「もしかして、姫柊は参加しないのか？　獅子王機関に止められてるとか？」

「いえ、それが……今朝になって、こんなものが」

「なんだ、これ。手紙……？」

雪菜がカバンから取り出したのは、奇妙な折り目のついた一枚の便箋だった。銀色に輝いて見えるほど白い紙だが、その表面に流麗な筆記体の英文が書かれている。暗号というわけではないようだが、古城程度の語学力では、書かれてある内容を読み取るのは少し厳しい。

「獅子王機関からの辞令です。明後日の深夜零時から四日間、〝雪霞狼〟を封印するので、その前に引き渡すように――って」

「〝雪霞狼〟って姫柊の槍か……それを封印するってことは……」

「はい。第四真祖の監視役の任務を解く、ということではないかと」

重々しい口調で雪菜が言った。

〝雪霞狼〟の銘を与えられた彼女の槍は、正式には〝七式降魔突撃機槍〟と呼ばれる獅子王機関の秘奥兵器だ。ありとあらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化するこの槍は、吸血鬼の真祖をも滅ぼし得る究極の対魔族用武神具である。第四真祖の監視役である雪菜は、それが必要だと判断したとき、古城を滅殺する権利が与えられている。〝雪霞狼〟は、いわばその特権の象徴なのだ。

その槍を封印するということは、すなわち雪菜が監視役を解任される、ということになる。ただし明後日からの四日間――それは奇しくも彩海学園中等部の宿泊研修の予定日と同じだった。

「……それって、つまり休暇ってことだろ。ラッキーだったな」

古城は気の抜けたような声で呟いた。なんのことはない、獅子王機関の中の人々も、雪菜が宿泊研修に参加できるように取り計らってくれていたらしい。

本来の身分を隠して彩海学園に潜入している以上、学校行事に参加しておいたほうが任務に有利という、単なる戦術的な判断なのかもしれない。それでも、結果的に同世代の友人たちと一緒に休暇を過ごせるのだから、雪菜にとって悪い話ではないはずだ。

しかし雪菜は、なぜか不機嫌そうな目つきで、古城の横顔をむっつりと睨む。

「ラッキー……ですか？」

「良かっただろ。とりあえず宿泊研修に行ってる間は、姫柊も俺を監視しなくて済むんだし。年中つきまとってばかりじゃ気が休まらないもんな」

そう言って古城は明るく笑った。

雪菜が古城の前に現れておよそ二カ月あまり。その間、彼女は休みなく古城の傍にいて、監視役の任務を続けていたのだ。たまにはそんな役目を離れて、年相応にクラスメイトとの旅行を満喫してもバチは当たらないはずだ。

もちろん、一時的にせよ、雪菜の監視がなくなるのは古城としても素直に嬉しい。いくら雪菜が綺麗な子でも、凶器を持ち歩く国家公認ストーカーに四六時中見張られているのは、さすがに精神にこたえるのだ。

そして、そんな古城の反応に、雪菜はますます不機嫌な顔になって、

「ずいぶん嬉しそうですね、先輩」

「……え？」

「わたしがいなくなるのを先輩がそんな楽しみにしているとは知りませんでした。そうですか。ちょっとショックです」

本気で傷ついているような雪菜の言葉に、古城は慌てて言い訳する。

「いや、べつに楽しみにしてるわけじゃないけどな。ただ、姫柊がいない間は、少しは羽が伸ばせるかなと思っただけで――」

「だから心配だったんです！」

思い詰めたようにそう言って、雪菜は祈るような姿勢で目を伏せた。

「本当に、もう、わたしの目の届かないところで先輩がなにをしでかすか――」

「しでかさねーよ！　姫柊が来る前の状態に戻っただけだろ。二、四日ばかり目を離したからってなにも変わらねーよ！」

凶悪犯罪者を警戒するような雪菜の物言いに、古城は断固抗議する。しかし雪菜は拗ねたような半眼で古城を睨んで、

「こないだは、ほんの二、四時間ばかり目を離した隙に、優麻さんや紗矢華さんの血を吸ってましたけど……？」

「それをここで言うか!?」

赤面しながら言い返す古城。なにしろ吸血鬼の持つ吸血衝動の引き金になるのは性欲――つまり性的興奮なのだ。雪菜に指摘されてしまったせいで、あの夜、紗矢華たちとの間に行われた行為の記憶が、脳裏にフラッシュバックしてしまう。

「あのときは非常事態だっただろ！　あんな大事件がそうそうあってたまるか！」

「……そうですね。だったらいいんですけど」

雪菜がまだ少し不安そうに嘆息した。

「でも、先輩、本当に大丈夫ですか？　今回は凪沙ちゃんもいないんですよ？　朝、ちゃんと起きられます？　それに戸締まりや火の元の確認も――」

「どういう心配だよ。留守番くらい一人できるっての」

口うるさい保護者のような雪菜を見返して古城は苦笑した。

大丈夫だって。獅子王機関が休んでいいって言ってるんだから、姫柊が俺を心配する理由はなにもないだろ。余計な気は遣わなくていいから」

心配性の雪菜を安心させようと、古城は投げやりに言い放つ。

その瞬間、雪菜の瞳から感情が消えて、声の響きが冷え冷えとしたものに変わった。口の中でぼそぼそと抑揚のない呟きを繰り返す。

「……理由はない、ですか。余計、ですか……そうですか」

「あれ……えーと、姫柊、さん？」

雪菜の怒りの原因がわからず、古城は困惑の表情で呼びかける。

ちょうどモノレールが学校最寄りの駅のホームに到着したところだった。

3

教室には、バターの焼ける香ばしい匂いが漂っていた。ほどよく熱せられたフライパンの上で、かき混ぜられた刻みタマネギが音を立てている。

午前の授業は数班に分かれての調理実習。メニューはシーザーサラダとオムライス、ビーフシチューというハイカラな洋食三点セットだ。フライパンを操りながら調味料を流しこむ古城の慣れた手つきに、賛嘆の声を洩らしたのは矢瀬基樹だった。

「おお、やるなあ。古城」

「ホント。上手いねえ」

続けてクラス委員の築島倫が、芸達者なペットを褒めるような口調で言う。そしてエプロン姿の藍羽浅葱は、サラダ用のクルトンをつまみ喰いしながら、

「人間、やっぱりひとつくらいは取り柄がないとね」

「うるせーよ、おまえら！」

休みなく調理を続けながら、古城がうんざりしたように怒鳴った。

「他人事みたいに眺めてないで、少しは手伝えよ。なんで俺一人で全部作らされてんだ!?」

真剣に問い質す古城の姿を、ほかの三人は不思議そうに見返す。どうしてそんなわかりきったことを今更訊くのか、と言いたげな態度だ。

やれやれと首を振りながら、矢瀬が呆れたように息を吐く。

「ふっ、馬鹿だな、古城……築島はどうか知らんが、俺や浅葱が手伝ったりしたら、おまえの

手間が増えるだけだぞ」

「それって自慢げに言う台詞じゃねーだろ」

古城が低い声で言い返す。軽薄そうな外見からは想像もつかないが、たしかに矢瀬は大財閥の御曹司だ。倫や浅葱も意外といいところのお嬢だし、料理の経験がないのはわかる。しかし、いくらなんでもなにも手伝わないよりはマシだろう、と思ったのだが――

「甘いな。なにしろ、浅葱が小五のときに焼いたクッキーは、クラスの男子十四人を病院送りにした大量殺戮兵器だぞ。幸い俺はそれを予想して避難してたから無事だったが……」

「あんたね、その話を今ごろになって蒸し返す!?」

唐突に過去を暴露された浅葱が、真っ赤になって矢瀬に抗議した。

彼女の口振りから察するに、矢瀬が語った惨劇は本当にあった出来事らしい。ドン引きするクラスメイトたちの視線に気づいて、浅葱は慌てて咳払いし、

「……だ、だいたいね、そんな何年も前の情報で人を判断するなっての。あたしだって今は人並みに料理くらいできるわよ」

「へー」

「なによその疑いの眼差しは!?」

まったく信用していないという表情の矢瀬に、浅葱が手元にあった油をぶっかけた。古城が隠し味として用意しておいたペペロンチーノオイルだ。鷹の爪とニンニクを漬けこんだ激辛オ

イルを浴びて、矢瀬が顔面を押さえて悶絶する。

そんな幼なじみ二人のじゃれ合いを、倫は大人びた表情でクールに眺めて、

「まあまあ、いいじゃない、暁くん。料理の得意な男の子は恰好いいと思うよ。ね、浅葱」

「え!? ま、まあ、そういう説もあるかもね……一般論として。あくまで一般論として！」

唐突に話題を振られた浅葱が、上擦った声でぎこちなく答えた。しかし料理に追われている古城には、彼女の不自然な反応に気づく余裕はない。

「……恰好いいとか悪いとかじゃなくて、俺、人じゃ時間内に終わらないって言ってんだよ。せめて盛りつけだけでもいいから手伝えよ！」

「そういえば、暁くん家の妹さんの料理は美味しかったね」

倫がクスクスと笑いながら言う。古城は、ああ、まあ、と歯切れ悪く同意した。

実際、凪沙の料理の腕は、中学生にしてはなかなかのものだ。家を空けることの多い母親に代わって、家事を引き受けてきた成果である。古城もそれなりには料理ができるが、凪沙には遠く及ばない。

「料理関係は最近あいつに任せっきりだからな。うちの母親は冷凍ピザしか作れねーし」

「暁くんと結婚したら、あの妹さんの料理が一生食べられるのかな。だったらいいね」

「……いや、その理屈はおかしいだろ」

冷静に考えると意味不明な倫の言葉を、古城が溜息混じりに否定する。

だよな、と古城に同意したのは、オイルまみれの顔をタオルで拭いている矢瀬だった。
「凪沙ちゃんだって、そのうち嫁に行っちまうんだろうしな」
「嫁……？」
思いもよらない矢瀬の指摘に、古城が声を裏返らせた。懸命に冷静を装おうとするが、完全には動揺を隠しきれない。
「凪沙に限ってそんなバカな、あ、あいつに嫁のもらい手なんて……熱っ！」
「うわっ……なにマジになってんのキモッ……」
狼狽える古城を冷たく眺めて、浅葱が軽蔑したように呟いた。シスコンめ、という心の中の罵倒までもが、はっきり聞こえてきそうな冷淡な眼差しだ。
「う、うっせーな！　おまえらが余計なことを言い出すからだろ！」
「中等部の二年生ってもうすぐ宿泊研修じゃなかった。その間、食事はどうするの？」
浮き足立つ古城とは裏腹に、倫がマイペースに訊き返す。古城は額の汗を拭いながら、
「ああ、そうか。いや……特になにも考えてなかったけど、適当になんか買ってきて喰うかな。一人で自炊するのも効率悪いしな」
「ふぅん」
倫はますます愉快そうに目を細め、頬杖をついて浅葱を見上げた。
「せっかくだから、浅葱、作りにいってあげたら？」

「は、はい!?」
今度は浅葱が声を裏返らせる番だった。どちらかといえばクールで愛想に乏しい倫だが、浅葱をからかっているときの彼女は活き活きしているなあ、と古城は呆れる。
「な、なんであたしが……!?」
「料理、上手くなったんでしょ。暁くん的に、人でご飯食べるのも味気ないだろうし、浅葱と二人きりで食事するのもいいんじゃないかな、なんて――」
「ふ、二人きり……」
古城の様子をうかがうように、浅葱がちらりと視線を向ける。しかし古城は無反応。ビーフシチューに浮いたアクをとるのに、全神経を集中しているのだ。
「って、行かないわよ！　ご飯、外で食べるくらいならつき合ってあげてもいいけどね」
「へいへい」
むくれたような浅葱の言葉を、古城は適当に受け流す。倫と矢瀬は、なぜか二人で顔を見合わせながら、だめだこいつら、と溜息をついていた。
「なあ、古城。そういや、中等部の転校生ちゃんも宿泊研修に参加するのか？」
少しして、矢瀬が気を取り直したように訊いてきた。この男にしては奇妙に真剣な表情だ。
そのことを怪訝に思いながら古城は顔を上げ、
「姫柊はそう言ってたけど……それがどうかしたか？」

「あー……いやあ、ちょっとうらやましいと思ってな。あの子の私服姿や寝顔や入浴シーンが鑑賞できる千載一遇のチャンスだろ」

矢瀬は、すぐにいつもの軽薄な口調に戻って、ツンツンに尖らせた短髪をキュッと撫でる。

そんな古城たちの会話を聞いて、浅葱が不機嫌そうにぼそりと独りごちた。

「馬鹿じゃないの、あんたたち」

「俺はなにも言ってねえだろ」

矢瀬とひと括りにされたことに文句を言いつつ、古城は卵を割った。いつになく真剣な表情で、オムライス用半熟ふわとろ卵の準備を始める。

そんな古城の横顔を眺めながら、浅葱はちぎったレタスを勝手にバリバリと齧り、

「そっか……あの子もいないのか……そっか……」

誰にも聞こえないくらいの小さな声でそう呟いた。

古城の携帯電話がメールの着信音を鳴らしたのは、それから間もなくのことだった。

4

「はあ……美味しい」

夕方の明るい陽射しの中で、暁凪沙がとろけるような感嘆の声を出す。

商業地区ショッピングモール内のカフェテラス。屋外のテーブルに座って彼女が舐めているのは、三段重ねの巨大なアイスクリームだった。無数のトッピングで原形を留めないほどに飾り立てられ、名状しがたいことになっている豪華な代物だ。

同じテーブルを囲んでいるのは古城と雪菜。そして銀髪と碧い瞳の少女である。日本人離れした北欧系の美貌と、天使を連想させる優しげな雰囲気の持ち主――〝中等部の聖女〟こと叶瀬夏音だ。

「やっぱり、る家のアイスは最高だね。この芳醇な味わいとサッパリした後味が」

幼い子どものようにアイスにかぶりつきながら、凪沙が愉しげに解説する。やたらとお喋り好きなこの妹は、食事中でも黙っていられない性分なのだ。

どこのグルメレポーターだ、と心の中でツッコミながら、古城は不機嫌そうに頬杖を突いて、

「たく……大事なお願いっていうからなにかと思えば、荷物持ちかよ。おまえは目上の人間をなんだと思ってるんだ……」

「だから、お礼にアイスを奢ってあげてるでしょ。叮愛い妹の頼みなんだから、お買い物くらいつき合ってよ。こんな大きな荷物持ってたら、ゆっくりお店を回れないでしょ」

そう言って凪沙は、古城の足元に置かれた大量の買い物袋を指さした。宿泊研修に持っていく私服やバッグが二人分。引っ越しかと見間違われそうな大荷物である。

「旅行バッグならウチにもあっただろ」

中でもひときわ巨大な買い物袋を指さして、古城が言った。凪沙が店頭で衝動買いした下派手な色使いのボストンバッグだ。

しかし凪沙は、えーっ、と嫌そうに顔をしかめて、

「うちにあるバッグって、古城君が使ってたスポーツバッグのこと？　イヤだよ。だってあれ、男子バスケ部の部室の腐ったビブスの臭いがするもの」

「いくらなんでもそこまで臭くはねえよ！」

古城がムキになって言い返す。そんな兄妹の会話を聞いていた雪菜が、たまりかねたように小さく噴き出した。

凪沙が、もう、と拗ねたように頬を膨らます。

「だいたい古城君は贅沢なんだよ。こんな可愛い後輩女子と、緒にいられるのに。雪菜ちゃんや夏音ちゃんとお出かけできるなら、性転換してもいいって男子は大勢いるんだから」

「いくらなんでも、それはないだろ……大丈夫か、中等部の男子……」

古城は頭を抱えてうめいた。さすがに冗談だとは思うが、絶対にあり得ないと言い切れないところが恐ろしい。それくらい雪菜や夏音の容姿は規格外なのだ。若干、近寄りがたい種類の美しさではあるのだが――

「どうしたんだ、叶瀬。ぼーっとして」

会話に参加せず、ぼんやりと遠くを見ている夏音に気づいて、古城が訊いた。

透明感のある銀髪を揺らして、夏音が少し照れたように振り返る。

「すみません。アイスが美味しかったので幸せでした」

やけに庶民的な喜びを口にする彼女の笑顔に、古城は思わず目を奪われた。

アルディギア前国王の庶子として生まれ、なんの知識もなく、王族が持つ強大な霊力だけを受け継いだ。両親の記憶を持たず、幼いころから孤児として修道院で育てられた。だが、その修道院すら事故によって失われ、養父には模造天使と呼ばれる化け物に改造されそうになった――夏音の過去は、耐えきれないほどの苦難の連続だったはずだ。

にもかかわらず、彼女はこんなにも幸せそうに笑う。聖女という呼び名が相応しいと思えるほどに穏やかな表情で。

「よかったら、これも喰うか？」

顔を赤らめながら目を逸らし、古城はまるっとひと匙残っていたアイスのカップを差し出した。凪沙お気に入りのるる家のアイスは、古城には量が多すぎる。

夏音は嬉しそうに目を輝かせ、

「じゃあ、一口だけ……実はイチゴ味も気になってた、でした」

「それはよかった」

子犬のように喜んでいる夏音を見て、古城はホッと胸を撫で下ろす、と、

「あ、お兄さん。アイス、ついてます」

「え？」

そう言って、夏音が突然ナプキンで古城の唇を拭ってくれる。驚きのあまり硬直して、夏音になすがままにされていた古城は、不意に刺さるような視線を間近に感じて困惑した。

振り向くと、雪菜と凪沙が、ものすごい表情で古城を睨んでいた。

「え……と、おまえらもイチゴアイス喰いたかったのか？」

「違います」

「バカっ」

二人に冷たく罵られて、古城はわけがわからないまま顔を歪める。

凪沙は怒りにまかせて、残っていたアイスをガツガツと齧り終えると、

「そうだ、そこ入ろ！　そのお店！」

「え!?」

凪沙が指さした店を見て、古城と雪菜がほとんど同時に声を洩らす。ピンクを基調にした可愛らしい店構え。ショーウィンドウに飾られているのは、ゴージャスなランジェリー姿のマネキンだ。どこからどう見ても下着屋である。

どんな嫌がらせだ、と古城は唇を歪めたが、雪菜と夏音は、少し興味を惹かれたような表情を浮かべていた。意外に満更でもないらしい。

「ほらほら、タイムセールやってるみたいだし。やっぱり旅行のときは下着にも気を遣わないとねー」

あれなんか雪菜ちゃんに似合いそう。夏音ちゃんも任せて。ばっちりコーディネートしてあげるから。あ、古城君は外で待っててよ！」

「頼まれても中には入らねーよ！」

ためらう雪菜と夏音の手を引いて、凪沙が下着屋に入っていく。

彼女たちの背中を見送って、古城はぐったりと溜息をついた。

凪沙の買い物につき合わされて疲れるのはいつものことだが、今日はいつもより更に彼女のテンションが高い気がする。それだけ今度の旅行を楽しみにしているのだろう。

正直つき合いきれんな、と思わないでもないが、凪沙にははしゃぐだけの理由がある。彼女は四年前に魔族がらみの事故で重傷を負って、長い病院暮らしをしていたのだ。退院して初めての島外への旅行――少しばかり浮かれるのも無理はない。

調子に乗って羽目を外さなければいいが、などと兄らしい感慨に耽っていた古城は、見慣れない男が近づいてくることに気づいて顔を上げた。

純白のマントコートに、赤白チェックのネクタイと帽子。左手には銀色のステッキを握っている。見た目の年齢は二十歳前後だが、それよりずっと年老いているようにも、幼くも見える。奇術師めいた印象の胡散臭い男だ。古城の前に立ち止まり、帽子に手を当てて挨拶をする。

「どーも」

「ちっす」

古城も立ち上がって挨拶を返す。元体育会系の条件反射で、こんなときにはつい礼儀正しくなってしまうのだ。そんな古城の反応が意外だったのか、男は愉快そうに目を細めて笑った。

その目は、鮮血のようにおぞましく赤い――

「今の銀髪の彼女、綺麗な子だね」

「ええ、まあ」

馴れ馴れしい男の態度に警戒しながらも、古城は素直に肯定した。とりあえず否定する理由はなにもない。

「ずいぶん仲が良さそうだったけど――もしかして彼女、きみの恋人？」

「いや、ただの後輩だよ。妹の友人なんだ」

誤解されるのも面倒なので、ありのままを答えておく。敬語を使う気になれないのは、男がまとっている禍々しい気配に気づいたからだ。血の臭い――だ。

それよりも、あんたは誰なんだ？　芸能事務所のスカウトマンには見えないけどな？」

「僕か。僕は、真理の探究者だよ」

「……は？」

予想の斜め上から返ってきた男の言葉に、古城は一瞬唖然とした。

その直後、男の右腕から、蛇のようにのたうつなにかが放たれた。

金属質の輝きを帯びた、粘性の強い黒銀色の液体だ。それは古城の腕に巻きついて、そのまま古城の肉体を浸蝕しようとする　身体が融けていくような、強烈な違和感と奇妙な快感だが、古城の薄皮一枚を融かしたところで、黒銀の液体は突然、沸騰したように弾け飛んだ。過大な電流で焼き切れた電気回路のように、巨大すぎる古城の魔力に耐えきれずに爆散、消滅したのだ。

「なんだ……こいつは!?」

肌に残る異様な感触に顔をしかめて、古城は男を睨みつけた。

もしも古城が普通の人間で、今の粘液に完全に浸蝕されていたらどうなっていたのか、あまり想像したくはなかった。ろくでもない結末が待っていたのは確実だ。

「ふぅん。あれを防ぐのか。さっきから妙な気配がすると思ったら、きみ、人間じゃないね」

自分の右手を眺めながら、男が不機嫌そうに目を眇めた。

「未登録魔族……吸血鬼か。アルディギア王家が寄越したボディガードってわけでもなさそうだけど、まあいいや。できれば目立たないように殺したかったんだけどな――」

「う――!?」

男が再び右腕を掲げた。

その指先から、再び黒銀の液体が迸る。それは細く鋭い刃物と化して、凄まじい速度で古城を横薙ぎに襲った。吸血鬼化した古城の反応速度でも、攻撃の軌道を完全には見切れない。

ギリギリで地面に伏せた古城の背後で、街灯の支柱が真っぷたつに切断されていた。

ただの粘液ではこうはならない。水銀並の比重を持つ液体金属に、高圧をかけて刃を形成し、自重と遠心力を利用して攻撃力を生みだしているのだ。

「おまえ……叶瀬を誘拐する気か……!?」

男の第二撃を必死でよけながら、古城は硬い声で訊き返す。

彼は夏音がアルディギア王家の関係者だと知っていた。身代金目的か、あるいは政治的な理由か——とにかく夏音を誘拐しようとしている可能性は高い。肉体の浸蝕などという、まどろっこしい手段で古城を殺そうとしたのも、怪しまれずに夏音に接近するためだろう。

「誘拐……? どこかに連れていくってことかい?」

しかし男は、あからさまに軽蔑したように笑った。

「それだけの魔力を持ちながら、くだらないことを気にするんだな、吸血鬼! あの子はもうどこにもいけない。ただの供物になってもらおうと思っただけだよ」

「供物……!?」

「なんだ、気づいてなかったのか」

ハッ、と男が冷たく言い放つ。古城の無知を哀れむような声だ。

「その様子じゃ、五年前にアデラードの修道院で起きた事件のことも知らないみたいだな」

「どういう意味だ——!?」

建物の陰に身を隠し、古城は苛立ちながら訊き返す。

黒銀の刃を操る男の攻撃力は脅威だが、第四真祖である古城の敵ではない。古城が眷獣を召喚すれば、一瞬で彼を消滅させることができるだろう。

吸血鬼が自らの血の中に従える眷獣とは、それほどまでに凄まじい力を持つ召喚獣なのだ。ましてやそれが世界最強の吸血鬼の眷獣であれば、尚更だ。

だからこそ古城は眷獣を使えない。こんな街中で第四真祖の眷獣を解放すれば、街にどれだけの被害が出るかわからないからだ。下手すれば、近くにいる凪沙たちをも巻きこんでしまうことになる。

幸い、カフェテラスにいた客や店員たちは、男の攻撃が始まると同時に脇目も振らずに逃げ出していた。さすがに〝魔族特区〟の住人だけあって、この手の騒ぎには慣れているのだ。

野次馬たちの目を気にしなくて済むのは助かるが、間もなく彼らの通報を受けて、武装した特区警備隊の隊員たちが押し寄せてくるだろう。未登録の吸血鬼である古城としても、特区警備隊とは関わり合いになりたくない。そう思っていても、古城になにができるわけでもない。まともに反撃することもできないまま、ただ古城の焦りだけが募っていく。

「気にすることはないよ。真実を知る前に、きみは死ぬ!」

「くっ——!?」

黒銀の刃の一閃が、コンクリートの壁を斬り裂いた。崩れ落ちた破片が古城の退路を奪う。

建物の陰に隠れたのは古城の失策だ。この狭い路地裏では、男の次の攻撃をよけきれない。

黒銀の刃が断頭台のように、古城の頭上へと振り下ろされてくる。
それを真正面から受け止めたのは、銀色に輝く長槍の刃だった。
美しい弧を描く銀の斬撃が、黒銀の刃を呆気なく斬り裂き、古城を救う。
「姫柊――!?」
小柄な槍使いの正体に気づいて、古城が叫んだ。第四真祖の監視役である彼女が、古城の危機に気づいて店を抜け出してきてくれたのだ。
ふわり、と制服のスカートを翻して雪菜は着地。謎の襲撃者を睨んで油断なく身構えた。
「ご無事ですか、先輩?」
「ああ、サンキュ。助かった」
古城が脱力して頼りなく息を吐く。
赤白チェック帽子の男は、乱入してきた槍使いの少女を無言で睨みつけていた。
男の右腕は、手首から先が失われている。雪菜が切断した黒銀の刃は、液体金属と融合した彼の肉体の一部だったのだ。
「先輩……あちらの方は?」
「さあな。真理の探究者とか言ってたが」
雪菜の質問に、古城は投げやりな口調で答えた。ふざけているとしか思えない肩書きだが、本人がそう名乗ったのだから仕方ない。

「……探求者……なるほど」
怒られるかとも思ったが、雪菜は、あっさりと古城の言葉を受け入れた。その事実に古城は逆に不安になる。そんなに有名な職業だとは、とても思えないのだが――
「〝七式降魔突撃機槍〟……そういえば、獅子王機関の剣巫が、第四真祖の監視役に派遣されてきたという噂があったっけ」
気怠げな口調で言いながら、男はその場に屈みこんだ。
彼の足元には、切断された街灯の支柱が転がっている。長さ二、四メートルあまりの鉄柱だ。重量もかなりのものだろう。男の右腕が触れた瞬間、その鉄柱が飴のように融け崩れた。
融解した鉄柱の表面が、濁った鮮血のような黒銀色に変わっていく。
「なんだ……!? あいつの腕が……」
古城たちが呆然と見守る前で、鉄柱は男の腕に吸収された。
そして切断されていたはずの彼の右手が復活する。男は鉄柱を融合することで、失われた肉体の一部を復活させたのだ。
「やはり、錬金術師……!」
雪菜が静かに呟いた。
古城が小さく息を呑む。〝魔族特区〟の住人である以上、もちろん古城も錬金術師の存在は知っている。万物の組成を操り、黄金を生み出す者。神の技を暴き、生命の謎を解き明かそう

とする永遠の探求者――彼は最初から、自らの正体を古城に明かしていたのだ。

「剣巫と第四真祖が相手では、さすがに分が悪いな。叶瀬夏音の始末は諦めるのが正しい判断か」

そう言って錬金術師は、古城たちに背を向ける。このまま逃走するつもりなのだ。

「待て、てめェ！　赤白チェック――！」

「駄目です、先輩――！」

相手の素性がわからない以上、ここで男を見失うのは危険だ。咄嗟にそう判断して、古城は錬金術師のあとを追おうとした。

「うおっ!?」

そんな古城の眼前に、金属の塊が倒れてくる。

金属塊の正体は樹木だった。道路沿いに植わっていた巨大な街路樹を、錬金術師が鋼鉄へと変えたのだ。無数の枝は鋭い棘となり、生い茂る葉は刃へと姿を変えていた。ぶつかれば当然、無傷では済まない。古城は地面を転がって、どうにか下敷きを免れた。

ボロボロになった古城が起き上がったときには、錬金術師の姿は消えている。

「なんだったんだ……あいつ……！」

古城はクソッと呟きながら、行く手を塞ぐ樹木の幹を蹴飛ばした。

しかし爪先から伝わってきたのは、重い金属の塊を蹴りつけた衝撃と痛みだけだった。

巨大な樹木を、触れただけで鋼鉄に変える――否、樹木だけではないだろう。おそらく彼は、ありとあらゆる物体を自在に金属に変えることができるはずだ。

その能力の凶悪さを理解して、古城はあらためてゾッとする。

液体金属の刃も恐ろしい武器だが、それ以上に、この物質変成の術は危険だった。

肉体を金属に変えられてしまったら、不老不死の吸血鬼といえども復活できるという保証はない。あの錬金術師が最初から物質変性を使っていたら、古城は出会い頭に殺されていたかも知れないのだ。

「――今の錬金術師、叶瀬さんを狙っていたんですか？」

構えていた槍を下ろしながら、雪菜が訊いてきた。

ああ、と古城は苦い表情でうなずく。

「五年前の修道院の事件がどうとか言ってたが、それ以上はなにも聞き出せなかった」

「修道院……」

呟く雪菜の声を聞いて、古城は思い出す

夏音と修道院、そして五年前。それらの手がかりから導き出される答えは自明だった。

叶瀬夏音がいた修道院は、五年前に大勢の死者を出し、閉鎖された――

あの錬金術師が夏音に接近した理由は、その事件と無関係ではないのだろう。

逆に言えば、彼の正体につながる唯一の手がかりが、五年前の事件ということだ

「とりあえずそれはあとで調べてみるとして……ありがとう、姫柊。さっきは助かった」

近くの壁にぐったりともたれて、古城は雪菜に向き直る。

カフェテラス周辺の風景は、ひどい有様になっていた。何本もの街路樹が薙ぎ倒され、数軒の建物が半壊している。修理にかかる費用はざっと数千万円といったところだろうか。

だが、この程度の被害で済んだのは、むしろ幸運だったのだ。

あのとき雪菜が来てくれなかったら、錬金術師の攻撃で殺された古城の眷獣が暴走して、この周囲一帯は焦土と化していただろう。危うく絃神島が消滅するピンチだったのだ。

当然そのことを理解している雪菜は、疲れたようにそっと溜息をついて、

「当然のことをしただけです。わたしは先輩の監視役ですから」

「ああ、だけど、サンキュ」

「いえ……」

古城が重ねて礼を言うと、雪菜は黙りこんで照れたように顔を伏せた。

そのとき古城は、不意にとんでもない事実に気づく。心臓が大きく脈を打ち、全身から汗が噴き出した。とてつもなくまずい状況だ。

「そ、そういえば、姫柊、凪沙たちは……？」

「大丈夫です。二人は試着室に入っているので、急いで戻れば気づかれないと思います」

「試着って……じゃあ、姫柊もそれで……」

「いえ、わたしは店員さんにサイズを測ってもらっていただけで、まだ……」

そう言いかけたところで、雪菜はハッと自分の胸元を見下ろした。

彼女の制服のシャツのボタンは、すべて外れたままだった。

古城たちの戦闘の気配を感じて、慌てて下着屋を飛び出してきたせいだろう。全開になっていたシャツの合わせ目から、眩しいほどに白い素肌と、清楚な下着の一部が見えている。

「ひゃうっ……!?」

声にならない悲鳴を上げて、雪菜がその場にうずくまった。襟元をしっかりと引き寄せて、恨みがましい目つきで古城を睨む。

「せ、先輩……いつから気づいてたんですか……!?」

「な、なんのことだろう……」

古城は機械のような棒読みでそう言った。この危地を乗り切るには、なにも見なかったことにするしかない、と本能が訴えている。

「もしかして、さっきの〝ありがとう〟というのは……」

「ち、違う！　べつにいいものを見せてもらったとか、そういう意味じゃねえ――！」

「大丈夫です　わかってますから。先輩がそういういやらしい吸血鬼だってことは」

「わかってねえ！　全然わかってねえだろ　――！」

古城は必死に身の潔白を訴えるが、雪菜は頬を膨らませたまま、目を合わせようともしなか

った。ただうろたえる古城の気配を背中に感じながら、小さく口の中だけで呟く。

「そんなことだから目を離すのが不安なんですよ……もう……」

5

翌朝――

いつもより早めに登校した古城は、学校に着くなり真っ直ぐに職員室棟校舎へと向かった。

正確な行き先は最上階。南宮那月の執務室だ。

ちなみに雪菜と一緒でないのは、昨日のブラチラ事件以来、彼女が口を利いてくれなかったせいである。だがそれは、古城としても好都合だった。雪菜は明日から休暇なのだ。なるべく余計な心配をかけずに学校行事に参加させてやりたい、と思う。

「悪い、那月ちゃん。ちょっと訊きたいことがあるんだけど――」

分厚い木製の扉を開けて、古城は那月の部屋に入りこむ。そして次の瞬間、

やべェ　と、古城は、条件反射的に立ち止まって頭部をガードした。

彩海学園英語科教師、南宮那月二十六歳は、幼女のような小柄な体軀の持ち主でありながら、いやむしろそれゆえに、生徒に舐められるのを嫌っている。那月ちゃん呼ばわりなどもってのほかだ。そんな口を利く無礼な生徒に対しては、体罰の執行も辞さない横暴教師なのだ。

しかし警戒する古城を嘲笑うかのように、なぜか今日はいつまで待っても那月の攻撃は襲ってこなかった。代わりに部屋の奥から聞こえてきたのは、感情の籠もらない冷静な声だ。

「おはようございます、第四真祖」

「……アスタルテ？」

天鵞絨のカーテンで覆われた窓際に、ほっそりとしたメイド服姿の女性が立っていた。

透きとおるような白い肌と、薄い水色の大きな瞳。完全に左右対称の整った顔立ち。生物としての匂いが希薄な、芸術品めいた印象の少女。人工生命体――アスタルテだ。

かつてロタリンギアの殲教師によって兵器として造り出された彼女だが、現在は那月に保護されて彩海学園で事務員として働いている。事務員なのにメイド服を着ているのは、単純に主人である那月の趣味なのだが。

「おまえ一人だけなのか？　那月ちゃんは？」

部屋の中を見回して、古城が訊く。分厚い絨毯に覆われた豪華な執務室。しかし那月が愛用する年代物のチェアの上に、彼女の姿は見あたらない。

「南宮教官は不在です　先ほど警察局からの依頼で外出されました」

「警察局……？」

アスタルテの回答に、古城は不吉な予感を覚えた。

南宮那月のもうひとつの肩書きは国家攻魔官。〝魔族特区〟内の教育機関には、生徒保護の

ため、攻魔師資格を持つ職員を一定の割合で配置することが義務づけられており、那月もそんな兼任攻魔師の一人なのだ。

しかも彼女は〝空隙の魔女〟の異名を持ち、特区警備隊の実技指導も行う絃神市でも屈指の実力者である。

そんな那月が、このタイミングで、警察局に呼び出されたというのが気になった。昨日のカフェテラスの騒動が無関係とは思えない。

「なにか悩み事でしょうか、第四真祖？」

青ざめている古城を見て、アスタルテが訊いてくる。いや、と古城は曖昧に首を振り、

「悩みっていうか、ちょっと相談があったんだ。プライベートな内容で」

「認識。私でよければご相談に乗りますが」

「ああ……そうか。じゃあ、とりあえず教えて欲しいことがあるんだが――」

「回答します――〝今週のあなたは恋愛運が好調。小うるさい監視役が不在の隙に、クラスのちょっと派手派手しい女子を自宅に連れこんで押し倒すといいでしょう〟」

「誰が恋愛相談に乗ってくれって言ったよ!?」

真顔で珍妙なアドバイスを始めた人工生命体を、古城は力いっぱい怒鳴りつけた。

アスタルテは無感情な瞳で古城を見つめたまま、

「思春期の男子生徒への助言というのは、こういうものではないのでしょうか？」

「いやまあ、そういう悩みを抱えてるやつも多いかもしれないけど――ていうか、なんだその具体的かつ犯罪教唆ギリギリの危険な占いは!?」

「南宮教官によれば、他人に相談する人間のほとんどは、すでに本人の中で答えが出ている。だから本人がやりたいことを、そっと後押ししてやるのが助言者の務めだ、と」

「そこだけ聞いてると、那月ちゃんがまともなことを言ってるような気がするんだが……って、なにを根拠に、俺が浅葱を押し倒したがってるって判断した!?」

「ほかの女子のほうがよかった、という意味でしょうか？」

「判断が間違ってるのはそこじゃねえ！」

ぜえぜえと荒い息をつきながら、古城は頭を抱えた。アスタルテは皮肉や冗談を言っているわけではなく、本人はあくまでも大真面目なので扱いづらい。

「とりあえず、お茶をどうぞ」

部屋の奥にあったバーキャビネットから、アスタルテがティーカップを運んでくる。蒸らし終えたティーポットから彼女が紅茶を注ぐと、華やかな香気がふわりと広がった。

「美味いな……」

カップを口に運んで、古城は驚く。紅茶にやたらとうるさい那月が給仕を任せているだけあって、アスタルテの淹れた紅茶は驚くほど美味だった。専門的なことはわからないが、古城がこれまでに飲んだことのある紅茶とは別次元の飲み物だ。

感動している古城を見ても、アスタルテはほとんど表情を変えない。けれど彼女の水色の瞳は、いつもより少しだけ明るく輝いている気がした。

「なあ、アスタルテ……人工生命体って、錬金術で生み出されたんだよな」

紅茶を飲んで落ち着いたところで、ようやく古城は本来の用件を切り出した。

アスタルテは無表情なまま静かにうなずく。

「肯定。現代の人工生命体は、生物工学や医学による影響を強く受けていますが、基礎理論はあくまでも錬金術の延長線上にあります」

「だったら、わかるか？　錬金術師の目的ってなんなんだ？」

人工生命体の少女を見上げて、古城が訊く。

錬金術によって造られたアスタルテは、生まれる前から錬金術に関する基本的な知識を刷りこまれている。そこからなんらかの手がかりが得られる可能性は高かった。例の赤白チェックの錬金術師についての手がかりだ。

「ひと括りに錬金術師といっても様々な階梯の術者が存在しますが、究極的には、錬金術の目的は人間の限界を超えて〝神〟に近づくことです」

占い記憶を探るように目を細めて、アスタルテは淡々と質問に答えた。

「神？　鉄や鉛を金に変えることじゃないのか？」

「黄金変成は、錬金術師が〝神〟に近づく過程で生じる副産物です。すべての不完全なものを完全な存在に変えることが、錬金術の原理ですから」

「そうか……人間を神に変えられるんだから、鉛を金に変えるくらいは余裕ってことか」

古城は、赤白の錬金術師が樹木を一瞬にして鋼鉄に作り替えたことを思い出す。

錬金術師の理屈でいえば、いずれ寿命が尽きて枯れる樹木よりも、不滅に近い鋼鉄のほうが、完全に近い存在ということになるのだろう。

「だけど、神になるって、具体的にどうすればそんなことができるんだ……？」

「〝神〟という言葉の定義が曖昧なため回答不能。ただし肉体を保ったまま永遠に近い生命を手に入れるということであれば、過去に成功例があります」

アスタルテがあっさりと答えたことに、古城は驚く。

「成功例？」

「ひとつはあなたです、暁古城。人間として生まれながら、吸血鬼の力を手に入れた四番目の真祖。ただしそれはいわゆる〝神〟とは対極に位置する存在ですが――」

「思いっきり失敗してるじゃねえかよ……」

がっくりと肩を落としながら、古城は恨みがましく呟いた。

吸血鬼はたしかに不老不死だが、その力の源は、神の祝福とは正反対の〝負〟の生命力だ。死して天界に召されることもなく、転生することも、成仏することもない。悪性の病にも似た、ただ生き続けるだけの怪物――たとえ何万年生き続けようとも、吸血鬼が神に進化するこ

とはあり得ない。不完全な失敗作以外の何者でもないだろう。

「で、もうひとつは？」

「〝賢者の霊血〟です」

「なんだ、それは？」

古城は真顔で訊き返す。聞き覚えのない言葉だった。

アスタルテがゆっくりと首を振る。

「詳細不明。ですが、ニーナ・アデラードは、自ら創製した〝賢者の霊血〟の力を借りて、不滅の肉体と無尽蔵の魔力を手に入れたと伝えられています」

「アデラード……!?」

古城は小さく息を呑んだ。昨日の錬金術師の言葉が脳裏に甦る。アデラードの修道院――彼はたしかにそう告げた。五年前にそこで事故があった、とも。

「古の大錬金術師。伝説上の人物です。生きていれば、二百七十歳を超えているはずですが」

そう言ってアスタルテは沈黙した。彼女に刷りこまれた知識は、それですべてなのだろう。だが手がかりは見つかった。古城が求めていた手がかりが。

授業開始のチャイムが鳴る。しかし古城は黙りこんだまま動かない。頭の中が混乱している。情報を整理する時間が必要だ。

「お茶、どうぞ」

アスタルテが古城のカップにおかわりを注ぐ。古城と向かい合って座る人工生命体の少女は、やはり少しだけ――ほんの少しだけ、いつもより愉しそうだった。

6

「アデラード修道院……？」

茹でたてのパスタを口いっぱいに頬張った浅葱が、ちょこんと首を傾げて訊き返してくる。

昼休みの学生食堂だ。腹を空かせた生徒たちでぎっしりと混み合う喧噪の中、古城は彼女と、狭いテーブルに隣り合わせに座っている。

「あー……そういえば、そんな名前だったかも。展望公園の裏にある幽霊屋敷でしょ？」

「なんで修道院に錬金術師の名前がついてるんだ？」

古城は声を潜めて訊いた。やはり叶瀬夏音が暮らしていた修道院には、古の大錬金術師とやらの名前が冠されていたらしい。錬金術師と修道院。どことなく違和感を覚える組み合わせだ。

しかし浅葱は、特に悩む素振りも見せず、

「その錬金術師が設立したんじゃないの？　でなきゃ、修道院の院長やってたか」

「いやだから、錬金術師が修道院を建てるって、おかしくないか？」

「そうでもないわよ。錬金術は異教の魔術の影響を強く受けてるし、禁呪まがいの危険な術も

多いからね。弾圧されないように、国王や教会に多額の寄付をする連中が多かったわけ」

中学の世界史でやったでしょ、と呆れ顔で言われて古城は沈黙する。言われてみればそんな話を、どこかで聞いたような朧気な記憶がある。〝魔族特区〟内の授業カリキュラムでは、義務教育に含まれている程度の初歩的な知識だったらしい。

「結局、世の中は金次第ってことか……」

「まぁね。実際、金に困った王侯貴族や教会関係者が、自ら錬金術に没頭することも多かったみたいだし。よくある話よ」

そう言って浅葱は、二枚目の大盛りパスタ皿に手を伸ばす。スリムな見た目に反して、彼女はかなりの大喰いだ。パスタ二人前程度であれば、浅葱にしてはセーブしているほうである。

隣で見ている古城のほうが腹いっぱいになりそうだ。

「昔、大きな事故があったんだよな？　事故の原因ってわからないか？」

うーん、それはさすがに覚えてないな。小学生のころの話だし……危ないから近づくなって言われてたしね」

「そうか……五年も前のことだしな……」

古城は落胆したように肩をすくめる。

五年前といえば古城は小学生で、まだ絃神島にはいなかった。当時のことを知っている同級生も多くはない。生粋の〝魔族特区〟育ちである浅葱には少し期待していたのだが、そうそう

上手くはいかないようだ。

「あれ？」

食事の片手間にスマートフォンを弄りだした浅葱が、画面を睨んで不機嫌そうな声を出す。事故の記録を調べようとしたが、どうやら上手くいかなかったらしい。

「なんだ？」

「検索かけても出てこない……データが消されてる？」

「古い事件だから、記録が残ってないんじゃないのか？」

「人工島管理公社のアーカイヴよ。島内のコンビニでその日に売れた肉まんの数まできっちり記録されてるわよ」

突き放すような口調で浅葱が言う。その言葉に不気味なものを感じて、古城は顔をしかめた。

「それはそれで、ちょっと嫌だな。監視されてるみたいで」

「なにを今更」

それが情報化社会ってもんでしょ、と浅葱は素っ気ない。

「だったらなんでその事故の記録だけ消えてるんだ？」

「誰かが故意に消したんでしょ。人工島管理公社に行ってログを漁れば、なにかわかるかもしれないけど……でもこれは下手に突っつかないほうがいいかも。ちょっと危ない気がする」

「人工島管理公社自身が黒幕かもしれないってことか……？」

「もしかしたら、もっとヤバい連中かもね」

そう言って浅葱は、スマートフォンの電源を落とした。

一部の親しい人間しか知らないことだが、浅葱の特技はハッキング。それも人工島管理公社の保安部が、破格の高給で雇うほどの天才的な技術の持ち主だ。その浅葱がヤバいと口にするからには、本当に危険な状況なのだろう。

昨日の赤白の錬金術師といい、管理公社のデータ改竄といい、どうやらアデラード修道院の事故の背後には、予想以上に大きな秘密が隠されているらしい。

「ていうか、あんた、そんな何年も前の事故の話をするためにあたしを呼び出したわけ？　ほかになんか訊くことないの？　あ、明日からの予定とか――」

浅葱が不満そうに唇を尖らせて文句を言う。しかし古城は、ああ、と上の空で呟いて、

「悪い、浅葱。用事ができた。ちょっと出かけてくる」

「……は？」

トレイを持って立ち上がる古城を、浅葱が唖然とした表情で見上げてくる。

「午後の授業は欠席するんで、上手いこと言っておいてくれ」

「ちょっと、古城！　待てこら！」

皿に残っていたパスタを怒濤の勢いでかきこんで、浅葱が乱暴に立ち上がった。玄関ホールの靴箱に古城が辿り着く前に、短距離メダリストばりのストライド走法で追いついてくる。

「なんでついてくるんだよ!?」
「あんたこそ、学校抜け出してどこまで行く気よ?」
鬼気迫る表情で問い詰められて、古城は言いづらそうに目を逸らした。
「修道院の跡地を見に行くだけだって。気になることがあるんだよ。それを確認するだけだ」
早口でそう言い残して、古城はさっさと校舎の外に出た。
しかし浅葱は、革靴に履き替えて追いかけてくる。
「なによ? 気になることって?」
「いや……ちょっと、猫がな……」
「は? 猫……?」
要領を得ない古城の返答に、浅葱の機嫌は更に悪化したようだった。彼女がこんなふうにヘソを曲げたら、もはや説得するのは不可能だ。古城の目的を見届けるまでは、死んでも喰らいついてくるに違いない。
まあそれでもいいか、と古城は思う。
古城が修道院に向かっている目的はふたつ。ひとつは事故現場の確認である。事故から五年も経っているとはいえ、なにか手がかりが残っているかもしれないからだ。
そしてもうひとつの目的は、猫だった。
あの修道院の跡地では、叶瀬夏音が、拾ってきた子猫たちの世話をしていたことがあるのだ。

そのときの猫たちは、古城と凪沙の協力で、無事に全員もらわれていった。
しかし、あれからすでに数週間。夏音の性格からして新たな猫を拾っていないとも限らない。それはまずい展開だ。なにしろ例の錬金術師のことがある。
夏音が再び修道院跡地に出入りしてることを知ったら、あの赤白の錬金術師は、嬉々として彼女を襲ってくるだろう。それだけは断固として阻止しなければならない——と言っても、今の古城にできるのは、猫の在否を確認して、もしも猫を発見した場合には、修道院跡地から連れ出すことだけなのだが。
なんにしても、たいした危険はないだろう。浅葱がついてきても問題ないはずだ。そんなことを考えながら、古城は見晴らしのいい丘の上に辿り着く。と、
「——痛ェ!?」
突然横殴りに襲ってきた衝撃に、古城の身体が吹き飛んだ。瞬遅れて、ズン、という鈍い振動が頭蓋骨の芯に響いてくる。
まったく攻撃の気配を感じさせない、見えない衝撃。何者かが空間をすっ飛ばしながら、鈍器で殴りつけてきたようなダメージだった。
「こ、古城!?」
いきなりぶっ倒れた古城を見て、浅葱が慌てて駆け寄ってくる。
彼女は謎の攻撃の存在に気づいていない。普通に歩いていたはずの古城が、いきなり茂みの

中に倒れこんだと思っているはずだ。

来るな、と浅葱を遠ざけようとした古城は、視界の端に映った人影に気づいて表情を凍らせる。

「浅葱――っ！」

「えっ!?　ええっ!?」

古城にいきなり強く手を引かれて、浅葱が大きくバランスを崩した。背中から仰向けに倒れそうになった浅葱を抱き留めて、古城はそのまま彼女の口を塞ぐ。

「騒ぐな、静かに！」

もごもごとうめく浅葱の耳元に、古城が荒っぽく囁いた。

「や、やだ……こんなところじゃ……」

言葉とは裏腹に浅葱の抵抗は弱々しい。かすかに瞳を潤ませながら、しおらしい表情で古城を見上げる。しかし古城は、そんな浅葱の態度を、まったく気にも留めていなかった。

無反応な古城を戸惑ったように睨んで、浅葱は低い声を出す。

「……古城？」

「なんだ、あいつら」

「へ？」

古城の視線を追って、浅葱はのろのろと首を巡らせた。

彩海学園から徒歩十分足らず。緑の木々に覆われた小さな公園だ。その奥には灰色の小さな建物が見える。それが古城たちの目的の修道院だった。

そして修道院の周囲には、ボディアーマーと銃器で武装した男たちの姿がある。周囲を警戒する彼らの物腰は、明らかに訓練された戦闘員のものだった。

「――特区警備隊の拠点防衛部隊だな」

困惑する古城たちの背後から、静かな声が聞こえてくる。

舌足らずでありながら妙なカリスマ性を感じさせる口調と、謎の威圧感。振り返った古城の目に映ったのは、フリルまみれの日傘を掲げた豪華なドレス姿の女性だった。

「な、那月ちゃん!?」

思わず口走った古城の額に、南宮那月が扇子の角を突き立てる。

それほど力のある攻撃にも見えなかったが、古城は、ぐお、と頭をのけぞらせて悶絶した。

「授業を抜け出して、こんなところでクラスメイトを押し倒すとはいい根性だな、暁古城。おまえはもっとヘタレだと思っていたが、少し見直したぞ。悪い意味で」

皮肉っぽい口調で那月が言った。

どうやら最初に古城を襲ってきたのも、彼女の攻撃だったらしい。あの攻撃がなかったら、古城たちは修道院を監視する警備員たちに発見されて、面倒な取り調べを受けていたはずだ。いちおう助けてもらった、ということになるのだろう。

もっともそれはそれとして、学校をサボっているところを担任教師に捕まったという事実に変わりはないわけだが――

「藍羽、おまえももう少し相手を選べ。これだから見た目だけビッチな万年処女は……」

「うう、ほっといてください……ビッチじゃないし……」

浅葱が弱々しく反論する。ひどい言われようだが、完全には否定できなかったらしい。

「それより那月ちゃん、なにがあったんだ？　特区警備隊が、どうしてこんなところにいるんだよ？」

落ちこむ浅葱はとりあえず放置して、古城が訊く。那月は、ふん、と鬱陶しげに鼻を鳴らし、

「下手に嗅ぎ回られても厄介だから教えてやろう。他言するなよ。特に中等部の連中にはな」

そう言って彼女は、再び扇子を一閃した。

ぐしゃり、と潰れるような音を立て、那月の足元に小動物が落ちてくる。

よく見ると、それは折り紙で作られたリスだった。紙の表面に描かれているのは複雑な呪文と魔法陣。見覚えのある几帳面な筆跡は雪菜のものだ。どうやら学校を抜け出したあたりから、古城たちは、雪菜の式神にずっと監視されていたらしい。

それを撃ち落としたということは、この先の話を雪菜に聞かせたくない、ということか。

「叶瀬賢生を覚えているな」

那月の唐突な質問に、古城は、陰気な魔導技師の顔を思い出す。

「中等部の叶瀬の親父さんだろ　司法取引で減刑されたって聞いたぞ？」

「そうだ。〝仮面憑き〟事件の容疑者として、管理公社の施設で保護観察処分を受けていた」

「あのオッサンが、どうしたんだ？」

不吉な予感を覚えて、古城はうめいた。なぜここで夏音の父親の名前が出てくるのか――？

「一昨日、叶瀬賢生は何者かに襲撃された。一命は取り留めたが、重傷だ」

「襲われた……!?」

古城は驚いて立ち上がる。叶瀬賢生が襲撃され、その翌日には彼の娘が狙われた。ふたつの事件が無関係とは思えない。

「……犯人は赤白チェック模様の錬金術師か？」

「天塚汞を知っているのか？」

那月が、ほう、と意外そうに眉を動かした。古城は小さく首を振る。

「名前は知らない。だけど、昨日そいつに会ったんだ。叶瀬を狙ってるみたいだった」

「そうか……わかった。叶瀬夏音には護衛をつけるが、本人たちには、賢生が襲われたことは知らせるな。連中には予定どおり宿泊研修に行ってもらう。おそらくそのほうが安全だ」

「絃神島の外に避難させるってことか……」

なるほど、と古城は納得する。絃神島は本土から三百キロ以上も離れた絶海の孤島。しかも空港や港では厳重なチェックが行われている。夏音を島外に逃がしてしまえば、犯罪者が彼女

を追跡することは不可能に近い。たしかに悪くない作戦だ。

「どのみち叶瀬夏音を受刑中の父親に会わせてやることはできん。負傷したことを知らせて、余計な心配をかけることはあるまい。それよりも本人の安全を優先させてもらおう」

「そういうことなら叶瀬たちには黙っておくけど……だけど、あいつらが宿泊研修から帰ってくる前に犯人を捕まえられなかったら同じことだよな？」

「だから、どうした？」

那月が、少し愉快そうに口角を上げて古城を見た。

「なにか俺に出来ることはないか？　なにをすればいい？」

古城は、めずらしく気合いの入った表情で那月に言い返す。那月は、くっ、と喉を鳴らして意地悪く笑った。あっ、バカ、余計なことを――と、浅葱が頭を抱えるが、もう遅い。

「そうか、協力してくれるのか。おまえたちには、ぜひ補習授業を受けてもらいたいと思っていたところだ。サボったぶんを三倍にしてみっちりとな」

「そっちかよ――!?」

古城が情けない表情を浮かべて、がっくりとくずおれた。

そんな古城の脇腹を小突きながら、浅葱が天を仰いで嘆息する。左耳につけた小さなピアスが、空の色を映して柔らかに輝いていた。

7

その日の放課後――どうにか補習を終えて下校する古城を、下級生の少女が校門前で待ち構えていた。傾きかけた太陽が、ギターケースを背負った彼女の頬を明るく照らしている。

整いすぎるほど整った彼女の美貌はいつもと同じだが、心なしかいつもよりも近寄りがたいオーラが強い。やはりまだ少しご機嫌斜めらしい。どうしたものかな、と古城は逡巡する。

いっそのこと気づかないふりをして通り過ぎてしまおうか、と半ば本気で迷っているうちに、彼女のほうから近づいてきて、古城はあっさりと逃げ道を塞がれた。

「今日はずいぶん遅かったですね、先輩」

感情の籠もらない静かな声で雪菜が訊いてくる。漂ってくるひんやりとした気配に、古城は軽く怯みながらうなずいた。

「あ、ああ。結局、那月ちゃんに学校に連れ戻されて、補習を受けさせられてたからな――」

「補習、ですか……藍羽先輩と二人きりで、ですか？」

「二人きりかと言われれば、そうだけど……」

拗ねたように眉を吊り上げる雪菜に気づいて、古城は慌てて言い直す。

「い、いや、あいつは自分のぶんの課題をさっさと終わらせて、すぐに一人でどっか行った。

だから実質俺一人だったかな、うん」

そうですか、と雪菜は静かに息を吐いた

「ところで、なぜ急に学校を抜け出して修道院に行こうと思ったんですか？」

「だから、猫のことが気になったんだって。叶瀬のやつが、また捨て猫を拾ってこっそり育ててたら危険だなと思って。天塚――昨日の錬金術師みたいなのと遭うかもしれないし」

「もし本当に彼と遭遇したらどうするつもりだったんです？」

「それは……」

思ってもみなかった雪菜の質問に、古城は言葉を詰まらせた。

雪菜がどうしてこんなにも不機嫌だったのか、ようやくその理由がわかった気がした。

物質変成の能力を持つ天塚汞は、戦うにはあまりにも危険な相手だ。なにしろ彼は、触れるだけで敵を金属に変える。待ち伏せして不意を衝かれたら、古城といえどひとたまりもないだろう。なのに古城は、そんな危険な男がいるかもしれない場所に、うっかり浅葱を近づけてしまった。攻魔師でもなんでもない一般人を――

「悪い、姫柊。俺が甘かった」

ひどい自己嫌悪を覚えながら、古城はしゅんと項垂れる。雪菜は悲さをした園児を叱る保母のような表情で古城を見上げ、

「そうですね、反省してください」

「ああ、うん」

「もしまた襲われたりしたら、藍羽先輩がいちばん危険だったんですよ」

「だよな。すまん」

「勝手に授業をサボったり学校を抜け出すのもだめです」

「まあ、それはそうだけど」

「それから先輩は、最近ちょっと藍羽先輩にデレデレしすぎです。食事のときも、一人でずっとくっついてましたし、顔と顔を寄せ合ってこそこそ話してましたし――」

「え!?」

いつの間にか脱線を始めた雪菜の説教に、古城は弱々しく抗議する。

「いや、それはなんか仕方ないだろ。学食すげえ混んでたし、あのテーブルが狭いんだよ」

「反、省、し、て、く、だ、さ、い」

「えっと……すみません」

どことなく釈然としない思いを味わいつつも、雪菜の剣幕に押し切られて古城は頭を下げた。この生真面目な後輩に叱られるとどうも弱い。

「本当にもう、あんまり心配させないでください。とにかく二人とも無事でよかったです」

雪菜がそう言って小さく肩をすくめる。古城が下手に出続けた甲斐あって、少しだけ機嫌を直してくれたらしかった。

「宿泊研修の間、叶瀬さんにはわたしがついてます。だから先輩は余計な揉め事に首を突っこまないで、大人しくしていてください」

「そ……そうだな。頼む」

古城は表情を引き攣らせながら、ぎこちなくうなずいた。

叶瀬賢生が襲撃を受けたことは、雪菜にもまだ秘密にしておくつもりだった。夏音と同様に明日からの四日間、雪菜は研修で絃神島を離れるのだ。余計な情報を伝えても、不安にさせてしまうだけだろう。彼女たちが帰ってくる前に、天塚汞の身柄を確保すれば済むことだ。

「もちろんほかの女の子の血を吸うのもダメですからね」

古城の態度にどこか不審な気配を感じたのか、雪菜が警戒したように念押しする。

「わかってる。大丈夫だ、約束する。賭けてもいい」

古城はきっぱりと断言した。実際、誰かの血を吸う予定はまったくないので、どれだけのペナルティを科されても問題ない。

「せっかくの休暇なんだから、姫柊も他人のことばかり気にしてないで、楽しんでこいよな。あとついでに、凪沙のやつが羽目を外しすぎないように見張っておいてくれ」

古城が真剣な口調で言うと、雪菜はようやく警戒を解いたらしかった。本気で妹を心配している古城を見て、クスッと笑い声を洩らす。

「わかりました。では、先輩。その前にひとつお願いが」

「お願い？」

「一緒に来て欲しい場所があるんです」

雪菜の意外な申し出に、古城は少し戸惑った。彼女が古城に頼み事をするのはめずらしい。

「少し時間を取らせてしまうかもしれませんけど……二、三時間ほど」

「俺はべつに構わないけど、どこに行けばいいんだ」

「次の駅で降りてください。それほど歩かなくて済むと思います」

「あ、ああ」

古城は雪菜に案内されるまま、あまり馴染みのない駅でモノレールを降りた。

駅前の案内図で道順を確かめて、雪菜は雑然とした路地へと入っていく。人通りは少ないが、静かな緊張感に満ちた坂道だ。雪菜の隣を歩きながら、古城は表情を引き攣らせていった。

古城たちが入りこんだ路地の周囲には、何軒ものホテルが建ち並んでいたのだ。

旅行者向けの宿ではなく、男女が愛を確かめ合うために入っていく類のホテルである。

「姫柊、あのさ、この通りって……」

「すみません、先輩。ちょっと緊張してます。わたしも実は初めてなので」

雪菜が目を伏せたまま硬い口調で言う。

どうしていきなりこんなことに、と古城は狼狽した。いくらなんでも展開が早すぎる。

もしかしたら、ほかの女子の血を吸うな、という先ほどの発言と無関係ではないのだろうか。

吸血衝動のきっかけになるのは性欲だ。つまり、欲望を本来の方向性で発散してしまえば、吸血衝動は起きないということになる。だから雪菜は、突然こんなところに古城を連れこもうとしているのだろうか。自分自身の身体を使って、古城の欲望を発散させるために。

「姫柊、もしかして、これって獅子王機関の命令なのか？　俺を連れてここに来るのは――」

「はい。先日届いた辞令の中に、細かい指示がありました」

雪菜がいつもの真面目な口調で言う。

やはりそういうことか、と古城は唇を噛んだ。

「あのさ、無理はよくないと思うんだ。こういうのは、いきなりじゃなくて段階を踏んでやるべきっていうか。うん。おまえはもっと自分を大切にしたほうがいいって」

「はあ……たしかに少し突然ですけど、絃神島を出る前に済ませておかないと」

「す、済ませるって……」

意外にサバサバとした雪菜の態度に古城は戸惑いを隠せない。もしかして彼女は、そんなに嫌がっているわけでもないのだろうか。流されてしまってもいいのだろうか。

たしかに古城も雪菜のことは嫌いではない。もちろん魅力的だとも思う。しかし獅子王機関にそんなことまで命令されるというのは不愉快だ。それになによりも雪菜の性格が問題だった。ただでさえ国家公認ストーカーとしてつきまとわれているのに、この上、既成事実まで作ってしまった日には、どんなに厳しく私生活を監視されるかわかったものではない。

やはりここはきっぱり断ろう、と古城が決意を固めた瞬間――

「先輩……すみませんが、少し目を閉じていてもらえませんか？」

まるで先回りしたように、雪菜が古城の手を握ってきた。

それだけで古城の頭の中は真っ白になる。雪菜の手は思ったよりも小さくて、柔らかく、心地好い。それほど強い力で握られているわけでもないのに、どうしても振りほどけない。

鼻の奥にツンと金臭い感覚が広がっていく。このままでは俺は駄目になるかもしれない――と古城が絶望しかけたとき、静電気に似た不快な衝撃が突然襲ってきた。

「もう目を開けても大丈夫です。着きました」

そう言って雪菜はあっさりと古城の手を離す。

古城は半ば呆然としながら、目の前にある建物を見上げた。

それはホテル街の中にエアポケットのように存在する、煉瓦造りの小さなビルだった。

窓には年代物のステンドグラスが嵌めこまれ、扉の上には色褪せた占い看板が出ている。どうやらそれが雪菜の本当の目的地だったらしい。

「人払いの結界が張ってあったんです。真祖クラスの強力な魔族が無理に押し破ると、結界が破壊されてしまう可能性があったので、誘導させてもらいました」

まだ少し混乱している古城に、雪菜が手を握っていた理由を説明する。古城は激しく脱力してその場に屈みこんだ。勝手な妄想でうろたえていた自分が死ぬほど恥ずかしい。

「なんだ、ここは？　骨董店、だよな？」

店の看板を見上げて古城が訊いた。

店構えから判断するに、年代物の輸入家具を扱うアンティークショップというところか。

この〝魔族特区〟でどの程度の需要があるのかはわからないが、南宮那月あたりは好きそうな店である。

しかし雪菜は、古城の言葉に、緊張した面持ちでゆっくりと首を振る。

そして彼女は背中のケースから銀色の槍を抜き、少しだけ懐かしそうに微笑んだ。

「――ここが獅子王機関です」

第一章　早すぎた葬送

The Premature Bereavement

1

ガスコンロの上を漂っていたのは、不吉な臭いを撒き散らす黒煙だった。
なみなみと油を満たしたフライパンの上で、原形を留めない謎の塊が崩れ落ちていく。
「藍羽、フライパンっ！　焦げてる！　焦げてる！」
「え!?　あ!?」
クラスメイトの棚原夕歩に怒鳴られて、浅葱はあわててコンロに駆け寄った。菜箸を握って悪戦苦闘する浅葱の前で、かつて食材だった物体は、勢いよく弾けて炎を吹きあげる。
「だーっ!?　熱っ！」
逃げ惑う浅葱を冷ややかに眺め、夕歩は無言でコンロの火を止めた。ついでに濡れふきんをかぶせてフライパンを消火。冷蔵庫から取り出した製氷皿を浅葱に放る。
「ほい、氷。さっさと冷やしな」
「ううう……ごめん、棚原。ありがと」
床の上にぺたんと座りこんだまま、エプロン姿の浅葱が肩を落とした。
夕歩は家庭科部の部員で、一年生ながら副部長を任されている。浅葱はそんな彼女に頼んで、料理を習っていたのだった。見映えがよくて簡単で、素人でも失敗しないメニューをリクエストしたはずだが、それがどうしてこうなってしまうのか、混乱している浅葱である。
「まったく……急に料理を教えろなんて言うから、なにかと思えば……あれだねぇ。あんたも、意外に不器用だよねえ」
「慣れてないんだから仕方ないでしょ……」
妙に優しく苦笑する夕歩を、浅葱がむくれたように見上げて言った。
「なんなのよもう、このレシピ。全然見本どおりにできないじゃない！　だいたい大さじとか山盛りとか単位が大雑把すぎるのよ。グラムで書け！」
「いや、料理のこともそうなんだけど、駆け引きとか甘え方が下手だなあって……あんたって素材はいいのにねえ……」
「な……なんの話？」
無意識に目を泳がせながら、浅葱はとぼけた。料理を教えてもらおうと思った本当の理由を、浅葱は夕歩に伝えていない。古城の妹が旅行に行った隙に、自宅まで押しかけて手料理を振る舞う——そんな密かな野望は誰にも知られていないはずなのだ。
「ううん。暁は果報者だよねってこと」
しかし夕歩は最初からすべてお見通しだったらしい。散らかった調理器具を手際よく片付けながら、彼女は浅葱に食パンの袋を放って、
「とりあえず凝った手料理は諦めて、サンドイッチあたりにしといたら？　パン切ってタマゴ

挟むくらいなら藍羽でもできるでしょ。それ以上怪我したら、バイトにも差し支えるんじゃないの？」

「ううう……そうする。ありがと、棚原」

傷だらけの両手を見下ろして、浅葱は弱々しくうなずいた。

慣れない調理作業のせいで、浅葱の指は絆創膏まみれだ。たしかにこれ以上のダメージは、キーボードのタイピングにも支障をきたしそうだった。

どういたしまして、と言いながら、夕歩がふと浅葱の耳元に目を留めた。

「そういえば、さっきから気になってたんだけど、藍羽、ピアスどうしたの？」

「ピアス？」

三角巾の下からのぞく自分の耳たぶに触れて、浅葱が、ぎょっとしたように動きを止めた。

ピアスの感触が片方足りない。残っているのは左耳のぶんだけだ。

「あ、あれ!?」

「つけ忘れ？　でも今日は体育なかったよね……どっかに落とした？」

何気ない口調で夕歩に訊かれて、浅葱の顔面から血の気が引く。浅葱がピアスを落とすのはよくあることだ。たいして高価な品でもなかった。しかしあのピアスだけは特別なのだ。

「あ……公園……古城に倒されたときかも……」

「押し倒された？　暁に？」

「へ!?　違う違う！　物理的な意味で突き飛ばされただけだって……！」

浅葱が声を上擦らせながら否定する。

しかし夕歩は、顔を赤くしている浅葱を見て、一人勝手に納得したように拍手を始めた。

「あんたたち、意外にやることやってんだ……よかったね。おめでとう」

「だから違うってば！」

2

「獅子王機関の出張所……？」

骨董品店の店先に立ち尽くしたまま、古城はもう一度訊き返す。

紘神島では、めずらしい煉瓦造りの古いビル。だが、獅子王機関の関連施設といわれても、それらしき気配はどこにも感じられない。どう見てもただの流行らない雑貨屋だ。

しかし雪菜は、間違いない、ときっぱりうなずいて、

「はい。職員同上の連絡や補給を担当する事務所です」

「……事務所か。国の機関なんだから、それくらいあってもおかしくはないか。でも、なんで骨董屋の看板が出てるんだ？」

「偽装です。政府組織の一部とはいえ、特務機関ですから」

なかなか説得力のある説明だった。たしかに、『対魔導テロの謀略工作やってます』などと堂々と宣伝して回るわけにはいかないだろう。それに骨董屋という名目なら、槍だの剣だのをぶら下げた連中が出入りしても、それほど怪しまれることはあるまい。

「身分を隠すための表向きの職場ってことか」

「はい。あとは事務所の維持費を稼ぐために、差し押さえたアイテムなどの売り買いを――」

「普通に営業してるのかよ!? ていうか、おまえらが差し押さえたアイテムって、もしかして呪われてたり、怨念が籠もってたりしないよな……？」

「……大丈夫ですよ。きちんと除霊してありますから」

「おいいっ!?」

「冗談です」

雪菜が真面目な表情で言って、クスクスと愉しそうに小さく笑った。無言で唇を歪める古城。

相変わらずこの下級生の冗談はよくわからない。

しかし実際に骨董品店として営業しているのは本当らしい。普通の客筋を相手にしているわけではなさそうだが――

「もしかして、予算ないのか、おまえらの組織って」

「う……それは、わたしにはなんとも……」

頼りなさげに目を伏せて、雪菜は骨董品店の扉に手をかけた。木製の扉がギシギシと軋んで、

古い建物に特有の埃っぽい空気が流れ出してくる。

厳かなドアベルの響きと同時に聞こえてきたのは、店員らしき女性の澄んだ声だった。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

「……え!?」

占い喫茶店に似た店内には、若い女性店員が一人だけ立っていた。

ほっそりとした長身の、綺麗な娘だ。ポニーテールの長い髪が、陽に透けたような明るい髪色によく似合う。咲き誇る桜を思わせる彼女の優美な容姿を、古城はよく知っていた。

「煌坂？」

舞威姫の肩書きを持つ獅子王機関の攻魔師――煌坂紗矢華に、その店員はよく似ていた。鏡に映したようにそっくりだ。

「いや、違うな……誰だ？」

ただし似ているのは見た目だけ。彼女がまとっている雰囲気は、古城が知っている紗矢華のそれとはまったく違う。あの紗矢華がよもや古城を見つめて、にこやかな営業スマイルを浮かべるはずがない。

「師家様の式神です。紗矢華さんの姿を模して造られたんだと思います」

古城の疑問に雪菜が答える。そういう雪菜自身、その店員の姿には困惑しているようだった。

「式神って、嘘だろ。どう見ても煌坂本人だぞ……？」

古城は唖然とした顔で紗矢華もどきを眺めた。これまでに何度か見かけた雪菜たちの式神は、せいぜいよく出来たペーパークラフトという程度の精度でしかなかった。

しかし目の前の紗矢華もどきは格が違う。間近で観察しても生きている人間としか思えない。心臓の鼓動や体温、それに髪の匂いまでもが漂ってきそうだ。

「そのわりには、一目で紗矢華さんじゃないってわかるんですね」

雪菜が不思議そうな口調で訊いてくる。

淡々とした彼女の声音に、どことなく責めるような響きを感じ取ってしまうのは、古城に後ろめたい感情があるせいかもしれない。なにしろ古城は、なんだかんだで雪菜の目を盗んで、二度も紗矢華の血を吸ってしまっているのだ。

「いやまあ、俺の知ってる煌坂は、なんていうか、もっとアホっぽいっていうか……」

古城は、内心の疚しさを隠すように言い訳する。にこやかに微笑む紗矢華もどきはたしかに美人だが、無個性な印象であまり好きではない。感情剝き出しで怒鳴り散らすいつもどおりの彼女のほうが、愛嬌があって取っつきやすいと思う。

「それに本物の煌坂だったら、こんな恰好してるのを俺に見られたら、怒り狂って暴れだしてるはずだろ。眼球を抉るとか言いだしかねない勢いで」

「……そうかもしれません」

なにか思い当たる節があったのか、雪菜が同情するように溜息をついた。

紗矢華もどきが着ているのは、いちおうこの店の制服なのだろう。膨らんだ短いスカートに、大きく開いた襟元。絞りこんだウエストが、胸の膨らみをこれでもかと強調している。骨董品店の従業員より、メイド喫茶のウェイトレス向きのあざとい衣装だ。アンティークショップとメイドという組み合わせ自体は、案外似合っているのかもしれないが。

「ていうか、なんでこんな制服なんだ？　客寄せか？」

「いえ……人払いの結界があるので、そんなことをしてもあまり意味はないかと」

そう言って雪菜も首を傾げた。そして彼女は不意に占城を冷たく睨み、

「それよりも、先輩、さっきから胸ばかり見過ぎです。目がヤらしいです！」

「な!?　違うだろ、なんでこんな制服を着てるのか不思議に思ってただけだろ!?」

占城は必死で反論する。凝視していたつもりはないが、あからさまに胸元を強調した制服のせいで、無意識に視線が吸い寄せられてしまっていたらしい。

そんな占城を、雪菜は容赦のない無表情で眺めて、

「無意識にチラ見してるほうが気持ち悪いです。犯罪です」

「そこまでいやらしい目では見てねーよ！　だいたいこれって、煌坂本人どころか人間ですらないんだし」

「そんなに胸の大きい女の人が好きなんですか？」

雪菜が、自分の胸元を隠しながら唐突に言った。ごふっ、と占城が激しく咳きこむ。

「だ……誰もそんなことは言ってないだろ！」

「でも、好きなんですよね？」

「好きじゃない……ことはないかもしれないけど……」

占城が消え入りそうな声で答える。むー、と不機嫌そうに唇を引き結ぶ雪菜。

店内に新たな声が聞こえてきたのは、その直後だ。

「――まったく騒々しいね。何事だい？」

気負いのない洒脱な口調。しかし触れ合う宝玉の響きに似た、艶やかに澄んだ声だった。

その声に気づいた雪菜が、素早く片膝を突いて頭を垂れる。

「師家様……！」

雪菜が呼びかけた先には誰もいない。ただ一匹の黒猫が、階段の踊り場に立っているだけだ。

しなやかな体つきの美しい黒猫だった。瞳の色は輝くような金色で、細い首輪には同じ色の金緑石が嵌めこまれている。

「ご無沙汰しております、師家様。姫柊雪菜、参上つかまつりました」

黒猫に向かって、雪菜が恭しく挨拶を述べた。

悪戯っぽく目を細めて、その猫が唐突にしゃべり出す。

「しばらくぶりだね、雪菜。おまえにしてはめずらしいじゃないか、苛々と大声を出して」

「申し訳ありません。未熟でした」

「そうじゃない、褒めてるのさ」

クク、と喉を鳴らしながら、猫は人間臭い仕草で前脚を上げた。余計な挨拶は無用、という程度の意味らしい。

「槍はどうした？」

「はい。こちらに」

雪菜が差し出した〝雪霞狼〟を、紗矢華もどきの店員が受け取って黒猫の前に運んでいく。

その隙に古城は、声を潜めて雪菜に訊いた。

「師家様……って、猫だろ？」

「使い魔です。ご本人はおそらく今も高神の杜に」

がちがちに緊張している雪菜が、古城の耳元に囁いてくる。

「高神の杜って、関西か!?　本当かよ……どんだけ離れてると思ってんだ……!?」

古城は呆然と呟いた。絃神島から本州までは、最短距離でも三百キロ余り。雪菜たちが修行していた高神の杜と呼ばれる施設は、そこからさらに数百キロ離れているはずだ。

優れた魔術師にとって、物理的な距離はさほど問題にはならないとも聞くが、それにしても生半可な実力で可能な芸当とは思えない。

「あの猫と煌坂もどきを操ってる術者が、姫柊の本当の師匠ってことか」

「はい。縁堂縁さまです」

「偉い人なのか？」

「そうですね、かなり」

古城の不遜な質問に、雪菜は強張った表情でうなずいた。

異国の王女や、戦王領域の貴族と対面しても物怖じしなかった雪菜が、ここまで気を遣わなければならないほどの相手だ。彼女の師匠は、よほどの大物か、気まぐれな暴君――あるいはその両方ということか。なにはともあれ厄介な相手なのは間違いないらしかった。

しかしどんなに偉いといっても、しょせん猫だしな――と古城は思う。

「いちおう〝雪霞狼〟には受け入れてもらえたようだね」

その猫が、雪菜の槍をざっと眺めてぶっきらぼうに言った。

「技は荒いが、刃筋はまあ悪くない。ただ、〝霊視〟に頼りすぎてるのが気になるね。教えただろ、剣巫は剣にして剣にあらず、巫にして巫にあらず――未来を視て流されてるだけでは半人前さ」

「はい、師家様」

猫のありがたい説教を、雪菜は神妙な顔つきで聞いている。本人たちは真面目なのだろうが、傍から見ていると相当シュールな光景だ。

とはいえ、縁堂縁という人物は、やはり底知れぬ実力の持ち主らしい。武器に残された傷や摩耗から、弟子のクセや欠点を読み取って、的確なアドバイスを送ってくる。

この黒猫のことは、敬意をこめてニャンコ先生と呼ぼうと、古城はこっそり決意した。

いいだろう。たしかに槍は預かった。今この時刻をもって、おまえを第四真祖の監視役から解く。たまには普通の小娘に戻って、英気を養ってくるんだね」

〝雪霞狼〟の検分を終えた黒猫が、雪菜を見下ろして素っ気なく告げる。

しかし雪菜は、そのまま無言で師匠を見つめていた。何度か物言いたげに唇を震わせ、やがて意を決したように口を開く。

「――お言葉ですが、師家様。ほんの数日とはいえ、先輩……いえ、第四真祖の動向から目を離すのはやはり心配です。監視のお役目、わたしに引き続きお任せいただけないでしょうか」

「ふふん」

猫が愉快そうにクックッと笑った。真面目な雪菜が師匠の言いつけに逆らって意見するなど、かつてなかったことなのだろう。

「そこの坊やが第四真祖かい？」

金色の瞳を細めて、黒猫が古城に視線を向けた。

「いちおうそういうことになってるみたいだ」

誰が坊やだ、と顔をしかめながら古城は言い返す。雪菜の師匠が相手とはいえ、さすがに猫に対して敬語を使う気にはなれなかった。

猫のほうも、特にそれを気にする様子はない。ざっくばらんな口調で話しかけてくる。

「呼びつけてしまって済まなかったね。おまえさんとは一度会って話をしてみたかったのさ。いちおう礼を言っておこうと思ってね」

「礼？」

「アヴローラを救ってくれた礼さ」

ニヤァと大きく口を吊り上げて猫が笑う。

その瞬間、古城は全身の血液が逆流するような錯覚を味わった。脳裏をよぎったのは、紅い空を背にした小さな影。逆巻く炎のような虹色の髪と、焔光の瞳を持つ少女の影だ。悪夢にも似た朧気な記憶が、古城の頭の奥に凄まじい激痛を喚び起こす。

「あんた……あいつを知ってるのか……!?」

激しく呼吸を乱しながら、古城は猫のほうへと詰め寄った。激しい目眩に襲われた古城を、慌てて雪菜が抱き支える。

「語って聞かせられるほどには知っちゃいないよ。ちょっとした因縁があるだけさ。それでもあの〝眠り姫〟は不憫な子だったからね。救ってくれたことには感謝しているのさ」

密着する古城と雪菜を面白そうに眺めて、猫が続けた。

「焦らなくたって、そのうちおまえさんも思い出す……それにしても、アヴローラだけでなく、堅物の雪菜まで手懐けるとは、腑抜けた面構えのくせにやるじゃないか。ふふん……」

「て、手懐けられたりしてません！」

「この駄猫……」

雪菜が細い声で反論し、古城も思わず悪態を口にする。

すでに記憶の中の少女の姿は思い出せない。全身をじっとりと不快な汗が濡らしていたが、頭痛は少しだけ治まってきたようだった。

「二、四日ほっといたところで悪事を働くほどの度胸もなさそうだが、可愛い教え子も気にかけてることだしね。いちおう首に鈴はつけておこうか。代理の監視役がいれば、雪菜も少しは安心できるだろうさ」

そう言いながら猫は右手を上げた。

ちょうとメイド服姿の弐神が、階段を下りて古城たちのほうへと近づいてくるところだった。

「鈴って……まさかこの煌坂もどきが姫柊の代理ってんじゃないだろうな？」

露骨に不安な表情を浮かべて、古城が訊いた。

猫は当然のようにうなずいて、

「見慣れた顔のほうがなにかと便利だろ。せっかく気を遣って用意してやったんだ。しばらくそいつを連れ歩きな。胸くらいはこっそり触っても、本人には黙っておいてあげるよ」

「触るかっ！　ていうか、煌坂はどうしたんだよ!?　代理ならあいつ本人でいいだろ！」

「紗矢華は謹慎中さ。休暇中に私用で〝煌華麟〟を持ち出して、貴重な呪矢を使い切っちまったからね。形だけの処分とはいえ、しばらくは本部で反省文でも書かされてるだろうよ」

「……謹慎？」

しばらく姿を見ないと思っていたら、そんなことになってたのか、と古城は驚いた。

そして紗矢華に少し申し訳ない気分になる。彼女が獅子王機関に無断で武器を使ったのは、事件に巻きこまれていた古城たちを助けるためだったからだ。

「あんたの弐神が煌坂の姿をしている理由はわかったけど、そのメイド服はなんなんだ？」

「決まってるだろ、謹慎中の部下に対する罰ゲームさ。なかなか効果的だろ」

ちょっと得意げな口調で猫が言う。

罰ゲーム、という言葉の響きに、雪菜がビクッと怯えたように肩を震わせた。なるほど、と納得する古城。こういう性格の師匠だから、雪菜はあれほど恐れていたわけだ。

「メイドが気に入らないのなら、ほかの制服にしてやろうか？　リクエストを言ってみな」

「いや、リクエストって……」

「それとも高神の杜からほかの剣巫を呼び寄せようか？　そういえば今年の卒業生に、イキのいいのが二人ばかりいたね。胸のでかいほうと小さいのとどっちが好きだい、第四真祖？」

「……え!?」

今ここでそれを訊くか、と古城は戦慄する。

ふと見れば、雪菜がじっと古城の横顔を睨んでいた。ここで選択肢を間違えると、のちのち大変なことになりそうな予感がある。しかしどう答えるのが正解なのかわからない。

息苦しいほどの沈黙の中で、古城は額の汗を拭う。
その沈黙を破って鳴りだしたのは、古城の携帯電話の着信音だった。
発光する液晶画面には、〝藍羽浅葱〟の名前が表示されている。

3

錬金術師――天塚汞は、半壊した小さな修道院に立っていた。
銃撃戦の余韻のような硝煙の臭いが、礼拝堂の中にうっすらと消え残っている。
天塚の周囲には無数の薬莢が散らばり、それらを撒き散らした短機関銃が無造作に置き忘れられていた。特区警備隊の制式装備である。
しかし銃の持ち主だった警備員たちの姿はない。ただ彼らの姿を象った金属製の彫像が、無惨に打ち捨てられているだけだ。
物質変成。
大いなる錬金の秘技を識る天塚は、ただ触れるだけで生物を金属へと変える。強力な対呪術装備に護られた特区警備隊の隊員とて、その例外ではない。
天塚はたった一人きりで、修道院を護っていた特区警備隊の拠点防衛部隊を全滅させていたのだった。

「……」
邪魔物を排除した天塚は、愛用の杖を弄びながら、修道院の壁に埋めこまれた彫刻を眺めている。金属製の浮き彫りだ。
畳二、三枚ぶんはありそうな大きな作品だった。
刻みつけられた抽象的な模様は、なにを現しているのかわかりづらい。だが、ふとした瞬間に一人の女性の姿が浮き上がって見えることがある。エキゾチックな容姿を持つ妙齢の美女だ。時折、懐かしげに目を細めて、天塚は飽くことなくそのレリーフを見上げている。
その静謐な時間を破って聞こえてきたのは、男たちの不作法な足音だった。
背広姿の男たちが三人ばかり、建物の中に荒々しく踏みこんで来たのだ。
「どうも、専務。意外にお早いお着きですね」
おもむろに背後を振り返りながら、天塚が彼らに笑いかける。
「約束の時間はとっくに過ぎているぞ、天塚……いつまで儂を待たせる気だ？」
その呼びかけに答えたのは、専務と呼ばれた禿頭の中年男性だった。身長は百六十センチに満たない程度だが、盛り上がる筋肉と脂肪のせいで、暑苦しいまでの威圧感がある。見るからに粗暴で辣腕な企業人という印象だ。
「あはは、ごめん。でも、特区警備隊の下っ端はともかく、ここには叶瀬賢生が張った結界が残ってるんですよ。解呪は念入りにやっとかないとまずいでしょ」

悪びれない口調で天塚が言う。恐ろしく不遜な態度だが、慣れているのか、専務と呼ばれた男は苛立たしげに鼻を鳴らしただけだった。

壁のレリーフに目を向けて、通称〝専務〟は荒々しく笑う

「まあいい。とにかく、これが本物の〝賢者の霊血〟なんだな」

「師匠が残した遺産を、僕が見間違うとでも？」

心外だ、と言いたげな表情で天塚が首を振る。

それを無視して、専務はレリーフに歩み寄った。

「しかし……ただの彫刻にしか見えんな……」

今はまだ眠ってるからね。この状態ではただの金属の塊だ。叶瀬賢生もいい判断をするよ。

たしかに下手に隠すよりは、このほうがよっぽど目立たない。でも――」

真面目な口調に戻って、天塚が言う。彼がコートの下から取り出したのは、透きとおった深紅の球体だった。叶瀬賢生の研究室から強奪した宝石だ。

天塚はそれをレリーフに近づけ、軽く表面に触れさせる。

「ほら、目覚めた」

その瞬間、レリーフには劇的な変化が起きた。

ざわり、と表面が波打つように揺れ動き、触手のようにうねりながら、宝石を自らの内部に取りこもうとする　その姿は、仮死状態から甦ったアメーバを連想させた　血のように艶や

かな深紅に輝く、金属製のアメーバだ

「なるほど……それが〝錬核〟か」

欲望にぎらついた眼差しで、専務が天塚の手の中の宝石を見つめる。

「そう。高度な自己増殖機能を有する、融合型の液体金属生命体――〝賢者の霊血〟を制御するための魔術触媒だよ」

内部に完全に取りこまれる前に、天塚は宝石をレリーフから離した。名残惜しそうに何度かうねり狂ったあと、深紅のアメーバは本来の金属彫刻の姿へと戻っていく。

だが、それがただの彫刻ではないことは、今や誰の目にも明らかだった。

レリーフの形をしているのは、おそらくは叶瀬賢生の手によって施された偽装だ　この彫刻の正体は、自らの意思を持つ深紅の液体金属生命体なのだ。

もちろん自然界に存在する生物ではない。不定形にして永遠不滅。世界の理に反したこのような生命を生み出せるのは、物質の組成を自在に操る錬金術の奥義のみ――

もしこの不滅の金属生命体に自らの魂を移すことができたなら、完全なる不老不死の人間が生まれることになる。そのような奇跡を可能にするのが、深紅の宝石――〝錬核〟と呼ばれる制御ユニットなのだった。

「〝錬核〟の中に意識を転移することで、〝霊血〟に融合されても、融合者は自分の意識を保っていられる。自らの肉体を不滅の金属生命体に置き換えて、永遠に近い〝生〟を得ることがで

きるってわけ。うちの師匠が到達した、錬金術の極致だよ」

「不老不死……おまけに吸血鬼の真祖にも匹敵する魔力を備えた完全な生命か……」

今にも涎を垂らしそうな表情で、専務がレリーフの表面に触れる。彼の瞳に映っているのは、底知れぬ復讐心と権勢欲だ。

「その力があれば、私を取締役会から追い出して、こんな僻地に飛ばした本社の連中に、一泡吹かしてやれるわけだな。それどころかオーナーの一族を根絶やしにしてやることも――」

「なかなか、愉しめそうだよね。それも」

他人事のようにそう言って、天塚は〝錬核〟を専務の前に放った。

見かけ以上にずっしりとしたその球体を受け取って、専務は猜疑心に満ちた目つきで天塚を見た。天塚が〝錬核〟をあっさり手放したことを、奇妙に思っているのだろう。

なにしろ〝賢者の霊血〟は、錬金術師が追い求める理想形のひとつだ。現在までにその創製に成功したのは、大錬金術師ニーナ・アデラードのみ――

そんな究極ともいえる錬金術の至宝を、理由もなく他人に譲り渡すほど、天塚は気前のいい人物ではないはずだ。

「この〝錬核〟……貴様の師匠の忘れ形見だろうに。儂がもらい受けて本当に構わないのか？」

「もちろんさ　約束は守らないとね」

しかし天塚は、そう言って得意げに微笑んだ。そしてコートの襟元をはだけて、隠していた自らの胸元を晒す。そこに現れたのは、おぞましくも奇怪な肉体だった。

不健康に痩せさらばえた天塚の右半身は、人間の姿をしていない。艶やかな光沢を帯びた金属が、彼の身体を浸蝕している。天塚は壁のレリーフと同じ金属生命体――〝賢者の霊血〟に、肉体を半ば喰われているのだ。

彼の胸の中央には、心臓の代わりに奇妙な石が埋めこまれている。

〝錬核〟によく似ているが、石の色は濁った黒である。形もどこかいびつに歪んでいる。天塚がかろうじて人間らしい姿を保てているのは、その黒い石のおかげらしい。

「僕はこう見えても、あんたには感謝してるんだ。五年前の事故で死にかけていた僕を救ってくれたのはあんただからね、専務。おかげでこの〝偽錬核〟が造れた――」

「ふん。いい心がけだな、天塚」

専務は満足そうにうなずいて、深紅の宝石を愛おしそうに撫でた。

彼は国内ではそれなりに名の知れた機械メーカーの社員だ。ただし本当の肩書きは専務ではない。社内で起こした不祥事によって取締役の地位を剝奪され、人員整理のために閑職に回されてしまったのだ。そして彼は天塚と出会い、自らの復讐のために〝賢者の霊血〟を利用することを決めたのだった。

「安心しろ、その忠義には報いてやるぞ。儂が本社の全権を掌握した暁にはな！」

「期待しているよ、専務。お互いにいい判断をしたね」
天塚はそう言って壁から離れた。無言で杖を振って、専務が連れてきた二人の護衛も下がらせる。レリーフの前に残っているのは、専務一人だ。
「ふむ……わかってきたぞ。この窪みか」
レリーフのほぼ中央にある亀裂の中央に、専務は〝錬核〟を押しつけた。
変化は劇的に現れた。
くすんだ銅板のような色をしていたレリーフが、一瞬で深紅の液体に変わって零れ落ちる。礼拝堂の狭い祭壇は、たちまち血溜まりにも似た大量の液体金属に覆い尽くされた。
飛び散った液体金属は、表面張力によって巨大な深紅の水滴と化すと、原生動物のように蠕動し、〝錬核〟の持ち主である専務の元へと殺到した。足元からじわじわと這い上がり、彼の肉体を覆い尽くそうとする。
「おうおう……見事に蠢いておるわ。見ろ、この血のように艶やかな赤を。まるで極上のワインのようではないか。なあ、天塚！」
不気味な〝霊血〟に取り囲まれても、専務は豪快に笑っていた。今や彼の肉体は、胸元まで完全に深紅の水滴の中に沈んでいる。
「専務！」
「危険です、お下がりを！」

怯えた表情を浮かべて叫んだのは、二人の護衛たちだった。しかし専務は彼らを睨んで、鬱陶しげに一喝する。
「なにを言っておるか。これからが本番だろうが！」
「――専務！」
「ふはは……感じる……理解るぞ、この儂の肉体が融けていくのが！」
陶酔したような表情で専務は叫んだ。
人という不完全な命を捨て去り、不滅の金属の肉体を手に入れる。その際に流れこんでくる膨大な魔力が、彼に圧倒的な多幸感と全能感を与えていた。
だが、〝賢者の霊血〟による浸蝕は、予想外の形で中断される。
液体金属の一部が盛り上がって、水滴の中に新たな人影を浮かび上がらせようとしたからだ。
「ぬう!?」
深紅の液体金属が形作ったのは、若い女性のシルエットだった。見た目の年齢は十八、九か。彫りの深い異国風の顔立ちの美女である。
「これはこれは――」
天塚が愉しげに唇の端を吊り上げた。彼女が現れるのを待ちわびていた、という表情だ。
「おう、これが大錬金術師ニーナ・アデラードか！」
粗野な笑みを浮かべて、専務が叫ぶ。突然の邪魔者の出現にも、動揺している気配はない

〝賢者の霊血〟と、そして〝錬核〟――それらを生みだしたのは、古の大錬金術師ニーナ・アデラードだ。〝賢者の霊血〟の覚醒と同時に、本来の持ち主である彼女が甦るのは、当然予想されたことだった。

「〝錬核〟に保存されていた彼女の意識が目覚めたんだよ。このままいけば、ニーナ・アデラードは肉体を取り戻して完全に復活する。つまり彼女を消滅させない限り〝賢者の霊血〟は手に入らないってわけ」

焦る護衛の男たちを冷ややかに眺めて、天塚が解説する。

液体金属の中に生まれた美女は、今や人間の姿をほぼ完全に取り戻しつつあった。艶やかな黒髪が背中へと流れ落ち、深紅の水滴を散らして、きめ細やかな褐色の肌が現れていく。

「ぐお……!?」

対照的に苦悶の表情を浮かべたのは、専務だった。

一度は〝賢者の霊血〟を支配しかけていた男の肉体が、実体を失ってグズグズと融け崩れていく。正統な所有者ニーナ・アデラードが目覚めたことで、彼は異物として排除され始めたのだ。

「喰われる……儂の身体が……天塚！　なんとかせい、天塚！」

すでに原形を失いつつある専務が、必死の形相で助けを求めた。天塚は冷笑して、左手のステッキを軽く振る。ギシ、とどこかで歯車が噛み合うような音がした。

「心配要らないよ、専務。すぐに終わる――」

天塚がそう言い終える前に、専務の喉から絶叫が洩れた。

かろうじて元の姿を留めていた背広が弾け飛び、液体金属に浸蝕された彼の肉体が露になる。その全身のあちこちには黒い宝石が埋めこまれていた。天塚が創製した〝偽錬核〟だ。

〝賢者の霊血〟を制御するために必要だと説得し、それらを専務の体内に埋めこんだのは天塚だ。しかし天塚の本当の目的は〝賢者の霊血〟の制御などではない。

「この瞬間を待ってたんだよ、師匠……あなたが〝賢者の霊血〟を目覚めさせる瞬間を。あなたの〝錬核〟がなければ、〝霊血〟はただの鉄屑のままだ。だけど〝賢者の霊血〟と一体化したあなたは不滅。だから、あなたの〝霊血〟を奪うには覚醒が不完全な状態で、内側から破壊するしかない――こんなふうにね」

天塚が高らかに哄笑した。専務の体内の〝偽錬核〟が、刻みこまれていた術式を解放。湖水に毒を流しこむように、深紅の液体金属をドス黒く濁らせていく。

「おおおお、天塚！　貴様――!?」

〝偽錬核〟暴走の影響を受けて、専務の身体がちぎれ飛んだ。護衛たちが専務を助け出そうとするが、そんな彼らも液体金属に喰われて融けていく。

「なぜだ……天塚……なぜ、裏切った……そこまでして〝霊血〟を独占したかったのか!?」

もはや上半身の一部だけになってしまった専務が、弱々しく問いかけた。

そんな彼を蔑むように見下ろして、天塚が嘲笑う。

「そうじゃないよ、専務。その逆さ」

やがて〝偽錬核〟の汚染は、覚醒直前だったニーナ・アデラードの肉体をも呑みこんだ。美しかった彼女の肢体は黒くひび割れ、粉々に砕け散っていく。

「あんたには本当に感謝してるんだよ、専務。だから、あんたの望みを叶えてやる。あんたの肉体は〝霊血〟の一部になって永遠に生き続ければいい――！」

幼い少年のように無邪気に笑いながら、天塚は、かつて専務だったものに背を向ける。

漆黒の〝賢者の霊血〟は禍々しく慟哭し、手負いの猛獣のように激しく蠢き始めていた。

4

丘の上へと続く緩い坂道を、夕陽が明るく照らしている。

ウレタンチップで覆われた歩道を中腰で進みながら、浅葱は愛用のスマートフォンを耳に当てていた。電話口から聞こえてきたのは、なぜか切羽詰まったような古城の声だ。

『――浅葱か？　ちょうどよかった。助かった。え……と、なにかあったのか？』

「ああ、うん。ごめん、急に」

やけに愛想のいい古城の態度に、浅葱は軽く面喰らう。まるで浅葱からの電話を口実にして、

絶体絶命の窮地を免れたといわんばかりの歓迎ムードだ。

「ちょっと頼みたいことがあったんだけどさ、もしかしても家に着いちゃった？」

まあべつにいいか、と気を取り直しながら、浅葱が訊く。古城は一瞬、言ってもいいのだろうか、と迷うような不自然な沈黙を挟んで、

『いや。まだ外にいる。西地区の六号坂のあたりの店に』

「六号坂って……ラブホ街じゃん！」

浅葱が頬を引き攣らせてうめいた。人工島南地区六号坂がどういう土地かは、紋神島の住人なら、ませた小学生でも知っている。もちろん知識として知っているだけで、浅葱は当然足を踏み入れたことがないのだが――

「あんた、まさか……!?」

『違う！　その近くの骨董屋にいるんだよ！　姫柊の知り合いが店をやってるんだ』

「あのあたりに骨董屋なんてあったっけ？」

首を傾げて浅葱は自問する。もっとも古城が嘘をついている様子はない。彼の背後からは、小さな猫の鳴き声と、誰かの話し声が聞こえてくる。

「なんだかよくわからないけど、べつに忙しいってわけじゃないみたいね？」

『まあな。で、頼みってなんだ？』

古城が気楽な口調で訊いてきた。浅葱は、コホ、と咳払いする。少しばかり言い出しにくい

内容だったのだ。

「あのさ、あんたがあたしの誕生日にくれたピアスのこと、覚えてる？」

『あー……あれか。無理やりおまえが買わせた青いヤツな』

「青じゃなくてターコイズ・ブルー！」

浅葱がムッとした口調で言い返す。あのピアスは青ではなくて、浅葱色であることに意味があるのだ。

『そのピアスがどうしたんだ？』

「ごめん。片っぽ落としちゃったみたいなんだ」

あははは、と努めて明るい声で浅葱は告白した。

「たぶん、昼休みにあんたと公園で揉み合ったときに――」

『え!?』

電話口の向こう側で、占城が凍りつく気配がある。

「今、探しに来てるんだけど、一人じゃさすがに見つける自信がなくてさ。陽が暮れる前になんとかしたいから、ちょっと手を貸してくれないかなって」

『ば、馬鹿――！』

「はあ!?」

占城にいきなり怒鳴られて、浅葱も態度を硬くする。まさか占城がここまで怒るとは、さすがに予想していなかった。

「なによそれ!?　たしかに落としたのは悪かったけど、そんな言い方しなくたって――」

『そうじゃねえ！　ピアスなんかどうでもいいんだよ！』

「は？」

占城の無礼な言いぐさに、浅葱のどこかでなにかがぶちぎれる音がした。あったまきた。

「どうでもいいってことないでしょ！　あれはあんたがあたしに買ってくれたやつで――と、とにかく大事にしてたんだから！」

『だからっ！　特区警備隊の連中も見張ってただろ！　修道院の近くは危険いんだ！　面倒が起きる前にそこから離れろ、今すぐ！』

「え？」

本気でうろたえた様子の占城の言葉を聞いて、浅葱は少し戸惑いを覚える。

どうやら占城が焦っている原因は、ピアスとはべつのところにあるらしい。浅葱に対して怒っているというより、むしろ心配しているらしい。それにしても少し大げさすぎないだろうか。

「……そんな深刻にならなくても大丈夫でしょ。今度は授業サボってるわけじゃないんだし、それに特区警備隊がいるならそのほうが安全じゃん」

『いいから帰れって！　ピアスならまた後で買ってやるから！　何個でも！』

占城が懇願するような口調で言った。

明らかに勢い任せの言葉だったが、それを聞き逃す浅葱ではない

「……ホントに？」

『ああ！』

「ピアスだけじゃなくてもいい？　ゆ、指輪とかでも？　高いやつじゃなくていいんだけど」

『もうこの際なんでもいいよ！　だから――』

早く帰れ、と古城が喚き散らす気配を察して、浅葱はスマートフォンを耳から離す。

「はいはい。わかったわかりました。じゃあ、最後に一周したら帰るから」

『今すぐ帰れよ！』

古城が声を嗄らして怒鳴った。

はいはい、と浅葱はそれを聞き流す。どうして彼がそこまで焦っているのかは知らないが、心配してもらうのは悪い気分ではなかった。指輪を買ってもらう約束も取りつけたことだし、約束どおりピアス探しは早めに切り上げることにしようと思う。

轟音とともに大地が揺れたのは、その直後のことだった。

身体が一瞬宙に浮いて、浅葱は投げ出されるように歩道に転がった。肩にかけていたバッグが吹き飛んで、中身がバラバラとその場に散らばる。

『浅葱!?　なんだ、今の音――!?』

異音は古城にも伝わっていたらしい　血の気をなくしたような声で彼が訊いてくる

しかし浅葱には答えられない

起きたことを理解できなかったわけではない。ただ、それを説明する言葉がなかったのだ

修道院の建物を崩壊させて出現したのは、原生動物のように不定形に蠢く漆黒の流動体だった。生物でもなければ金属でもなく、決まった外観すら存在しない　そんなものの存在をどう伝えればいい？

「わかん……ない……なによ、こいつ……!?　血、みたいな……水銀みたいな……女の人!?」

身体の痛みに耐えながら、浅葱はのろのろと立ち上がる。

その間にも漆黒の流動体は、異音を放ちながら様々に形を変えていた

それは進化に失敗した哀れな生き物の姿を連想させた。陸に打ち上げられた魚、墜ちた鳥、異形の獣、そして人類。ありとあらゆる生物の遺伝子を取りこんだ合成獣がいれば、あるいはこのような姿をしていたのかもしれない。

しかもその怪物は、徐々に成長を続けている。

周囲の物質と無差別に融合して、自らの質量そのものを増しているのだ。最初は軽自動車ほどだった体積は、すでに小型のトラック程度にまで膨れあがっていた。

「あれ？」

逃げなければ、と立ち上がった浅葱の耳に、どこか場違いな明るい声が聞こえてくる

赤と白の目立つ服を着た奇術師風の青年が、坂の上に立って浅葱を見下ろしていた　無邪気

に笑う彼の瞳は、ゾッとするほどに冷ややかだ。
「参ったな。見られちゃったんだ。まあいいか……すぐ死ぬし」
無関心な口調で青年が言う。
その刹那、漆黒の怪物が咆吼した。
不定形の流動体からリボンのような細い帯がゆるゆると延びていく。それがリボンなどではなく、刃のように研ぎ澄まされた巨大な触手だと浅葱が気づいたときには、もう手遅れだった。
「え？」
重力から解き放たれて、浅葱の身体がふわりと舞った。
それからずいぶん遅れて、大気が避ける音が聞こえてくる。
漆黒の怪物が放った触手が、巨大な死神の鎌となって浅葱の身体を薙ぎ払ったのだ。
怪物の本来の狙いは、白いコートの青年だったのだろう。浅葱は攻撃に巻きこまれただけだ。
しかし青年は自らの右手で怪物の触手を逆に斬り落とし、無関係の浅葱だけが直撃を受けた。
そしてゆっくりと倒れていく。
「う……そ……」
仰向けに地面に転がって、浅葱は呆然と呟いた。
痛みすらもう感じられなかった。夕焼けの空に広がった自分自身の鮮血を、不思議な気分でぼんやりと眺める。美しいルビーの雨を見ている気分だ。

「逃げられちゃったか。なかなか上手くいかないもんだね……まあいいさ」
白いコートの青年は素っ気なく呟いた。
漆黒の怪物の姿はすでに消えている。反撃を恐れて逃走したのかもしれない。
血まみれで倒れた浅葱にはなんの興味も示さずに、青年もその場を離れていく。
「ごめん、古城……なんか……ミスったみたい……」
残された最後の力を振り絞って、浅葱が自嘲するように笑う。スマートフォンはすでに浅葱の手の中にはなく、彼女の声は古城には届かない。必死で手を伸ばす彼女の指先が触れたのは、冷たく輝く赤い石の破片だけだった。

5

古城が無人の公園に辿り着いたときには、すでに太陽は西の水平線に沈みかけていた。
モノレールに乗ったところまでは覚えているが、それからあとの記憶はない。ただ必死で走り続けてここまで来たのだ。その間、何度かけ直しても浅葱が電話に出ることはなかった。
その理由を、古城はすぐに嫌というほど思い知らされることになる——
「なんだよ、これ……」
最初に気づいたのは、修道院に起きた異変だった。

正面の礼拝堂が完全に崩壊し、瓦礫があちこちに飛び散っている。あたかも、巨大な怪物が起き上がって、建物を内側から突き崩したような異様な光景だ。

そして修道院を警護していた特区警備隊の姿はない。代わりにその場に残されていたのは、地面に横たわる金属製の彫像たちだけだった。

それが錬金術師の仕業だということは、もちろん古城にもわかっている。

だが、今は天塚に用はない。古城が探しているのは一人だけだ。

浅葱は……？」

絶望的な焦燥感に襲われながら、古城は必死で浅葱の姿を探す。彼女とは長いつき合いだ。たとえどんな人混みの中にいても、すぐに見つけ出せるという自信がある。それなのに今は、この無人の公園で彼女の気配すら感じることができない。

「浅葱！　どこだ、浅葱……!?」

天塚に連れ去られてしまったのかもしれない、と古城は思う。それが考えつく限りの最悪のシナリオだ。それならば、どんな手段を使ってでも天塚を見つけ出し、浅葱を取り返す。

そう。取り返すことができるはずなのだ。

なぜなら浅葱には、なにひとつ殺される理由なんてないのだから――

「あさ……ぎ……」

しかし本当は古城にもわかっていた　忌まわしい吸血鬼の力が最初からそれを告げていた

空気の中にかすかな匂いが混じっている

これまであまりにも近くにありすぎて気づかなかった、甘く愛おしい血の匂い。

浅葱の血の匂いだった。

「嘘だろ……おい……なんで、こんな……」

夕闇のような深紅の血溜まりの中に、制服姿の少女が倒れている。

校則違反ギリギリまで飾り立てた派手な服装と、明るく染めた華やかな髪型。そのくせ日を閉じた端整な横顔には、彼女本来の真面目な性格が滲み出ている。

黙っていれば文句なく美人なのに、いつもニヤニヤと色気を感じさせない笑みを浮かべていた。だが、彼女がその笑顔を見せることは、もう二度とない。

藍羽浅葱は、死んでいる――

「ふざけんなよ……おまえ……こんなキャラじゃなかっただろうが、なあ！」

散らばった浅葱の荷物の中には、図書室で借りた料理の本があった。指先にはいつものネイルの代わりに絆創膏が何枚も巻かれている。どうして彼女がそんなふうに〝らしくない〟傷をったのか、いくら古城が鈍くても気づく。

それなのに古城が彼女のためにしてやれることは、もうなにもない。

「先輩！」

呆然と立ち尽くす古城を呼んだのは雪菜だった。古城を追って駅から走ってきたのだろう。

彼女の呼吸はずいぶん荒い。絶命している浅葱に気づいて、雪菜の顔が青ざめる。

「藍羽先輩……!?　どうして、こんな……」

気丈を装う雪菜の声が震えている。獅子王機関の剣巫とはいえ、見習いで経験の浅い彼女はおそらく、親しい人間の死に直面したことがほとんどないのだ。

「俺の……せいだ……」

「え？」

ぼそり、と古城が呟いて、雪菜が驚いたように顔を上げた。

「姫柊が言ったとおりだ……俺が迂闊にこんなところに連れてきたせいで、無関係のこいつを巻きこんだんだ……！」

「そんな……ことは……」

咄嗟に言い返そうとした雪菜が、古城の目を見て息を呑む。

憤怒に顔を歪めた古城の双眸が、眩いばかりの真紅に輝いていた。撒き散らされる凄まじい魔力の波動に、びりびりと人工の大地が震える。

眷獣たちが目覚めかけていた。世界最強の吸血鬼――第四真祖が血の中に従える異界からの召喚獣。それらが古城の怒りに呼応して、無制限に暴走しようとしているのだ。

「待ってください、先輩！　先輩　！」

雪菜が必死で古城に駆け寄ろうとする。しかし、爆発的な魔力の放出に阻まれて、近づくどころか、その場に留まることすらできない。

その魔力の放出に逆らえるのは、おそらく〝雪霞狼〟だけだろう。しかし封印された〝雪霞狼〟は今の彼女の手元にはない。

魔力の暴走はさらに勢いを増して、雷撃や衝撃波をも生み出し始めていた。

攻撃に巻きこまれそうになった雪菜を救ったのは、どこからともなく現れた紗矢華もどきの式神だ。彼女は、強固な防護結界を展開して雪菜の楯となり、致命的な魔力の直撃を防ぐ。

獅子王機関の師範たる魔導の鬼才、縁堂縁ならではの超高難度魔術――だが、彼女の力をもってしても、雪菜を守るのが精いっぱいだった。遠く離れた高神の杜にいる縁には、古城の暴走を止める術はない。

人工島の基部を揺らす奇怪な共鳴や、古城の足元に広がっていく細かな亀裂は、まだ見ぬ彼の眷獣の力だろう。このまま古城の魔力が暴走を続ければ、いずれこの絃神島は崩壊する。

「先輩、落ち着いて！　しっかりしてください！　凪沙ちゃんたちまで死なせる気ですか!?」

吹き荒れる暴風に逆らって、雪菜が絶叫した。

届くはずのないその声に、我を失っていた古城が反応した。怒りに支配されていた瞳に光が戻る。稲妻が途切れ、風が止んだ。

「凪……沙……」

かすれた声でそう呟いて、古城の身体がぐらりと揺れる。

雪菜は倒れる古城の傍に駆け寄った。額から血を流している雪菜に気づいて、古城が愕然とする。古城の魔力の暴走が、彼女を傷つけてしまったのだ。

「姫柊……おまえ……」

「大丈夫、わたしは大丈夫です。師家様の式神が楯になってくれましたから」

そう言って振り向いた雪菜の目の前で、紗矢華もどきの式神が無数の白い紙切れに変わった。式符にこめられていた呪力を使い切ってしまったのだ。

「わたしは大丈夫ですから……先輩の傍にずっといますから……だから先輩もしっかりしてください。でないと藍羽先輩が叮哀想すぎます！　自分のせいで先輩が暴走して、こんなところでなにもかもが終わってしまうなんて……！」

そう囁く雪菜の瞳からは、とめどなく涙があふれ出していた。

その涙が、古城を少しだけ冷静にさせる。結局古城は、またしてもこの少女に救われたのだ。そして彼女の言うことは正しい。古城は、我を失っている場合ではない。浅葱のためにできることをやらなければならない。

浅葱を救えなかった自分だからこそ、やらなければならないことがあるはずだ――

「なんだ。足りないと思ったら、こんなところに落ちてたのか――」

そんな古城の決意を嘲弄するかのように、笑い含みの冷淡な声がした。

声の主は、白いコートを着た錬金術師の青年。

特徴的な赤白の帽子と銀色のステッキは身につけていないが、だからといってこの男の顔を見間違うはずもない。天塚汞だ。

「戻ってきて正解だったな。まさか、そんなふうに隠れていたとはね」

まばらな街路樹の陰から現れた天塚が、古城たちのほうに悠然と歩いてくる。

しかし独り言めいた彼の言葉は、古城たちに向けられたものではなかった。

敵意を剝き出しに身構える古城を無視して、天塚が見つめていたのは血まみれの浅葱だ。

彼は、浅葱の死体を回収するつもりなのだ。

「止まれよ、錬金術師――」

天塚の行く手を塞ぐように、古城は浅葱を庇って前に出た。

そのときになって天塚はようやく、古城たちの存在に気づいたようだった。無言で視線を巡らせて、つまらなそうに息を吐く。

「いちおう訊いてやるよ。浅葱を殺したのはおまえなのか――？」

殺意を圧し殺した口調で、古城が訊いた。しかし天塚は訝しげに目を細め、

「浅葱って、誰さ？　その辺に転がってる死体のどれかのこと？」

「てめェ……」

拳を固めた古城の右腕が、キン、と耳障りな高周波をまとった。
眷獣の魔力が洩れ出しているのは同じだが、暴走しているわけではない。今は古城が自らの意思で、吸血鬼の力を制御しているのだ。
制御できる。してみせる。浅葱の死を無駄にしないために。もう誰も殺させないために。
「邪魔しないでよ、第四真祖――」
気怠く言い放った天塚が、無造作に右腕を振り上げた。
流動するその指先が、鞭に変化して古城を襲う。そこまでは予想どおりの攻撃だ。
だが、天塚が放った攻撃は一本だけではなかった。肘のあたりで十数本に枝分かれした腕が、それぞれ意思を持つ蛇のようにのたうって、さまざまな角度から古城を襲ってくる。
そのすべてをよけるのは、吸血鬼の反応速度をもってしても不可能だ。そして天塚には物質変成がある。不死身の吸血鬼をも一瞬で無力化する錬金術の秘技が。
回避不能の天塚の攻撃に古城は硬直し、しかし吹き飛んだのは、錬金術師のほうだった。
天塚の死角から彼の懐に飛びこんだ雪菜が、苛烈な上段蹴りを叩きこんだのだ。
「鳴雷――!」
屈強な獣人すら昏倒させる呪力をまとった剣巫の一撃に、天塚の痩身が浮き上がる。それを見た瞬間、古城も地面を蹴りつけていた。
「終わりだ、天塚ッ!」

爆風をまとった古城の右拳が、天塚の胸に突き刺さる。
手加減はしなかった。吸血鬼である古城が全力で殴れば、ましてやそこに眷獣の魔力が加われば、人間の肉体では耐えられない。おそらく跡形もなく爆散することになるだろう。
それがわかっていても古城は手加減しなかった。手加減することができなかったのだ。
天塚が浅葱を殺したからではない。
一撃で天塚を斃さなければ、今度は雪菜が殺される――古城はなぜかそれを理解していた。魔族としての本能がそう教えてくれたのだ。
不自然な形に折れ曲がった天塚の身体が、道路に叩きつけられて舗装を抉った。これだけのダメージに耐えられるものは魔族でもそう多くないはずだ。
しかし天塚は耐えきった。
古城と雪菜が見ている中、錬金術師がゆっくりと起き上がる。
彼の顎は雪菜の蹴りで砕け、古城に殴られた胴体は陥没していた。背骨も折れているようだ。
この状態で人間が立ち上がれるはずがない。そう。天塚が人間ならば――
「ひどいな、二人とも……これじゃあ、もう原形が保てないじゃないか……」
ちぎれたコートの襟元から、彼の肌が覗いていた。黒錆に覆われたような、金属質の肌だ。
心臓の代わりに埋めこまれていた黒い宝石が砕け散り、彼の足元にバラバラと落ちていく。
それが引き金になったのか、天塚の輪郭が唐突に歪んだ。

人間の形が崩れて、ドロリとした漆黒の流動体へと変わっていく　不定形の液体金属の塊に、

「なんなんだ、こいつは……？」

ついさっきまで錬金術師だった生き物を睨んで、古城がうめいた。

「まさか……　〝賢者の霊血〟　……!?」

雪菜が戦慄したように呟く。聞き覚えのあるその言葉に、古城はギョッとした。

不滅の肉体と無尽蔵の魔力。錬金術師が追い求めた完全なる〝神〟の肉体。

「こんなものが、錬金術師の究極の目的だと……!?」

「――先輩！」

半ば放心して立ち竦む古城を、雪菜が横殴りに突き飛ばす。

その直後、古城が立っていた場所を、黒銀の閃光が駆け抜けた。

道路のアスファルトが音もなく飛び散り、地割れのような亀裂が深々と刻まれる。

天塚の攻撃なのだろうが、あまりの速度に、なにが起きたのか古城には理解できなかった。

瞬く間に先の未来を視る雪菜の〝霊視〟がなければ、二人とも跡形もなく消滅させられていたはずだ。人間の姿を失って物質変成は使えなくなったらしいが、それと引き換えに天塚は、より凶悪な攻撃力を手に入れたのだ。

戦闘が長引けば、おそらく古城たちに勝ち目はない。

「先輩！　彼は、もう

「わかってる！」

振り返る雪菜に、古城は迷いなくうなずいた。

天塚は、もはや錬金術師どころか魔族ですらない。意思の疎通を行うこともできない醜悪な化け物だ。このまま彼を生かしておけば、どれだけの犠牲が出るか想像もつかない。

おそらく彼のような存在を消滅させることが、世界最強の吸血鬼などという馬鹿げた力を与えられた古城の義務なのだろう。

「疾く伏れ、〝龍蛇の水銀（アルメイサ・メルクーリ）〟！」

古城が掲げた両腕から鮮血が噴き出した　それはゆらりと陽炎のように揺らいで、巨大な眷獣の姿に変わる。第四真祖が自らの血の中に従える、十二体の召喚獣の二番目

水銀の鱗に覆われた双頭の蛟龍だ。

『おお……お……Ｏｏｏｏｏｏ……』

かつて天塚だった漆黒の流動体が、巨大な触手を伸ばして双頭龍を刺し貫こうとした

しかし水銀色の眷獣は意に介さない　ゆるやかに流動する蛇身をうねらせて、巨大な顎を開き、その攻撃を丸ごと呑みこんだ　そして跡形もなく消していく。

第四真祖の二番目の眷獣は、次元喰い　すべての次元ごと空間を喰らい、世界から消滅させるのだ。

『Ｏｏｏｏｏｏ

融合増殖する不滅の肉体も、再生能力も、双頭龍の攻撃の前には無力だった。
敗北を確信した漆黒の流動体は、自ら分裂して逃走しようとする。しかし、
「――喰い尽くせ、〝龍蛇の水銀〟！」
降下したふたつの巨大な顎が、分裂した流動体をすべて呑みこみ、消滅させた。
あとに残されたのは破壊された公園と、そして砕け散った黒い宝石だけだった。
暴れ足りずに不満そうな双頭龍の召喚を無理やり解除して、古城が長い溜息をつく。
「終わったのか……これで……」
天塚の成れの果てである砕けた宝石を見下ろして、古城は力無く呟いた。
夕闇の中にたたずむ古城を、雪菜が無言で見つめている。
異形の錬金術師は斃した。だが、そんなことを望んでいたわけではない。
結局、天塚がなにをしたかったのか、理解できないままだった。
しかし古城はそれを知りたいとも思わない。たとえそれを知ったところで、浅葱の命は戻ってはこないのだ。殺されてしまった浅葱はもう――
「古……城……？」
そのとき聞こえてきた懐かしい声に、沈黙していた古城と雪菜は弾かれたように振り向いた。
瓦礫の散らばる道路の上で、華やかな容姿の女子高生が、ぎこちなく上体を起こしている。
「あいたたたた……うわ!?　なにこれ、どうなってるの!?」

破れた制服と、べっとり血で汚れた両手を見下ろし、彼女は情けない悲鳴を上げた。
緊張感のないその姿に、古城と雪菜は絶句する。
彼女が生きているはずがないのだ。傍に寄って確認するまでもなく、呼吸も脈も止まっていたはずだ。身体を深々と斬り裂かれ、血溜まりの中に沈んでいた。
吸血鬼でもない普通の人間が、あの状態から復活できるはずがない。
「浅葱、なのか……？」
古城が怖ず怖ずと問いかける。
そんな古城を怪訝そうに見上げて、浅葱は少し愉しそうに笑った。あまり色気を感じない、ニヤニヤとした表情で。
「ほかの誰に見えるってのよ？　って、うわ、なんじゃこりゃ!?」
立ち上がった浅葱が、周囲の惨状に気づいて大声を出す。
倒壊した修道院の建物。破壊された公園。抉れた道路。彼女が驚く気持ちもわかる。
しかし、信じてもらえるだろうか。ついさっきまで彼女自身も、その破壊された光景の一部だったなどと。
「なんなんだ、いったい……」
気の抜けたような口調で呟く古城の顔に、我知らず笑みが浮かんでいた。
それを見て、雪菜も安堵の表情を浮かべる。

声を上げて笑い出す古城の姿を、血まみれの浅葱が不思議そうに見つめていた

1

修道院跡地に特区警備隊の大部隊が押し寄せてきたのは、それから間もなくのことだった。
古城たちは公園の自販機の陰に隠れて、彼らの車をやり過ごす。
特区警備隊に対して、疚しいところがあったわけではない。天塚との戦闘は正当防衛だったし、浅葱に至っては事件の被害者だ。
とはいえ、彼らに見つかると、面倒なことになるのも間違いなかった。古城は未登録の吸血鬼で、雪菜はその監視役。おまけに浅葱は生き返った直後で、いまだに全身血まみれなのだ。この状況で彼らに捕まって、あっさり解放してもらえるとは思えない。あとで那月あたりに頭を下げて、うまく処理してもらうしかないだろう。
幸いにも彼らが古城たちの存在に気づくことはなく、三人はなんとか無事に公園を離れる。折しも街は夕闇に包まれて、浅葱のボロボロの服装もそれほどは目立たずに済みそうだった。
「赤白チェック模様の錬金術師？」
道すがら、ごわごわと血で汚れた髪を気にしつつ、浅葱が古城の質問に答えてくる。
「あー……あれって錬金術師だったんだ。売れない芸人かと思ってた。あとなんだかドロドロした水銀の化け物もいたはずだけど　そっちはどこに行っちゃったの？」

「あー、いや、あいつは通りすがりの吸血鬼とその監視役が斃したっていうか……」
「は？」
逆に浅葱から訊き返されて、古城はへどもどとうろたえた。
必死で言い訳を考えながらも、頭の片隅にかすかな疑問がよぎる。浅葱の証言を信じるなら、彼女が見たドロドロの化け物は、古城が斃した天塚とは別の存在、ということか　？
「わたしたちが来たときには、もうこんな状態でした。なので、詳しいことはなにも」
言葉に詰まる古城を見かねて、雪菜がさりげなく助け船を出してくる。
「……そっか。普通に考えて特区警備隊が片付けてくれたってところかな」
当然といえば当然だが、浅葱はあっさりと納得した。
古城が吸血鬼になってしまったことを、浅葱は知らない。彼女が鈍いわけではなく、古城の存在が規格外過ぎるせいだ。普通の人間がいきなり吸血鬼の真祖になることなど絶対にあり得ないとされているし、なまじ古城とのつき合いが長いぶん、それが盲点になって変化に気づかないのなのだろう。
「それよりも、おまえは本当になんともないのか？」
浅葱の横顔を見つめて、古城が訊く。見たところ彼女に大きな外傷はない。指先の切り傷もいつの間にか治っていたらしい。そのことが余計に古城たちを困惑させる。
浅葱の周囲に飛び散っていた鮮血は、間違いなく彼女自身のものだったはずだ。

吸血鬼である古城が、彼女の血の匂いを間違えるはずがない。しかし――

「なんともないわけないでしょうが！　見てよ、これ。制服だけじゃなくて下着まで真っ二つ……って、やっぱ、今のなし！　見るな！」

制服の破れ目をアピールしようとした浅葱が、一人で勝手に自爆して騒いでいる。その姿は、まったく普段どおりの藍羽浅葱だった。ついさっきまで死んでいた人間の態度とは思えない。

「意外に平気そうだな」

心配するのが馬鹿馬鹿しく思えてきて、古城は気怠く独りごちた。

雪菜も同意するようにうなずいて、

「そうですね。でも、念のため病院で検査してもらったほうがいいと思います」

「それは俺もそう思うけど、問題は医者になんて説明するかだよな」

「うわ、それ、想像しただけでもちょー面倒くさい。そもそもあたしが死にかけてたってのが、古城たちの見間違いだったわけでしょ？」

浅葱が不満たらたらで唇を尖らせる。生き返った自覚がないだけに、面倒な思いをしたくないということなのだろう。しかし古城としてもそこは譲れない。

「気絶してたのは確かなんだし、医者には診せておいたほうがいいだろ。後遺症が出たら厄介だし。なんだったらうちの母親に頼んでみるか？」

「……ああ、そっか。古城のお母さんってＭＡＲの研究所にいるんだっけ」

浅葱が少しだけ態度を和らげた。うーん、と思案するように、しばし腕を組む

「ほかの人に診られるよりは、そっちのほうがマシかな　深森さんにも久々に会いたいし」

「そうしてくれ。研究所まではつき合ってやるから」

気まぐれな浅葱の説得にどうにか成功して、古城がやれやれと息を吐く。ちょうど駅に向かう分かれ道に差しかかるところだった。

「では、すみません。わたしはここで失礼します」

信号を待つ古城たちに向かって、雪菜が礼儀正しく頭を下げた。

「骨董屋に戻るのか？」

「はい。師家様に報告して、特区警備隊（アイランド・ガード）への連絡をお願いしてみます。お預かりした式神も壊してしまいましたし」

雪菜が、浅葱に聞こえない程度の小声で囁いてくる。

古城は、すまん、と彼女に手を合わせた。例の紗矢華もどきの式神が壊れたのは、古城が怒りに我を忘れて魔力を暴走させたせいだ。せっかくの精巧な式神を破壊されて、雪菜の師匠が腹を立てている可能性は高かった。

「悪いな、助かる。まさかとは思うが、罰ゲームはないよな」

「わ、わかりません。気まぐれな方ですから」

雪菜が強張った表情で首を振る。

式神を直接壊したのは古城でも、やはり彼女も連帯責任を問われたりするのかもしれない
あの恥ずかしい制服を着せられた自分の姿を想像して、怯えているような態度だった
そして雪菜は、ふと真剣な眼差しで古城を見上げてくる。
「先輩……あの、大丈夫ですか？」
「え？」
「あのとき先輩が、天塚汞……いえ、あの怪物を消滅させてくれなかったら、たぶんわたしは殺されてました。だから……」
不安げな表情の雪菜を見返して、古城は静かに笑ってみせた。
いくら正当防衛だと主張しても、古城が天塚を殺したことは事実だ。その事実が古城の心の奥に、融けた鉛のような重苦しい翳を落としている。雪菜は、そんな古城の、内心の動揺に気づいていたのだろう。
だが、一方で古城は、むしろ自分自身の奇妙な冷静さに驚いていた。
「ああ、わかってる。気にしてないから」
そう言って古城は、ぽん、と雪菜の頭に軽く手を置いた。
一瞬、脳裏をよぎったべつの少女の面影に、そうか、と古城は納得する。逆巻く炎のような虹色の髪と、焔光の瞳。古城はかつて彼女を喰らい、第四真祖の力を奪った。
古城が怪物を殺したのは初めてではない

それが古城の醒めた感覚の理由なのかもしれなかった。
「……深森さんに会いに行くのはいいんだけどさ、まさかこの恰好でモノレールに乗せてMAに連れてくとは言わないわよね。つか、これじゃ家にも帰れないんだけど」
遠ざかる雪菜の背中を見送って、浅葱が途方に暮れたように言った。
「ああ、そうか。たしかにそうだな」
立ち尽くす浅葱を見て、古城が低くうなる。彼女の破れた制服は古城のパーカーを着せて隠しているが、血まみれの髪やスカートまでは誤魔化しようがない。こんなワイルドな恰好でモノレールに乗りこんだら、間違いなく通報されてしまうだろう。
「ちょっと遠いけどうちのマンションまで歩けるか？　着替えくらいは用意できるぞ」
道路標識を見上げて、古城が訊いた。同じ人工島南地区にある古城の自宅までは、おそらく徒歩で四十分ほど。面倒だが、歩けなくはない距離だ。
「妥当なセンよね。まったくもう、なんでこんなことに……」
右の耳たぶを弄りながら、浅葱が愚痴る。さっき死にかけた直後だというのに、ピアスをなくしたことをまだ気にしているらしい。
そんな彼女を眺めて、古城は長々と嘆息した。
「はーっ」
「……どうしたの？」

「いや、おまえが生きててくれてよかったと思って」
ぼそりと呟く古城を見上げて、浅葱が不思議そうに瞬きする。そして彼女は、ニヤッと不敵な微笑みを浮かべ、
「泣いた？」
「泣いてねーよ」
「ごめん。今、ハンカチ出せないんだけど」
「だから泣いてねえっての」
ふて腐れたように古城が言い返し、浅葱が声を上げて笑い出す。
そしてまったくいつもどおりの距離感のまま、二人は古城の自宅に向かって歩き出した。

2

「古城君、おかえり、遅かったね！　牛乳、買ってきてくれた？」
帰り着いた古城を待ち受けていたのは、エプロン姿の凪沙だった。ただいま、を言う暇すら与えてもらえず、古城はいきなり駆け寄ってきた彼女の勢いに圧倒される。
「牛乳ってなんだ。聞いてないぞ」
「えー……!?　さっきメッセでお願いしたのにー！」
菜箸を握りしめたまま凪沙が猛然と抗議する。
着信履歴を確認しようと、古城はポケットに手を伸ばした。しかし、そこから出てきたのはボロボロに壊れた携帯電話の残骸だけだった。壊した犯人はもちろん古城自身。吸血鬼の魔力を暴走させたときの余波を、もろに喰らってしまったのだろう。
ここ半年で何台目だっけか、と壊した携帯の数を思い出し、古城はずっしりと落ちこんだ。ただでさえ少ない預金通帳の残高が、これでまた一歩ゼロに近づいてしまうのだろう。
「牛乳、この時間だったら売れ残ったやつが安くなってたかもしれないのに。今日の晩ご飯グラタンなんだけど、どうしよう。やっぱりさっきのやつを捨てないで使うべきだった？　でもあれ消費期限が十三日も前に過ぎてたんだよね」
「それはやめとけ。挑戦的すぎる。てか、そんなもの冷蔵庫に残しとくなよ」
本気で悩み始める妹を、古城が慌てて制止する。まだ少し未練がましい表情を浮かべていた凪沙は、そこで古城の背後に誰かがいることに気づいたようだった。
「あれ、雪菜ちゃんと一緒だった？　もしかして雪菜ちゃんちに牛乳余ってないかな？」
「いや、連れてきたのは姫柊じゃなくて……」
どうやって説明しようか、と古城がまごついていると、そんな古城を押しのけるようにして浅葱が勝手に玄関に入ってきた。
「こんばんは。ごめんね、急に」

「浅葱ちゃん？　わ!?　どうしたの、その恰好!?」
悲惨な恰好の浅葱を見て、凪沙がびっくりしたように目を見張った。
浅葱は少し愉しげに苦笑して、
「いやー……ちょっと学校の帰りにねー……」
「できもしない料理をしようとして鍋を爆発させたんだ」
「え!?」
古城が横から割りこんで重々しく言い放ち、その不名誉な言い訳に浅葱が顔をしかめる。
「ちょっと、古城!?」
「おまえが怪物に襲われたとか、凪沙に聞かせられねーだろ。我慢しろ」
「ほかにもっとマシな言い訳があるでしょうが……あんた、あとで覚えてなさいよ」
古城に小声で説き伏せられて、浅葱が憎々しげに囁いた。
〝魔族特区〟の住人でありながら、凪沙は魔族のことをひどく恐れている。過去に魔族がらみの大きな事故に遭遇し、瀕死の重傷を負ったことがあるからだ。そのあたりの事情を知っているだけに、浅葱も古城に強く言い返せない。
そして凪沙は、膨れっ面の浅葱を快く招き入れ、
「そっか。大変だったね。いいよいいよ、上がって上がって。シャワー浴びてきて！」
「俺は牛乳を買ってくればいいんだな」

浅葱の面倒は妹に任せることにして、古城は再び玄関ドアに手をかける。
そんな古城を、凪沙が忙しなく呼び止めた。
「あ、待って。やっぱり凪沙が行ってくるよ。宿泊研修に持ってくお菓子も買いたいし。古城君にお任せするとロクなの買ってこないもんね。梅ヨーグルト味のポテチとか」
「美味いじゃねーかよ、梅ヨーグルト」
古城が少しムキになって反論する。しかし凪沙は、兄の抗議をきっぱりと無視。
「はいこれ、新しいバスタオルと古城君のジャージ。洗面台の右側にあるコスメ、自由に使っていいからね。浅葱ちゃんも晩ご飯ウチで食べてくよね。またあとでね！」
手渡されたタオルと着替えを抱いたまま、浅葱が、いってらっしゃい、と凪沙を見送った。
そして浅葱は我慢できなくなったようにクッと笑って、
「相変わらずちょこまかしてて可愛いわね、凪沙ちゃん。うちの妹にしたいわ」
「え？」
「あ、違くて……義理の妹とか、そういう意味じゃなくて、まだ！」
焦ったように訂正する浅葱を胡乱げに眺めて、古城は彼女を追い払うように手を振った。
「なんでもいいからさっさと風呂入れ。場所はわかるよな」
「うん。ありがと」
浅葱は慣れた足取りで廊下を進んで、バスルームへと向かった。

脱衣所のドアにしっかりと鍵をかけ、洗面台の鏡を覗きこむ。

「うわ、ひどいな。これ」

乾いた血と泥のこびりついた自分の顔を見て、浅葱は思わず頭を抱えた。古城や雪菜の前でこんな醜態を晒していたのかと思うと、それだけで自らの不運を呪いたくなる。

とりあえずメイクを落として、服を脱ぐ。

引き裂かれた下着と制服は、買い直すしかないだろう。

しかし派手に破れた服とは裏腹に、浅葱の身体には傷ひとつ残されていなかった。たしかに奇跡的な確率だ。古城たちが驚くのも無理はない。

片付け魔の凪沙が管理しているだけあって、暁家の浴室は綺麗に使われている。

他人の家の風呂場を使うのは多少緊張したが、それでも全身の汚れを洗い流すと、ようやく人心地がついた。風呂上がりに再び古城と顔を合わせることを想像し、念のため必要以上に丁寧に身体を洗っておくことにする。

そのとき浅葱の指先が、異物に触れたような違和感を訴えた。鉱物のような冷たい感触だ。

「え……？」

浅葱は怪訝に思いながら、湯気で曇った鏡に自分の全身を映す。

違和感の原因はすぐに見つかった。ふたつの胸の膨らみの狭間。心臓のほぼ真上あたりに、紅く透きとおった石がくっついている。美しい多面体にカットされた小さな宝石だ。

肌の上に貼りついているのかと思ったが、そうではなかった。

まるで肉体の一部のように、紅い宝石は浅葱の胸の中に埋めこまれている――

「なに、これ？」

浅葱は驚いて石に触れた。特に禍々しさや恐怖は感じない。石は、ただそこに埋めこまれているだけだ。だがそこに意識を向けた瞬間、浅葱の視界は暗転した。

記憶の連続性が不意に途切れて、深い死のような眠りに落ちていく。

3

そのころ古城はキッチンでコーヒーを淹れていた。

インスタントではなく、豆を挽くところから始める、そこそこ本格的なやつである。

古城がコーヒーを飲み始めたのはわりと最近、吸血鬼になってからのことだった。夜行性の吸血鬼が、真っ昼間に学校に通うという過酷な生活を強いられているのだ。カフェインにでも頼らなければやっていられない。

耳を澄ますと、水の流れる音が聞こえてくる。壁一枚隔てた場所で、クラスメイトの女子がシャワーを浴びているというのは、冷静に考えるとけっこうすごい状況だ。

あまりそちらに気を取られないように、平常心でカップを口に運び、

「ぶほっ!?」

その直後、古城は勢いよく咳きこんで、盛大にコーヒーを撒き散らした。

キッチンのドアが開き、浅葱が中に入ってきたからだ。

シャワーを浴びた直後の浅葱は、髪を無造作に下ろしていた。彼女にしてはめずらしくすっぴんで、拭き残した水滴が頬を汗のように流れていく。

そして彼女は、衣服を身につけていなかった。

下着もタオルも、なにひとつ——

バスルームから出てきたままの姿。完全な素っ裸だ。

「あ、浅葱!? なにやってんだ、おまえ!?」

あまりにも堂々とした浅葱の態度に、逆に古城のほうが狼狽する。彼女の行動が予想外すぎて現実感がまるでない。おかげで目を逸らすタイミングを失ってしまう。

「ふむ。ただの人間……ではないな。吸血鬼か」

浅葱はゆっくりと首を巡らせて、硬直している古城を見た。

「なるほど、ちと尋ねたいが、ここは主の館か？」

「な、な、なにを言い出してんだおまえは……!?」

いきなり素性を言い当てられて、古城は完全にパニックに陥る。なぜ浅葱が今になって古城の正体を見抜いたのか、心当たりがまるでない。

「ていうか、浅葱？　おまえ本当に大丈夫なのか!?」
「主のほうこそ、なにを慌てている。そう怯えずともよいぞ」
浅葱は愉快そうにそう言って、古城のほうへと静かに近づいた。
派手な服装ばかりが目立つが、浅葱は地味にスタイルもいい。大喰いのくせに贅肉とは無縁で、出るべきところもそれなりに出ている。手入れの行き届いた肌は白く滑らかで、湯上がりのせいかほのかに紅潮していた。古城にはあまりにも刺激が強すぎる光景だ。
性欲と困惑と吸血衝動、猜疑心と罪悪感がない交ぜになって、古城の脳容量は完全に飽和。あふれ出した煩悩が、鮮血となってダダ洩れる。
「ぐ……!?」
勢いよく鼻血を噴き出して、古城は再び咳きこんだ。前屈みになった古城の隣に、浅葱が裸足のまま駆け寄ってくる。
「おい、吸血鬼!?　なにがあった。しっかりせよ！」
「ふ、ふく……」
「ん？」
「服！　服だ！　いいから早くなにか着ろ――！」
血まみれの姿で古城が叫んだ。いくら混乱していても、ここまでくればさすがに気づく。目の前の少女は浅葱ではない。浅葱と同じ見た目でも、中身は完全に別人だ。

「おお、そうか。済まぬな、起き抜けでいささかぼんやりとしていたようだ」
浅葱の姿をした少女は、自分がなにも着ていないことにようやく気づいたようだった。
ふむ、と周囲を見回して、テーブルの上に置かれていた花瓶に手を伸ばす。
そして彼女が手を触れた瞬間、生けられていたカーネーションの花束が、純白に輝く布地へと変わった。艶やかな光沢を保つシルク生地だ。
彼女はそれを自らの身体に巻きつけて、どこからともなく出現した金色の金具で留めた。相変わらず露出度は高いが、いちおう衣装らしくなる。
「とりあえずは、これで支障あるまい」
得意げな口調で彼女が言う。それを呆然と見つめて古城は訊いた。
「おまえ……今、なにをした……？」
「花瓶の中身を材料にして、シルクを創製しただけだ。有機物の操作は専門外なので、あまり複雑な構造のものを創り出すことはできんがな」
「……物質変成!?　錬金術か!?」
「なにを驚く？」
愕然と呟く古城の姿を、少女は浅葱と同じ顔で面白そうに眺める。
「妾はヘルメス・トリスメギストスの末裔にして、大いなる作業を究めし者。パルミアのニーナ・アデラードだぞ。この程度の手品、術と呼ぶのもおこがましいわ」

「ニーナ・アデラード……!?」

突然聞かされた予想外の名乗りに、古城はうめいた。

「って、おまえ、さっきまで普通に浅葱だったじゃねーか!?」

「ああ、相分かった。アサギというのはこの娘の名前だな」

浅葱の姿をした少女が、そう言って自分自身の胸元に手を当てる。そこにある深紅の輝きに気づいて、古城は眉間にしわを寄せた。

「その宝石……!」

「これか。これは〝錬核〟という」

「〝錬核〟?」

「うむ。自己増殖型の液体金属生命体である〝賢者の霊血〟の制御モジュールだ。そうさな、一種の呪術的な記憶媒体とでもいおうか。妾の魂を形にしたものだと思え」

魂か、と古城は小さく独りごちた。その言葉で、ようやく状況が見えてきた気がする。

「そいつを無理やり埋めこんで、浅葱の身体を乗っ取ったのか?」

「乗っ取った? それは違うぞ。融合して共生しているだけだ」

「そういうのを乗っ取ったっていうんだよ!」

古城は、ようやく治まった鼻血を拭って立ち上がる。

ニーナ・アデラードと名乗る少女は、少し拗ねたように唇をへの字に曲げて、

「ふむ しかし妾がいなければ、この娘、死んでいたぞ。〝賢者の霊血〟の攻撃に巻きこまれてな」

「……おまえか!? あのとき、浅葱を生き返らせたのは……!」

古城は虚を衝かれて低く呟いた。絶命した浅葱が無傷で復活したあの不可解な現象も、大錬金術師を名乗るニーナ・アデラードの仕業といわれれば、まだ腑に落ちる。

しかし少女は、いや、と偉ぶることもなく首を振った。

「錬金術の奥義をもってしても、死人を生き返らせることはできぬよ。妾はただ、この娘が絶命する前に傷を癒しただけだ。間に合うかどうかは賭けだったが。運がよかったな、妾も、この娘も。お互いにな」

「そうか」

古城が唇を噛みながら息を吐く。浅葱はやはり、歩間違えれば死んでいた。本当にギリギリのところで助かったのだ。正確にはまだ完全に助かったとは言えないのかもしれないが――

〝賢者の霊血〟を創製ったのは、あんただったんだろ。あんたは自分の身体をそいつに置き換えて、不老不死の肉体を手に入れたって聞いたぞ?」

「……そう褒めるな。面と向かって言われると、照れるではないか」

浅葱の姿をした少女が、本気で照れたように頭をかく。

古城は荒々しく歯を剝いた。

「褒めてねえ！　なんで、その〝賢者の霊血〟が浅葱を襲ったのかって訊いてんだよ！」

「〝偽錬核〟のせいだな」

「……〝偽錬核〟？」

今度はなんだ、と訊き返し、古城はハッと思い出す。

「もしかして、天塚の胸にあった黒い石のことか？」

「ほう。彼奴を知っていたか」

「そういえばあいつも錬金術師だったな。何者なんだ、あいつ？　あんたの知り合いか？」

古城が詰問するような口調で訊くと、少女はなぜか困惑したような表情で腕を組んだ。

「天塚汞は妾の弟子だ。いや、とっくに破門済みだから、元弟子というべきかな」

「……弟子？」

「〝偽錬核〟は、文字どおり〝錬核〟の偽物だ。不完全な〝錬核〟と言ったほうがわかりやすいか？」

「まあ、なんとなく言いたいことはわかる」

師匠であるニーナ・アデラードが完全な〝錬核〟を所有しているのに対して、弟子の天塚が扱えるのは不完全なまがい物だけ――ある意味わかりやすい構図ではある。

「〝偽錬核〟も〝賢者の霊血〟を制御できるが、その機能は不完全だ。些細なきっかけでコントロールを失って暴走する。天塚は封印されて眠っていた〝霊血〟に、その〝偽錬核〟をぶち

こんでくれよった。本来の制御ユニットである妾が完全に起動する前にな」

「弟子に寝込みを襲われて、セキュリティソフトが起動する前に、パソコンにウィルスを流しこまれたって感じか」

古城は勝手に話を大雑把に整理する。それほど的外れな解釈でもなかったのか、ニーナ・アデラードは訂正しなかった。彼女がパソコンというものを知らなかっただけかもしれないが。

「だったら浅葱が見た化け物ってのは――」

「うむ。暴走した〝賢者の霊血〟だな」

浅葱の姿をした少女が、古城の言葉を肯定する。

「天塚が使った〝偽錬核〟は五つ。〝核〟が魂なら〝霊血〟は肉体だ。ひとつの肉体に複数の魂が入ったらどうなると思う？」

「分裂……いや、暴走……か」

古城が顔をしかめて言った。少女は溜息混じりにうなずいて、

「どちらも正解だ。暴走した液体金属の肉体は、天塚を攻撃しようとしてアサギを巻きこんだ。妾は汚染された〝霊血〟を切り離して、アサギの中に逃れた。そうしなければアサギは死んでいたし、妾には自由に動かせる肉体がなかったからな」

「そういうことかよ……」

ようやく状況を呑みこんで、古城はうんざりと首を振る。

古の大錬金術師ニーナ・アデラードは、弟子に裏切られて不死身の肉体を奪われ、浅葱はそのとばっちりで死にかけた。そして命を救う代償として、ニーナは浅葱に取り憑いた、というわけだ。そういう事情では、単純にニーナを責めるわけにもいかない。

もちろんニーナにまったく責任がないとはいわないが――

「案ずるな。この身体に危害を加えるつもりはないし、妾が眠っている間はアサギの意識が日覚めるはずだ。記憶が飛び飛びになってしまうのは、少々厄介だがな」

恨みがましい古城の視線に気づかず、ニーナはどこか得意げに胸を張る。

「あんたは浅葱の中から出られないのか？」

「難しいな。この〝錬核〟は完全体ではないし、妾が制御していたわずかな〝霊血〟は、ほとんど全部、この娘の肉体を修復するときに使ってしまったからな」

浅葱の姿をした少女は、そう言って少し困ったような表情を浮かべた。

古城はかすかな期待を抱きながら、彼女が巻きつけたシルクの布を指さして

「その服を作ったときみたいに、ぬるっと手から出したりできねーのかよ」

「主は錬金術の極致たる〝賢者の霊血〟をなんだと思っているのだ」

ちょっと傷ついたような口調で言い返すニーナ。

「そうさな、この娘の体重と同じだけの黄金と銀と希少金属各種。それに水銀が九百リットル、あとは供物となる霊能力者が十四、五人もいればどうにかなるが――」

「無茶言うな……！」

古城は思わず大声を出す。些細なことで暴走するドロドロの化け物を生み出すには、あまりにも高すぎる代償だ。

「妾が〝賢者の霊血〟の製法を秘匿した理由、わかったであろう？　たかだか不老不死程度を手に入れる対価としては、この技はあまりにも業が深すぎる。妾とて望んでこのような身体を得たわけではないのだ」

「……まあ、それは少しだけわかるよ、俺にも」

古城は古の大錬金術師に初めて同情した。不老不死の肉体と、制御しきれないほどの巨大な魔力――望まない力を手に入れたという意味では、古城も彼女の同類だ。

「それに手段はどうあれ、浅葱を助けてくれたわけだしな。それには感謝しないとな」

そう言って古城は、彼女の前で頭を下げた。

浅葱の姿をした少女が、驚いたように表情を消す。

「吸血鬼のくせに、主は意外に律儀な男だな」

「俺が吸血鬼なのは関係ないだろ。あと、その呼び方はやめろ。古城だ。暁古城」

「よかろう、古城。では妾のこともニーナと呼ぶがいい」

ふ、とニーナが柔らかく微笑んで言った。

「それにな、新たに創り出すのは無理でも、もともと存在していた〝賢者の霊血〟は残って

おる」そいつを捕らえて暴走を止めたら、すぐにでもアサギから出ていくと約束しよう。力を貸してもらえぬか？」

「そういうことなら、いくらでも手伝うけどな」

古城は迷いなくそう言った。しかしすぐにその表情を曇らせる。本気でニーナ・アデラードと協力するつもりなら、古城は彼女に伝えておかなければならないことがある。

「だけど、その前にあんたには謝っておかないと」

「なんだ？」

「天塚汞は、俺が殺した。あんたの弟子、だったんだろ……すまない。怪物になったあいつを斃すには、ほかに方法がなかったんだ」

胸の奥に重苦しい疼きを覚えながら、古城は告白した。

第四真祖の力を行使して、異形の怪物と化した天塚を消滅させた。それを後悔しているわけではない。誰かがやらなければならないことだったのだ。

だが、天塚汞という存在が、古城の手によって永遠に失われてしまったことも事実だった。どんな理由があったとしても、古城がその罪から赦されることはないはずだ。

「殺した……？　主が彼奴を？」

しかしニーナは、どこか間の抜けた口調で古城に訊き返す。

彼女が浮かべていたのは怒りでも哀しみでもなく、単なる困惑の表情だった。

「そう言われても、彼奴はまだ生きておるぞ？」

「……え？」

「彼奴が創り出した〝偽錬核〟は、彼奴が死ねば機能を失う。〝偽錬核〟が動き続けているということは、彼奴の本体はまだ生きているということだ」

「本体って……まさか、あいつも分裂していたってことか……？」

黒い宝石を破壊され、液体金属の怪物に変わった天塚の姿を古城は思い出す。ニーナが、自分の〝錬核〟切り離して〝霊血〟の暴走から逃れたように、天塚も自分の肉体を分裂させることができるとしたら――？

古城が消滅させた天塚は、分裂した彼の一部に過ぎなかったのかもしれない。

「彼奴が怪物の姿に変わったというのなら、間違いあるまい。天塚汞という男は、人間の姿にことのほか執心しておったからな」

ニーナが素っ気ない口調で言う。そうか、と古城はうなずいた。たしかにあのとき、天塚は、人の形を保てなくなったことを嘆いていた。あれは彼の執着が反映された言葉だったのだ。

「なあ、天塚の目的はなんなんだ？　〝賢者の霊血〟ってやつを手に入れて自分が不老不死にでもなるつもりか？」

「わからぬ。それは彼奴に直接訊け」

無責任に首を振るニーナを見て、古城がイライラと眉を吊り上げる。

「あんたは弟子だったあいつを破門したんだろ？　そのことと関係があるんじゃないのか？」
「そうかもしれんな」
ニーナは頬にかかる髪を無造作にかき上げた。
「しかし、なにがあったのかは思い出せん。無理やり覚醒させられたせいか、記憶にエラーが出ているようだ。まあ、そのうち思い出すであろ」
「……記憶喪失かよ」
不機嫌な顔で古城が呟く。アスタルテの話では、ニーナ・アデラードは二百七十歳を超えているということだし、いい加減、物忘れが激しくなっても不思議ではない年齢だ。妙に余裕めいた彼女の落ち着きぶりも、年相応ということなのかもしれない。
だが、天塚の目的を知っていて、わざと古城に隠しているという可能性も捨てきれない。疑心暗鬼に駆られる古城を見返して、浅葱の姿をした少女が、ふふん、と愉快そうに笑う。
彼女が薄っぺらいシルクの布を巻きつけただけだったことを思い出し、
「まあいいや……とりあえず、もうちょっとまともな服を着ろ」
そう言って古城は、ずず、ともう一度鼻血を拭った。

4

コードレスの子機を自分の部屋に持ちこんで、住所録から探してきた番号をコールする。
携帯電話が壊れたせいで、たったそれだけの作業が意外な重労働だった。便利な道具に頼りすぎるのも考え物だな、と古城は真面目に反省する。
しかしそんな古城の苦労は、無愛想な留守電の自動応答メッセージにあっさり裏切られた。
「駄目だ、くそ。つながらねえ！」
電話機を乱暴に投げ出して、古城はぐったりと座りこむ。電話の相手は南宮那月。暴走した〝賢者の霊血（ワイズマンズ・ブラッド）〟を探すにせよ、浅葱の扱いを相談するにせよ、この状況で古城が頼れるのは、特区警備隊（アイランド・ガード）とつながりのある彼女しかいなかった。しかし何度電話をかけても、聞こえてくるのは無機質なコール音と人工音声だけだ。
「ああもう、こんなときに限ってなんでいねーんだよ、あの人は！」
「〝空隙（くうげき）の魔女（まじょ）〟南宮那月……か」
古城のベッドに堂々とあぐらをかきながら、浅葱の姿をした自称〝大錬金術師〟が訊いてくる。今の彼女の服装は、古城が中学時代に使っていたジャージと短パンだ。
普段の浅葱なら死んでも着ないであろうダサいファッションだが、それなりに似合ってしまうのは、やはり彼女の華やかな顔立ちの賜物（たまもの）だろう。
「那月ちゃんのことを知ってるのか、ニーナ？」
「噂は聞いたことがある。欧州で名を馳せた凄腕の魔女らしいな。もっとも、妄（ワン）に言わせれば、

まだまだ尻の青いヒヨッ子だがな」

「二百七十歳のあんたから見れば、大抵の相手はヒヨッ子だろ。まあ、那月ちゃんの場合は、本当にまだ蒙古斑が残ってる可能性もあるけどな」

幼女のように小柄な那月の姿を思い出し、古城が何気にひどいことを言う。

「その魔女なら〝霊血〟を見つけられるのか？」

「ああ。まあ、それもあるんだけどな」

曖昧に言い淀む古城を見て、ニーナは不審そうに目を細めた。

「それ以外になにか用があるのか？」

「学校だよ、学校。浅葱が欠席できるように根回ししとかなきゃまずいだろ」

「べつに妾はアサギのふりをして登校しても構わんが？」

ニーナがきょとんと首を捻る。冗談を言っているつもりはないらしい。

「あんたが良くても俺らが困るんだよ！　だいたいそんなことしてる暇はねーだろ。暴走した〝賢者の霊血〟をとっ捕まえなきゃならないんだから」

「おお、そういえばそうであったな」

緊張感のない声でそう言って、ニーナは、ぽん、と手を叩いた。やる気あんのかコイツ、と抹の不安を覚える古城。そのとき遠慮がちなノックの音が響いて、ドアが開く。

「グラタン焼けたよ、古城君！　浅葱ちゃんも早く来てね！」

そう言って顔を出したのは凪沙だった。わかった、サンキュ、と古城はなるべく平静を装って妹を追い払い、

「いいか、ニーナ。余計なことはしゃべるなよ。浅葱のふりして黙って聞いてろ」

「わかっておる。亀の甲より年の功というであろう。今時の若い連中の駄弁りを真似ることなど造作もないわ」

浅葱の顔でニーナが笑う。根拠もないのに自信だけは立派だ。

「いちいち言い回しが古いんだよ！」

ますます不安を募らせながら、古城は彼女を連れて部屋を出た。

ダイニングテーブルは四人分のグラタン皿が用意され、こんがりと焼けたチーズの芳香が部屋いっぱいに充満している。そして大皿を運んでくる凪沙の隣には、同じくエプロン姿の雪菜の姿があった。

「あれ、姫柊？」

「お邪魔しています、先輩」

せっせと食器を並べていた雪菜が、古城たちに気づいて会釈する。

獅子王機関への報告を終えて、こっちに戻っていたのだろう。普通に制服を着ているところを見ると、どうやら罰ゲームは免れたらしい。

「藍羽先輩も先ほどはどうも」

雪菜は律儀に浅葱にも頭を下げる。それを見たニーナは鷹揚な態度で胸を張り、

「おお、お主は先ほどの剣な――！」

「あ、蚊が」

言いかけたニーナの顔面を、古城がパシッと掌ではたいた。クーッ、と鼻を押さえながら、涙目になったニーナが古城を睨む。

そんな古城たちの仲睦まじげなやりとりを、雪菜が、びっくりしたように見つめていた。

しかし浅葱の中身が齢二百七十の大錬金術師に入れ替わっているとは、並外れてカンの鋭い雪菜も、さすがにまだ気づいていないようだ。

「さっきスーパーで会ったから連れてきたんだ。声かけても大丈夫かどうか迷ったんだけどね。雪菜ちゃん、お菓子売り場ですっごく悩んでたから可笑しくて」

サラダ用のレタスをちぎりつつ、凪沙がクスクスと笑い出す。

雪菜は頬を赤らめながら、照れたように俯いて、

「だ、だって、お菓子は五百円以内って笹崎先生が言ってたし――」

「……姫柊、宿泊研修のこと、実は楽しみにしてたのか？」

古城はふと思いついてなんとなく訊いてみる。これまで獅子王機関で訓練に明け暮れていた雪菜には、この手の学校行事に参加した経験はほとんどないはずだ。顔に出さないようにしていただけで、内心ものすごく期待していたのではないだろうか。

そして雪菜は、図星を指されたというふうにめずらしくうろたえて、

「え!? いえ、楽しみ、なんて、そんな……」

「なに言ってるの、楽しいに決まってるじゃない。みんなで旅行だよ。一緒にお風呂だよ。パジャマパーティだよ。枕投げだよ」

「ま、枕投げ……」

凪沙が口にした言葉の響きに、ゴクリ、と雪菜が喉を鳴らす。

「そうそう。あと、旅行といったら深夜の恋話だよね。雪菜ちゃん、覚悟しといたほうがいいかもだね」

「濃い花？ 三日目の午後に行く絶滅植物公園の？」

「へ？」

的外れなことを言いつつも、雪菜が期待に目を輝かす。

古城は半ば唖然としながら、きらきらとした雪菜の横顔を眺めて、

「おまえ、旅行の日程、全部暗記してるのか？」

「いえ、そこまでは。ただ、旅行のしおりを毎晩見てたらなんとなく覚えてしまっただけで」

「そ、そうか」

何気に重いことを口にする雪菜から、古城は無意識に目を逸らした。もはや疑問の余地はなかった。雪菜は古城が想像していた以上に、宿泊研修を楽しみにしていたらしい。

「言えねーな、これは」

「なにがですか？」

不思議そうに首を傾げる雪菜に、いやなんでもない、と古城は笑ってみせる。

大塚永が消滅したことで、〝賢者の霊血〟の脅威は去った。雪菜はそう思っているはずだ。細々とした後片付けは残っているが、それは古城たちが直接手を出すことではない、と。だから彼女は安心して休暇を満喫できるのだ。そんな雪菜に、実は大塚が生きている、などと今更言えるはずがなかった。それにどのみち今の雪菜は〝雪霞狼〟が使えないのだ。そんな彼女を無理に危険に巻きこむ必要もないだろう。

そうやって真面目に悩む古城の隣では、浅葱のふりをしたニーナが黙々と食事を続けている。その気楽さが少しうらやましくもあるが、喰ってる間は彼女も余計なことをしゃべらないだろうし、凪沙に怪しまれずに済むのはありがたい。

「浅葱ちゃん、おかわりあるよ。よかったら」

「うむ。もらおう。主の料理は美味いな。このような温もり、久々に賞玩したわ」

古城の一瞬の油断を衝いて、素のままの口調で語りだすニーナ。一瞬ヒヤリとする古城だが、凪沙はむしろ明るく笑って、

「もう、大げさだなあ。こないだ夏音ちゃんの快気祝いのときにも食べにきてくれたじゃない。それよりどうしたの、そのしゃべり方？　流行ってるの？」

「そ、そうなんだよ　最近、高等部でな！」

古城が慌てて話を合わせようとする。一方ニーナは、ふと懐かしげな表情で凪沙を見つめ、

「夏音というのは叶瀬夏音のことか？」

「……おい、ニーナ……じゃねえ、浅葱！」

「夏音は元気にしているか？」

小声でたしなめる古城を無視して、ニーナが訊いた。そこで古城はようやく気づく。叶瀬夏音はアデラード修道院の出身者。彼女のことをニーナは知っているのだ。

「今はもう元気だよ。最近は前より明るくなったかも。アスタルテさんとも仲良しみたいだし」

グラタンを頬張りながら、凪沙が言う。それを聞いてニーナは目を細め、

「そうか」

ぽつり、と優しい声でそう言った。

5

通風口のダクトをくぐって、粘液状の塊がこぼれ落ちてくる。

艶やかな漆黒の液体金属生命体だ。それはコンクリートの床の上に溜まって流動し、やがて

白いコートをまとった男の姿へと変わる。天塚永と呼ばれる錬金術師の姿へと

人工島西地区の住宅街。高級マンションの地下駐車場だった。

無数のLEDが夜空の星のように場内を照らしている。駐車中の車両は〝魔族特区〟謹製の、見るからに高価な試作車ばかりだ。

マンションの周囲には強力な攻魔結界が張り巡らされ、最新鋭の防犯装置が不審者の侵入を防いでいる。しかし錬金術師である天塚の侵入は、そのような装備では防げない。

そして結界の内側に入りこんでしまえば、もはや天塚を邪魔するものはなにもない。

このマンションの最上階に彼女はいる。」の役割と罪を忘れて、安逸な日々を貪っている。

それを妬むわけではないが、憎しみを覚えるなというのも無理な相談だった。

だから彼女を——叶瀬夏音を傷つけることには、なんの躊躇もない。たとえ〝彼〟の頼みがなくともだ。

そんなことを思いながら、天塚はエレベーターホールへと向かって歩き出す。

しかし数歩も進まないうちに、彼は再び動きを止めた。

虚空から伸びてきた黄金の鎖が、彼の肉体をがんじがらめに拘束したのだ。

「ここが私の持ちビルだと知って潜りこんできたのか、コソ泥？　だとしたらいい度胸だな」

駐車場の奥、虚空から溶け出すように姿を現したのは、豪奢なドレスをまとった小柄な人影だった。流れる長い黒髪。白い肌。すでに陽が落ち、屋内だというのに、レースに縁取られた

日傘をさしている。その姿は精巧な人形を見ているようで、美しくもどこか恐ろしかった。

「へえ。あんたが魔族殺しの南宮那月か……」

グニャリと全身の輪郭を融かして、天塚が黄金の鎖を振りほどく。

その異様な光景を目の当たりにしても、ドレスの女は表情を動かさない。

「神々の鍛えた〝戒めの鎖〟の縛から、そのような方法で逃れるとはな。本気で奇術師に転向したらどうだ？　案外稼げるかも知れんぞ、天塚汞」

「よく言われるよ――！」

天塚の右手が鞭のように伸びて、那月の細い足首に絡みつく――そう思われた瞬間、彼女の姿は陽炎のように揺らいで、天塚の背後に移動していた。

「無駄だ。私の身体に物質変成は効かんよ、錬金術師」

「そうみたいだね」

特に動揺することもなく、天塚がゆっくりと振り返る。まともに戦うのは不利だと判断して、触手を駐車場内のダクトに伸ばすが、それらはすべて甲高い音を立てて弾かれた。

「そうか……建物に張り巡らせた結界は、侵入を防ぐためではなく、捕らえた獲物を逃がさないためか。いい判断だね」

「アルディギアの腹黒王女に、貴様を捕えてくれと頼まれていたからな。このまま〝監獄結界〟に放りこんでやるつもりだったが、貴様、ただの切れ端か」

再び四方から射出された鎖が、天塚の身体を貫通した

しかし血は流れない　液体金属の姿を取り戻し、天塚は簡単に縛鎖を振りほどく。

「それでも質問に答えられる程度の知能はあるのか？　なぜ今更、貴様が叶瀬夏音を狙う？　彼女の養父から、必要なものはもう奪ったのだろう？」

「彼女を邪魔だと思ってる人がいるからさ」

「……なに？」

那月が初めて表情を震わせた。

日本人離れした銀髪と碧眼を除けば、叶瀬夏音は目立たない生徒だ。性格は控え目で、臆病に見えるほど大人しい。しかし彼女には秘密がある。アルディギア王家の血を受け継ぐ彼女は、生まれついての強力な霊媒なのだ。

潜在能力だけならば、彼女の霊力は〝魔族特区〟でも最高ランクだ。高次空間の神気すら、その身に受け容れてしまえるほどに。

「それに、あの子だけが生き残っているのは、あまりにも不公平が過ぎるじゃないか。だから続きをしなくちゃね。あの五年前の惨劇の続きを、今度こそ」

そう言って天塚は、自らの胸元に手を触れた。

彼の胸の中央に埋めこまれていたのは、黒い宝石。それを力任せに砕き割る。

「貴様……」

天塚の肉体が人の輪郭を完全に失って、今度こそ完全な怪物の姿に変わる。不定型の金属生命体だ。それは無数の触手を吐き出して、那月を切り刻もうと彼女に殺到する。

「ははは、調子に乗りすぎたね、〝空隙の魔女〟！　その人形の身体でも、傷つけば本体に多少のダメージはあるんだろ。今すぐぶっ壊してやるよ！」

那月が操る鎖では、液体金属の刃は防げない。

それを理解してもなお、那月は、天塚だった怪物を冷然と見下ろして息を吐く。

そして彼女の背後から空間を引き裂いて出現したのは、黄金の鎧に包まれた巨大な腕だった。機械仕掛けの悪魔騎士――魔女の〝守護者〟だ。黄金の巨大な腕が衝撃波の壁を造り出し、追り来る無数の刃ごと、天塚の身体を吹き飛ばす。

「ふん。このまま地獄の業火で焼き尽くしてやってもいいが、魂のない抜け殻には、地獄すら過ぎた贅沢か。ちょうど〝霊血〟のサンプルも欲しかったところだしな」

黄金の腕の一振りが、天塚だったモノの周囲の地面を、底なしの虚無の沼地へと変えた。

液体金属の塊は激しく形を変えるが、その漆黒の沼地からは抜け出せない。

〝空隙の魔女〟と呼ばれる那月の本領は空間制御。空間そのものを変質させて、脱出不能の罠を造り出したのだ。

「――アスタルテ、あとは任せる」

つまらなそうにそう言って、那月は背後に控えていた人工生命体の少女を呼んだ

「命令受諾　執行せよ、〝薔薇の指先〟」

抑揚のない無機質な声でそう言って、アスタルテが前に歩み出る。

彼女が着ていたのはいつもと同じ、肩と背中が大きく露出したメイド服だ。

その剝き出しの白い背中に、虹色に輝く巨大な翼が現れる。翼は不気味な怪物の腕となり、身動きを封じられた液体金属の塊へと突き刺さった。

「オオオオオ００００００――！」

かつて天塚だった怪物が、全身を震わせて絶叫した。

あらゆる物理攻撃をすり抜けるはずの液体金属生命体が、非力な人工生命体の攻撃に、為すすべもなく蹂躙されていた。

アスタルテは眷獣共生型人工生命試験体。世界で唯一、眷獣を召喚することができる人工生命体だ。そして彼女が操る眷獣は、他者の魔力や生命力を喰らうのだ。

「自己増殖型の液体金属生命か。不滅の肉体という触れこみ、案外本当だったのかもしれんが、相手が悪かったな」

那月が、すでに天塚には興味をなくしたように呟いた。

金属生命体の表面が光沢を失い、錆びた鉄のように白くひび割れていく。魔力を完全に奪われたことで、ただの金属の塊へと戻ったのだ。

「五年前……か」

砕け散った黒い宝石を拾い上げて、那月が静かに嘆息する。
そして彼女は、星空に似た地下駐車場の天井を見上げた。この建物の最上階が那月の自宅だ。
そこには那月が保護者として預かる少女が暮らしている。
かつて〝模造天使〟と呼ばれた少女――叶瀬夏音が。

6

ひと気のない廃倉庫の片隅に、天塚汞は片脚を投げ出すようにして座っていた。
コンテナにもたれた彼の手の中には、砕けた〝偽錬核〟の破片が残っている。
彼の生身の額から、つっと一筋の鮮血が流れた。〝偽錬核〟同士の共鳴で、本体である彼にも反動が襲ってきたのだ。
「あいててて……さすがにやるなあ、南宮那月……」
他人事のような口調でそう言って、天塚はゆっくりと立ち上がった。
月光が照らす彼の横顔は、病人のように弱々しい。
天塚の右半身は液体金属生命体――〝賢者の霊血〟とほぼ同じ物質でできている。その一部を分裂させて〝偽錬核〟を与えることで、彼は自らの分身体を造り出すことができるのだ。
だがそれは、分身体を一体造り出すごとに、肉体の一部をごっそり失うことを意味している。

ほかの金属を融合すれば失われた質量を取り戻すことはできるが、それを繰り返せば〝霊血〟の純度が低下する。分裂を繰り返した天塚の身体は、すでに限界に近づきつつあった。
「――ああ、すまない。悪かったよ。叶瀬夏音は手に入らなかった」
天塚が誰にともなく呼びかける。しかし取り壊しを待つ廃倉庫に、彼以外の人影はない。
彼が話しかけている相手は、自分の手の中にある銀色のステッキだった。ステッキの握りの部分には、髑髏を模した彫刻がついている。その彫刻を相手に彼は一人で話しているのだ。
「心配要らないよ。供物なら、ほかにも心当たりがあるからさ」
そう言って天塚は、右の手首を何度か動かした。数日前、獅子王機関の剣巫に斬り落とされた部位だった。魔力を無効化する彼女の槍は、魔導生命体である〝賢者の霊血〟にとっては天敵に近い。逆に言えば、あの槍さえなければ、彼女は天塚の敵ではないということになる。
「逃げた〝賢者の霊血〟に埋めこんだ〝偽錬核〟も、そろそろ成長を始めたころだしね。放っておけば、そのうち向こうから姿を現すだろ」
廃倉庫を出た天塚が、鬱陶しげに髑髏の彫刻を睨んだ。
その彫刻が、かすかな笑い声を洩らしたように思えたのは気のせいか――
「わかってる。あんたこそ約束を忘れるなよ」
そう言い残して、天塚は再び街に戻っていく。
かつて師と呼んだ相手を滅ぼして、五年前になくしたものを奪い返すために。

7

翌朝、午前五時――

宿泊研修に出かける妹とその同級生を見送るため、古城はマンションのロビーに出ていた。

眠そうな顔をしているのは、昨晩一睡もしていないせいだ。ニーナ・アデラードにつき合って、〝賢者の霊血（ワイズマンズ・ブラッド）〟を捜索していたせいである。

捜索といっても実際のところは、ニーナが実行する怪しげな探索魔術の儀式を手伝っていただけなのだが、それはそれで疲れることには変わりなかった。途中で何度か雪菜に見つかりそうになって、彼女を誤魔化すのは特に苦労した。真夜中に浅葱の姿をした少女と二人きりでいるところを見られたら、どんな目に遭わされるか想像するだけでも恐ろしい。

そして結論からいえば、午前二時を過ぎても、〝賢者の霊血（ワイズマンズ・ブラッド）〟は見つけられなかった。ただでさえ絃神市内にはノイズとなる巨大な魔力源が多い上に、ニーナが使った魔術は潜水艦のソナーに似て、活動している相手しか探知できないらしい。

結局、古城たちは疲れた身体を引きずるようにして自宅に戻り、ようやく眠れると思ったところで凪沙に叩き起こされたというわけだった。

常夏の絃神島ではめずらしい冬服姿の凪沙が、赤い目をこする古城にまくし立ててくる。

「わかってる、古城君？　出かけるときは火の始末と戸締まりを気をつけてね。宿題は帰ったらすぐに済ませるように。あと冷蔵庫の中に今夜のおかずが入ってるから。お風呂と歯磨きも忘れないで。遅刻しないように目覚ましちゃんとかけて――」

「姫柊にもこないだ似たようなことを言われたばかりなんだが」

俺はそんなに頼りなく見えるのだろうか、と古城は複雑な表情を浮かべた。

そんな兄妹のやりとりを聞いて、傍にいる雪菜が微笑んでいる。

「俺のことはいいから、おまえこそ気をつけろよ。島から出るのは久しぶりなんだし」

「まあ、大丈夫でしょ。おみやげ期待して待っててね。あ、待って、わ、忘れ物！」

ポーチの中身をチェックしていた凪沙が、お財布っ、と絶叫しながら踵を返した。ばたばたと荒っぽく足音を鳴らして、エレベーターホールへと大慌てで戻っていく。ほんの二年前まで入院生活を送っていた人物とは、とても思えない騒々しさだ。

「忙しないやつだな」

エレベーターに乗りこむ妹を眺めて、古城は呆れ顔で溜息をついた。出発前からこんな有様で本当に大丈夫なのかと、ますます不安になってしまう。

旅行慣れしていないせいか、凪沙の荷物はやたらに多い。

それに対して雪菜の荷物は茶色の旅行鞄がひとつだけ、やけに少なく感じられるのは、いつもの黒いギターケースを背負っていないせいかもしれない。制服の上に少し大きめのコートを

着こんだ雪菜は、普段より少し幼く見えた。
「あの、先輩。わたしの代理の監視役のことなんですけど――」
その雪菜が、ためらいがちに古城に声をかけてくる。
あ、と古城は頭を押さえてうめいた。ニーナ・アデラードの騒ぎですっかり忘れていたが、その問題も残っていたのだった。
「そうか。ニャンコ先生の式神、壊れちまったんだよな」
「……ニャンコ先生？」
雪菜が軽く面喰らったように呟いた。
「と、とにかく、ゼロから新しい式神を造るのは、儀式に時間がかかり過ぎるということで、やはり高神の杜から代わりのものを送ってくるそうです」
「わざわざ本土から運んでくるのか。じゃあ、しばらく時間がかかりそうだな」
「はい。早くても到着は今日の午後になるかと」
「今日の午後……か」
それまでは自由に動けるな、と古城は考える。どのみち暴走した〝賢者の霊血（ワイズマンズ・ブラッド）〟をいつまでも放置しておくわけにはいかない。代理の監視者が到着する前にカタをつけてしまえれば、と――
「なんだか、やけに張り切ってるみたいですけど……」
そんな古城の決意を見抜いたかのように、雪菜が日つきを鋭くした。相変わらず、カンの鋭い少女である。
「え!?　いや、そんなことはないぞ！　昼まで眠れるな、とか、ちょっと思っただけで……」
「先輩……」
もう、と雪菜が、世話の焼ける弟を見るような目で古城を睨む。
「わたしがいない間は、絶対に大人しくしていてくださいね。錬金術師もいなくなったので、直接の危険はないはずですけど、なんだか悪い予感がするので」
「わ……わかった。気をつける」
彼女の言葉に、古城はひやりと背筋が冷たくなるような感覚を味わった。
雪菜は天塚が生きていることを知らない。しかし剣巫の霊感が、彼女に危険の存在を告げているらしい。
「――ごめんね、お待たせ。行こ、雪菜ちゃん。じゃあね、古城君。行ってきます！」
息を切らせて戻ってきた凪沙が、雪菜の手を引いて歩き出す。
彼女たちにおざなりに手を振って、古城はマンションの中へと引き返した。
あくびをしながらエレベーターに乗りこみ、目的の七階に着いたところで、古城はかすかに聞こえてきた悲鳴に気づく。悲鳴の発生源は七〇四号室。古城たちの部屋である。
「――ニーナ!?」

鍵を開けるのももどかしく、古城は部屋の中へと走りこむ。
古城の自室のベッドでは、ニーナが眠っているはずだった。凪沙たちにバレないように連れこむのにずいぶん苦労したのだ。その彼女がベッドの上にぺたんと座って、涙目で古城を見上げてくる。
「こ、古城……」
照れと怯えが半分ずつ入り混じったような声で、浅葱の姿をした少女が言った。
パジャマ代わりに貸したTシャツの胸元を、彼女は、古城の視線から隠すようにしっかりと押さえている。あの大雑把な自称〝大錬金術師〟らしからぬ可憐な振る舞いだ。まるで普通の女子高生のような――
「おまえ、まさか、浅葱か？」
激しく不安を覚えつつ、古城がおそるおそる質問する。浅葱の姿をした少女は、動揺もあらわにぎこちなくうなずいて、
「な……なんであたし、あんたのベッドで……!?」
「あのバカ……なんでこんな面倒くさいときに寝てやがんだ……」
古城は口の中だけで呟いて、頭を抱えた。
浅葱がニーナに意識を乗っ取られたのは、昨日の夕方。彼女がシャワーを浴びている途中のことだ。そして次に目覚めたのは翌朝、古城のベッドの上――

その間に自分の身になにが起きたのか、浅葱の立場で想像できることはひとつだけだろう。
「古城……もしかして、あたし……」
寝乱れたベッドのシーツを見下ろして、浅葱が声を震わせる。窓辺には明るい朝の光が射しこみ、どこかで海鳥の鳴く声がした。
「待て、落ち着け、浅葱。話せばわかる！」
誤解だ、と古城は必死に訴える。このままでは浅葱が怒り狂うのは目に見えていた。意識がないまま無理やりベッドに連れこまれてなにかされたら誰だって怒る。当然、浅葱もそうするはずだった。が――
「あ……あれ……？　ごめん、なんか……こんなはずじゃ……」
古城を見つめる浅葱の目から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれ出た。
制御できない感情に浅葱本人も驚いているようだった。初めての体験。なのに、そのことをなにも覚えていないというのは、彼女にとっても相当ショックなのだろう。まあ、実際のところはなにもなかったわけなのだが。
「だから、違うっ！」
古城は必死で彼女を説得する言葉を考える。しかしもちろんなにも思い浮かばない。一度死にかけた挙句に錬金術師に身体を乗っ取られたなどと、本人に言えるわけがない。無理な言い訳を考えているうちに頭の中が真っ白になって、古城はいきなり壁に向かって思いきり自分の

顔面を叩きつけた。ゴッ、という鈍い音がコンクリートの芯材を震わせて、その衝撃に浅葱が呆然とする。

「こ、古城……!?」

いいから、信じろ！　俺はなにもしてねーし、おまえが泣く必要は全然ないんだよ！」

「そ、そうなの？」

「嘘だったら満漢全席でもなんでも奢ってやるよ！」

「う、うん」

「いろいろあっておまえは疲れて寝てただけだ。すぐ治る」

「う、うん……わ、わかったから。血、拭きなって。顔、怖いし！」

ショック療法が成功したのか、浅葱がようやく普段の調子を取り戻す。いちおう古城の言うことも信じてくれたらしい。

おう、と古城はうなずいて、割れた額から勢いよく流れてくる血を拭う。頭部からの出血は目立つというが、たちまち真っ赤に染まったタオルを見て古城は怯んだ。成り行きだったとはいえ、やり過ぎだ。頭蓋骨が割れてるんじゃないかと不安になる。

「ねえ、古城」

大量出血に慌てふためく古城を見上げて、浅葱が溜息交じりに訊いてきた。泣き顔を古城に見られたせいか、はにかむような表情を浮かべているのが妙に可愛い

「なんだよ」

「あんた、ホントになんにもしなかったの？」

「だからしてねえって。こっちもそれどころじゃなかったんだよ」

替えのタオルを探してクローゼットを漁りながら、古城が投げやりな口調で言う。すると浅葱は逆に拗ねたように頬杖をついて、

「それはそれで、ちょっとへこむっていうか腹が立つっていうか……」

「あ？」

ぼそぼそと呟く浅葱の言葉が聞き取れず、古城はタオルで頭を押さえたまま振り返る。

そんな古城を睨んで、浅葱は華やかな笑顔を浮かべ、

「ヘタレ」

イーッと白い歯を剝きながら、愉しそうにそう言った。なんだそれ、と古城は戸惑い、思わずなにか言い返そうとした直後、

「――っ！」

伝わってきた凄まじい魔力の波動に、古城は全身を硬直させた。

雷鳴に似た巨大な爆発音が響き、絃神島の人工の大地を震わせる。古城は蹴飛ばされたように立ち上がり、窓から身を乗り出して外を見た。

「〝賢者の霊血〟……動き出したか」

いつの間にか覚醒していたニーナ・アデラードが、浅葱の顔と声でそう言った。
古城はなにも答えない。ただ呆然と街を眺めているだけだ。
視界の片隅に映る海沿いの地区に、かすかな黒煙が立ち上っている。
爆心地はおそらく人工島東地区の港湾地区――
空港や埠頭が連なる絃神島の玄関口。
そして凪沙たちが向かったフェリー乗り場のある場所だった。

8

港の岸壁にそそり立つ巨大なガントリークレーンの上に、その少年は立っていた。
服装は彩海学園男子の制服。短い髪をツンツンに逆立てて、耳には無骨な密閉型のヘッドフォンを当てている。口の中に含んでいるのは、小さなカプセル錠剤だ。
「動きだしたか」
ガリ、とカプセルを噛み砕いて、矢瀬基樹は呟いた。
クレーンから見下ろす周囲の景色に変化はない。しかし矢瀬は過適応者――魔術に頼らぬ天然の超能力者だ。薬剤で増幅された彼の聴覚は、半径数キロメートル内で発生したかすかな振動や、微妙な気圧の変化をも感知する

人工島の地下水路に潜りこんだ、液体金属生命体の蠢きさえも
「あー……聞こえるかい。隊長さん。標的が地下水路を出る。分隊『青』をB7に。分隊『緑』をB9に移動。第二中隊は海浜公園を封鎖してくれ」
胸元のピンマイクに向かって矢瀬が呼びかける。通信の相手は、特区警備隊の治安警備部隊。彼らはすでに港周辺に、二個中隊規模の戦力を配置している。
『了解だ、覗き屋』
骨伝導型の通信端末から、部隊長の声が聞こえてくる。彼の声には抑えきれない憤怒の念が滲んでいた。もちろん矢瀬に対して憤っているわけではない。部隊長の憎悪の対象は、〝賢者の霊血〟と呼ばれる金属生命体と、それを操る錬金術師だ。
今回の事件で特区警備隊は、すでに十二名の隊員を失っている。
たった一組の犯人による死者の数としては、ここ数年でも最悪の記録だ。キーストーンゲート襲撃事件や、黒死皇派によるテロ事件――それらのような国際的な大事件でも、ここまで多くの殉職者は出なかった。
しかも今回の犯人は、ロタリンギアの殲教師や黒死皇派のように、信念や誇りのために戦っているわけではない。己の身勝手な欲望のために、封印されていた魔導器を盗み出した卑劣なコソ泥だ。そのような相手に仲間を大勢殺された。その事実が部隊長を激昂させている。
まずいな、と矢瀬は独りごちる。士気が高いのは結構なことだが、そのために冷静さを失う

のはまずい。今回の敵は力押しでどうにかできる相手ではないからだ。

「標的は液体金属生命体だ。実体弾で斃そうと思うなよ。時間を稼いで攻魔官の到着を待て」

矢瀬がもう一度指示を出す。しかし今度は返事がなかった。矢瀬は小さく舌打ちする。あまりよくない状況だった。どうにも悪い予感がする。

『ケケッ……〝賢者の霊血〟の暴走か。ずいぶんと面白いことになってるな』

顔をしかめる矢瀬の胸元から、皮肉っぽい合成音声の声が聞こえてきた。

浅葱によってモグワイと名付けられた人工知能――絃神島すべての都市機能を掌握する五基のスーパーコンピューターの現身の声だ。勝手に無線に割りこんで、矢瀬たちの会話を聞いていたらしい。

「そうでもないさ」

矢瀬が気怠く言い返す。

「ほかの土地ならいざ知らず、ここは〝魔族特区〟だからな。不滅の自己増殖型生命相手でも、無力化する方法はいくらでもある。異空間に放逐するか、眷獣並の魔力をぶつけるか――」

『それがわかってるから、戦王領域の貴族サマも興味を示さずに静観の構えってことか』

「……だろうな。こっちとしてはありがたい話だが」

そう言って矢瀬は、朝凪の海面に浮かぶ一隻の豪華船を見遣った。

絃神港の沖合に停泊するその船の名は〝オシアナス・グレイヴⅡ〟――アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーが所有するメガヨットだ。

名うての戦闘狂で知られた彼が、〝賢者の霊血〟に興味を持つことを矢瀬たちは密かに恐れていた。だが、今のところヴァトラーが動き出す気配はない。錬金術によって生み出された魔導生命体ごときでは、役不足ということなのだろう。

「それよりも、モグワイ。おまえ、修道院の跡地に〝賢者の霊血〟が封印されてることを知ってたな」

『言われてみればそうだったかもな』

答めるような矢瀬の言葉にも、人工知能は平然と答えてくる。

「どうして浅葱に警告しなかった？　おかげであいつは死にかけたぞ」

ギリ、と矢瀬は奥歯を鳴らした。矢瀬にとって浅葱は、小学生になる前からの幼なじみだ。今さら恋愛感情を抱くような間柄ではないが、それでも兄妹同然の友人には変わりない。

そして彼女にはもうひとつ――この〝魔族特区〟にとって重要な役目がある。

『だけど、死ななかった、だろ？』

ククッ、とモグワイは人間臭く笑った。矢瀬の瞳にかすかな動揺が走る。

「ニーナ・アデラードが浅葱を生き返らせることまで、予測の範囲内だったってのか？」

『さあな。あとからではなんとでも言えるからな、ククッ……』

ちっ、と矢瀬が苛立たしげに舌打ちした。

「おまえ、なにが目的だ？」

『心配するな、矢瀬の坊や。あの嬢ちゃんは大事な相棒だ　この絃神島にいる限り死なせたりはしねーよ』

モグワイが含みのある口調で言う。その言葉にこめられた意味を察して、矢瀬はゾッと全身が粟立つのを感じた。この人工知能が言い切るからには、彼は本当に浅葱の命を護ろうとするのだろう。たとえどんな手段を使ってでも。

『それよりも、始まったようだぜ』

「ああ」

モグワイの声に導かれて、矢瀬は視線を眼下に向けた。アスファルトの地面を破壊して、地下水路から出現したのは、艶やかな液体金属の塊だ。

港湾地区の倉庫には、島外から運びこまれてきた大量の鋼材や貴金属が備蓄されている。自らの餌となるそれらの重金属を求めて金属生命体がここに現れた、と考えるのは、それほど的外れな推測でもないだろう。

〝賢者の霊血〟は自らを変形させ、重心の位置を変えることによって転がるように移動する。移動速度は速くない。ガラスの上を伝う水滴のように、震えながらの不規則な移動だ。

しかし出現した金属生命体のサイズは中型のトラック程度。質量はおそらく数百トンに達する。その巨大さと重量は、それだけで十分な脅威である。

特区警備隊が築いた簡易バリケードは、金属生命体に押し潰されて、呆気なく崩壊した。銃弾や地雷も、ガスや高圧電流も、不定型の液体金属が相手ではほとんど効果が確認できない。

「物理攻撃が効かないのは予想の範囲内だが、呪術結界も無効とはな」

破壊された魔法陣の残骸を眺めて、矢瀬が不機嫌な声を出す。

『錬金術で生み出された〝霊血〟は、魔導生物というより、合成獣や機械人形に近い存在だからな。上僕偏や動死体を相手にするようなわけにはいかねえってことだ』

「それならそれで、やりようはある」

傍観者気取りの人工知能に、矢瀬は冷たく言い放った。

すでに金属生命体の進路上には、新たな部隊が展開している。

バリケード代わりに立ち塞がったのは、放水車に似た装甲車両だ。数十気圧の高圧放水が可能なタイプだが、不滅の金属生命体に対して、その程度の水流が効果を持つとは思えない。

しかしその砲身から撃ち出された液体は、白く煙る凄まじい凍気をまとっていた。

同時に道路に浮かび上がった魔法陣が、極低温の檻に金属生命体を包みこむ。

『なるほど。凍らせて動きを止めようってのか』

モグワイが感心したような口調で言った。

漆黒に輝いていた液体金属の表面は、今や真っ白な霜に覆われていた。凍結した身体は流動性を失って、攻撃用の触手を伸ばすこともできない。

「マイナス二九六度の液体窒素と、凍結魔術の合わせ技だ。錬金術で組成を弄ってるとはいえ、しょせん金属。〝賢者の霊血〟も物理現象の影響は無視できまい」

矢瀬が淡々と説明する　常温常圧ならば、水銀の凝固点はマイナス三八・八三度　同じ液体金属の肉体を持つ〝霊血〟も、低温には弱いと予想されていた。

『呆気なく決着したもんだな』

あからさまに落胆した声でモグワイが呟く。

たとえ破壊できなくても、このまま動きを封じてしまえば〝賢者の霊血〟は無害だ。むしろ貴重なサンプルとして、〝魔族特区〟の役に立ってくれるだろう。あとは天塚汞を狩り出して、始末すれば済むことだ。

「いーんだよ、これで。こっちはこのあと普通に授業が待ってんだぜ。それにこのまま浅葱を預けておいたら、占城の理性がいつまで保つかわからんしな」

『ククッ、嫉妬か』

モグワイの挑発的なからかいに、冗談、と矢瀬が肩をすくめた。

「違ェって。こっちにも段取りってもんがあんだよ。まあ実際、俺が先輩を落とすよか先に、あいつらに上手くいかれてもムカつくけどな」

本音混じりの軽口を叩きながら、矢瀬がクレーンを降りようとする。

拡張された彼の聴覚が、奇妙な足音をとらえたのはその直後のことだった。生身の左足と、

液体金属の右足。そして左手には銀色のステッキ

赤白チェックの奇妙な帽子を被った男が、凍りついた金属生命体のほうへと近づいていく。

「あいつ、まさか!?」

『天塚汞!?　偽物……いや、本人か!?』

ヒュウ、とモグワイが声を弾ませた。大錬金術師ニーナ・アデラードの唯一の弟子。そして彼女を裏切り、封印されていた〝賢者の霊血〟を覚醒させた犯罪者。指名手配中の錬金術師、天塚汞が、堂々と特区警備隊の前に現れたのだ。

「やあ、専務。元気そうでなによりだ。念願の不死身の肉体を手に入れた気分はどう?」

殺気立つ特区警備隊の部隊には目もくれず、天塚は、氷漬けの金属生命体へと呼びかけた。その直後、金属生命体の表面がひび割れて、慟哭にも似た不気味な振動で大気が震え出す。

『ア……アマツカァァァァァ――!』

「はは、凄いね。専務。そんな姿になってまで僕のことを覚えててくれてるなんて、光栄だよ」

嗜虐的な表情を浮かべて、天塚が笑う。金属生命体の中に取りこまれた誰かを挑発しているのだ。そして挑発に応じるように、金属生命体が暗い輝きを増していく。

『アァァァァァァァァァァァァ――!』

砕け散った金属生命体の内側から、新たな触手が無数に吐き出された。それらは巨大な刃と

なって、周囲の倉庫や建物を無差別に切り刻んでいく。

凍りついていたのは、金属生命体の表面だけ。〝賢者の霊血〟は、表面と内側に真空の断熱層を造り出し、魔法瓶の原理で本体の凍結を防いでいたのだ。

「隊長さん、液体窒素だ！　凍らせ続けていれば、やつの動きは止められる――！」

矢瀬がマイクに向かって必死に怒鳴る。しかし混乱した特区警備隊には、その指示はもう届かない。天塚と金属生命体に向かって、彼らは集中砲火を浴びせる。

仲間を殺した天塚たちに対する怒りと憎悪。そして恐怖に衝き動かされるままに、武装した警備員たちが殺意をぶつけていく。

「は……はは……ははははははは！」

無数の弾丸の雨に晒されて、天塚は狂気の笑みを浮かべていた。

そして銃撃を浴びる〝賢者の霊血〟にも変化が起きる。艶やかな表面が輝きを増して、憤怒を象徴するような深紅へと変わっていく。〝偽錬核〟のせいで濁っていた〝霊血〟が、本来の純度を取り戻そうとしているのだ。まるで人々の怒りと憎悪と取りこんで、白らの糧にするかのように――

「しまった　！　撃つな！　天塚の狙いは弾丸だ！」

ようやく錬金術師の目的に気づいて、矢瀬が叫んだ。

特区警備隊の対魔族部隊が使用するのは、高純度の琥珀金弾と、銀イリジウム弾頭弾。そのどちらもが錬金術の触媒として極めて優れた性質を持っている。

一斉射撃によって〝賢者の霊血〟に撃ちこまれた弾丸の重量は、おそらく数十キロ――否、数百キロに達するだろう。それは錬金術師が使う最大級の魔術に十分な量の供物だ。

天塚は、あえて特区警備隊に多くの犠牲者を出し、〝賢者の霊血〟を暴走させた。すべてはこの状況を作り出すため――錬金術に必要な材料を手に入れるために。

「さあ、約束のあんたの血だ！　お望みどおり甦るがいいさ、賢者！」

天塚は哄笑を続けながら、左手に握りしめていたステッキを槍のように構えた。そして力任せに〝賢者の霊血〟へと突き立てる。そこにあった黒い宝石を砕いて、ステッキは〝霊血〟の内部へと吸い込まれていった。

「賢者……だと!?　まさか、あいつは――――！」

ガントリークレーンから身を乗り出して、矢瀬がうめく。

天塚が実行した儀式によって、〝賢者の霊血〟に致命的な変化が起きようとしていた。深紅の金属生命体が光に包まれ、その内側からなにかが現れようとしている。

あたかも卵の殻を破って孵化するように――

『ヤバい！　逃げろ、矢瀬の坊や！』

「なに!?」

いつになく切羽詰まったモグワイの忠告に、矢瀬がハッと顔を上げた。

その刹那。

〝賢者の霊血〟が放った閃光が、彼の視界を音もなく薙ぎ払った。

爆発――

巨大なガントリークレーンが積み木のように崩れ落ち、港湾地区が炎に包まれていく。

第四章 洋上の供物
The Sacrificial Victims

1

制服姿の凪沙の目の前、互いの息が触れ合うほどの至近距離で、少女が目を閉じていた。
肩にかかる黒髪を真っ直ぐに切り揃えた、真面目そうな顔立ちの女子だった。眼鏡のレンズ越しに揺れている睫毛が長い。わずかに尖らせた唇は、艶やかな薄紅色に輝いている。
彼女のその唇が、同じように目を閉じている凪沙に近づいてくる。
そして二人の唇が重なり合う——と思われた瞬間、
「も、もうダメ……限界！」
凪沙が叫んで顔を上げた。
ポッキリと小気味いい音を立てて、二人が口にくわえていたスティック菓子が折れた。
それを見ていた友人たちが、おおっ、と落胆混じりの声を洩らす。
中等部の宿泊研修一日目。東京湾に向けて移動中のフェリーの中で、凪沙たちはポッキリーゲームに興じていたのだ。向かい合わせに座った二人が一本のポッキリーを両端からくわえて、どこまで近づけるか、というちょっと際どい遊びである。
「はーっ……危なかった。ファーストキスを委員長に奪われちゃうところだったよ」
「お互いさまよ」

脱力して床に転がる凪沙を見下ろして、黒髪眼鏡の少女がクールに告げる。
甲島桜というのが彼女の名前だ。小学五年生のときに紋神市に引っ越してきて以来、五年連続でクラス委員を任されているという委員長・オブ・ジ・委員長。教師ウケのいいクソ真面目な見た目と、意外にノリのいい性格で、クラスメイトたちからの支持率は極めて高い。
「それにしても雪菜は強いね。今まで負けたことないんじゃない？」
回収したトランプをシャッフルしながら言ったのは、同じくクラスメイトのシンディだった。シンディといっても彼女は秋田出身の日本人。単に苗字が進藤で、白」紹介のときに緊張のあまり噛んでしまい、それ以来シンディと呼ばれ続けている。彼女と委員長、そして雪菜を加えた四名が、今回の研修旅行における凪沙の班のメンバーだった。
「確率操作系の護符や魔具、使ってないよね」
「う……運がよかったから……」
そのシンディに疑いの眼差しを向けられて、雪菜はブルブルと首を振る。
クラスメイト相手のババ抜きに、もちろんそんな大層な呪具は使っていない。が、無意識に何度か剣巫の霊視を使ってしまったのは秘密だった。なぜならババ抜きに負けてしまったら、過酷な罰ゲームが待っているからだ。旅行中の女子中学生の勝負に情けは禁物なのだ。
「雪菜ちゃん、ポーカーフェイスだしねえ」
：連敗中の凪沙が、悔しそうに呟きながら、配られたカードを眺めている。そういう凪沙は、

考えていることがそのまま顔に出るタイプだ。あまりにもわかりやすいので、逆に罠ではないかと警戒されてしまうほどだった。

「はい、どうぞ。雪菜ちゃんの番だよ」

凪沙が鼻息も荒々しく、扇形に広げたカードを差し出してくる。霊視を使うまでもなく、その中にジョーカーが混じっているのはバレバレだった。彼女の大きな瞳の動きから、雪菜はジョーカーの位置を正確に特定、その隣のカードに指を伸ばす。と、

「そういえば雪菜さ、凪沙んとこのお兄さんとは最近どうなの？」

そのときシンディが何気ない口調で訊いてきた。

唐突な彼女の質問に、雪菜の意識に一瞬の空白が生まれる。そのせいで手元が狂ったことに気づくのが送れた。致命的な失態だ。

「あ……」

凪沙から引き抜いてしまったジョーカーを見つめて、雪菜が小さく声を洩らす。

委員長はそれを見逃さず、眼鏡のズレをちょっと直して、

「お、動揺したね」

「いただき」

雪菜のペースが狂った隙を衝いて、シンディが雪菜から安全なカードを奪っていった。数字の揃ったカードを捨てて、シンディの残りカードは一枚。雪菜とは六枚差。この状況から追い

上げるのはかなり厳しい。

「暁先輩って、最近ちょっと雰囲気変わったよね」

一人勝ちしていた雪菜の弱点に気づいて、シンディが執拗に攻め立ててくる。それが罠だとわかっていても、雪菜はその話題を無視できない。彼女は現役女子バスケ部員。中等部時代の古城の直接の後輩なのだ。つまり雪菜が知らない古城のことを、彼女は知っているということだ。

「ど、どんなふうに？」

「うーん、部活やってたころの雰囲気に戻ってきたかも。少し前まであの人恐かったから」

「暁先輩が……恐い？」

真面目な口調のシンディの言葉を、雪菜は怪訝顔で反芻した。

雪菜が知る限り、古城は攻撃的な人格の持ち主ではない。世界最強の吸血鬼の力を持ちながら、それを持て余して、だらだらと怠惰な日常を送っているほどだ。だからなんとなく放っておけない。もっとしっかりしてもらわねば、と年下の雪菜ですら思ってしまう。そんな人物を恐いといわれても、今ひとつピンと来なかった。

「あまり想像つかないけど」

雪菜が正直にそう言うと、シンディは苦笑混じりに目を細め、

「ああ、グレてたとかってことじゃなくって、なんだろ　殺気立ってるっていうか、話しかけづらい感じ？　あと、たまにすごい怪我してたし」

「それって……いつごろの話？」

雪菜が眉を寄せて訊いた。シンディは、うーん、と記憶を辿るように天井を見上げて、

「春休みとか、ＧＷとか、それくらい。ほら、ちょうど凪沙の検査入院があったりしたから、そのせいかなって思ってたんだけど」

「春休み……」

雪菜が重い息を吐く。

古城が高等部に進級する前後　――それはちょうど、彼が第四真祖の能力を手に入れた時期と一致していた。仲のいい後輩が話しかけづらいと思うほど殺気立ち、負傷を繰り返していた、という当時の古城に、いったいなにが起きていたのか――調べてみる価値はありそうだ。

「部活やってたころの暁先輩は、コートの中だとワガママで偉そうんだけど、それ以外はボーッとしてて、そのギャップがよかったから。最近はそのころに戻ったみたいで、ちょっといいなって。雪菜が引っ越してきたあたりからだよね」

雪菜のカードに手を伸ばしながら、シンディが独りごとのように呟いた。

そんな彼女を雪菜は不思議そうに見つめて、

「よく見てるね」

「え……いや、ほら、同じバスケ部だし。暁先輩、中等部のときはけっこう目立ってたから」

今度はなぜかシンディが動揺する番だった。逡巡した挙げ句に、雪菜の手札から見事にジョーカーを引き当て、涙目になる。

「いや、違うよ、ホントに。そういうんじゃないよ。ほら、雪菜だけならまだしも藍羽先輩もいるし。あたしなんかお呼びじゃないですよ」

「古城君、そう言えばシンディのこと褒めてたよ」

おろおろと狼狽するシンディに、順番待ち中の凪沙が朗らかに告げる。

シンディがびっくりしたように顔を上げ、

「え？　なんて？」

「ディフェンスの戻りが速いって。あとレイアップが上手いって」

「ううう……そういう人だよね。あの先輩は」

肩を落としてどんよりと呟くシンディに、雪菜は少し同情した。本人たちにまったく悪気はないのだろうが、いろいろと罪作りな兄妹だ。

「だいたい古城君が恐かったことなんかあったっけ……？」

「凪沙は絶対そう言うよね……あの人、妹にはダダ甘じゃん」

やさぐれたような口調で答えるシンディ。しかし凪沙は、とんでもない、と首を振り、

「そんなことないよ。いつも喧嘩ばっかだし。古城君てば、一昨日もあたしのアイス勝手に食べたんだよ　滅多に買えない貴重なダークモンブランだよ～信じられないホントあり得ない。

散々説教して、すぐに買いに行かせたけど！」

むかむかと本気で苛ついているように凪沙が頬を膨らます。

「甘い」

「え？　ダークモンブランのこと？　そんなでもないよ、ホロ苦だよ」

呆れたように呟く委員長に、きょとんと首を傾げて凪沙が言った。

ちなみにその事件のことを、雪菜はよく覚えていた。古城が夜中に突然出かけたので、監視役として慌てて彼を追いかけたのだ。

結局、古城はコンビニを四軒回ってどうにか目当てのアイスを手に入れたのだが、それに最後までつき合わされた雪菜が、兄妹喧嘩のいちばんの被害者だといえるだろう。

時刻は間もなく午前九時。午前七時に絃神観光港を出港したフェリーは、途中、伊豆諸島の神丈島や美歳島に寄港しつつ、十一時間半をかけて東京湾の武芝桟橋に到着する予定になっていた。

お座敷風の二等船室に詰めこまれた中等部三年生は百五十六人。クラスごとに分かれてゲームやおしゃべりに興じながら、思い思いに船旅を楽しんでいる。強化ガラスの窓の外には青い海が広がって、不思議といつまでも見飽きることがなかった。

「このあとの予定ってどうなってるんだっけ？」

「十時半にホールに集合。教材映画観て、それから昼食」

シンディの質問に、委員長がすらすらと答える。
「お昼ご飯なんだろうねえ。カレーかなあ。カレー食べたいなあ。あ、夏音ちゃんだ」
今にも涎を垂らしそうな顔をしていた凪沙が、友人の姿に気づいて手を振った。
窓際に立っていた叶瀬夏音が、長い銀髪を揺らして振り返る。
「あ、凪沙ちゃん。皆さんもおはようございます」
恭しく挨拶する夏音の胸元には、大きな黒い光学機器がぶら下げられている。フェリー会社からの借り物らしい。
「なにしてるの？　なにそのごついの？」
「双眼鏡でした。このあたりで野生のイルカが見られるって聞いたので」
そう言って夏音は碧い瞳を宝石のように輝かせた。夏音は筋金入りの動物マニアだ。普段は控え目で大人しい彼女も、野生生物がからむと思わぬ行動力を見せる。
「え、イルカ？　わ、いいな、見たい！」
凪沙が表情を明るくして立ち上がる。雪菜たちも窓際に移動した。
「あたし前に見たことあるよ。そういえばこのあたりだったかも。ほら、写真」
シンディがそう言って携帯電話を取り出す。待ち受け画面に表示された画像は、船と併走して海面を跳ねるイルカの群れだ。それを見た凪沙たちの期待が跳ね上がる。
しかしそれから数分が経っても、イルカらしきものが現れる気配はなかった。

「いないね、イルカ」
しょんぼりしたように呟く凪沙　シンディが励ますように彼女の背中を叩く。
「そう簡単には会えないでしょ」
「海は広い」
委員長も朴訥とした口調でそう言った。
そのとき夏音と雪菜の二人だけが、ハッとなにかに気づいたように、視線を船の後方へと向けた。フェリーが海面に残す白い航跡の隙間に、銀色に輝くなにかが浮かんでいる。そこから放たれた粘りつくような視線を感じたのだ。
小型の潜水艦や魚雷を連想させる、金属質の航行物体——
しかしそれは海蛇のように巨体をくねらせて、すぐに水中へと沈んでいく。
「あれって、なんだろ？　あれがイルカ？」
凪沙が不思議そうに目を丸くして訊いた。まさか、と雪菜が口の中だけで呟く。
その隣では、夏音が、きゅっと怯えたように強く唇を噛んでいた。

2

倒壊した建物が撒き散らす粉塵と煙が、不吉な朝靄のように港を包んでいた。

傾いた灯台の屋根に座りこんで、矢瀬はぐったりとその様子を眺めている。
矢瀬が寸前まで乗っていた巨大なガントリークレーンは、土台近くから斜めに切断されて、埠頭に横たわる無惨な姿をさらしていた。もはや修復は不可能だし、本来なら矢瀬もクレーンと運命を共にしていたはずだ。
それを救ってくれたのは、黒い日傘をさした小柄な影だった。
「生きてるか、矢瀬？」
圧倒的に場違いなフリルまみれのドレスを揺らして訊いてきたのは、南宮那月。
空間跳躍でいきなり虚空から現れた彼女が、クレーンもろとも地面に激突する直前だった矢瀬を、間一髪のところで救ってくれたのだ。
「まあ、なんとか」
矢瀬はのろのろと顔を上げ、ヘッドフォンで乱れた髪を撫でつけた。
「今回はさすがに死んだと思ったぜ、畜生……助かったわ、那月ちゃん。ありがとな」
「担任教師をちゃん付けで呼ぶな」
那月が不機嫌そうに唸って、矢瀬の背中をヒールで蹴りつける。
「まったく貴様といい、暁といい、担任をなんだと思ってる……！」
「ちょ……痛て、俺、怪我人なんスけど！　血ィ出てるし！　ドバドバ出てるし！」
血まみれの両腕を頭上に掲げて、矢瀬は必死で訴えた。墜落するのはどうにか免れたものの、

爆発で飛び散った破片を全身に喰らって、矢瀬は満身創痍なのだ。
そんな教え子をきっぱり無視して、那月は埠頭の様子を見回した。
海岸沿いに立ち並ぶ巨大な倉庫は、十棟以上が崩壊して燃えている。
〝賢者の霊血〟を包囲していた特区警備隊の部隊も壊滅状態。幸い死人こそ多くはないが、装備の損耗と、隊員たちの混乱がひどい。
天塚汞が〝賢者の霊血〟の中に投げこんだ、奇妙な髑髏のせいだった。髑髏が吐き出した謎の閃光が、一撃で特区警備隊を蹴散らしたのだ。
「いい有様だな」
哀れむように呟く那月を見上げて、矢瀬はガリガリと頭をかく。
「悪ィ。管理公社のミスだわ。天塚の狙いを見誤った」
「〝賢者〟の復活か」
「――知ってたのかよ？」
矢瀬が驚いて訊き返す。那月は、人形を思わせる無表情で重々しくうなずいて、
「ついさっき入院中の叶瀬賢生が意識を取り戻した。おかげで面白いことがわかったよ。いろいろとな。アルディギアの騎士団からも情報提供があったしな」
「そういう話はもう少し早く聞かせてもらいたかったぜ」
矢瀬が不機嫌そうに唇を歪めた。天塚の目的が〝賢者〟を甦らせることだとわかっていれ

ば、それなりの対策を練ることができた。むざむざと貴金属系の弾丸をばらまいて、天塚を手助けすることもなかったのだ。

しかし那月は冷たく息を吐き、

「攻魔官に任せろという警告が警察局から出ていたはずだぞ。仲間を殺された警備局の鬱憤もわからんではないが――」

「ああ……結局それをいいように利用されたんじゃ、殉職した連中も浮かばれねーよな」

口の中に溜まった血を吐いて、よっこらしょ、と矢瀬が立ち上がる。

「特区警備隊の状況はわかるか、那月ちゃん？」

「指揮系統の混乱がひどくて、負傷した隊員の収容だけで手一杯だ。増援を要請しているが、この状況でキーストーンゲートの守備部隊は動かせんしな。予備兵力が本土から到着するまでは、非番の連中をかき集めてしのぐしかないだろう」

「戦力半減で済めば御の字ってとこか」

矢瀬が顔をしかめて嘆息した。

「ま、どのみち〝賢者〟が本当に伝承どおりの存在なら、特区警備隊の通常装備じゃ歯が立たねーか。公社直属の呪装化部隊と魔族傭兵を動かすように頼んでみるかな」

「そう願いたいものだな　どこぞの蛇遣いが、いつまでも大人しくしている保証もないのでな」

那月が迷惑そうな視線を向けた先には、沈黙を守る一隻の豪華船の姿があった。ディミトリエ・ヴァトラーの〝オシアナス・グレイヴⅡ〟だ。

天塚には興味を示さなかったヴァトラーも、〝賢者〟の出現を知ったら、どんな行動に出るかわからない。あの傍迷惑な吸血鬼が話をややこしくする前に、天塚を見つけ出して事態を収拾したいところだった。

「つっても、〝音響結界〟の再起動にはまだしばらくかかるぜ」

首にぶら下げたヘッドホンを弄りつつ、矢瀬が言いづらそうに告白する。

音響結界は、音響過適応という特殊体質を持つ矢瀬が、一種の念動力によって創り出す特殊なフィールドだ。精密なレーダーに匹敵する解像度をもって、矢瀬は結界内の音響を観測る。不定型の金属生命体である〝賢者の霊血〟の動きすら、矢瀬は手に取るように感知することができるのだ。

しかしその繊細さゆえに、音響結界には爆発的な大音量に弱いという致命的な欠点がある。天塚の攻撃の余韻が完全に消えるまでは、矢瀬の結界の再展開は不可能――逃走した天塚の足取りがつかめるまでには、最低でもあと数時間かかるということだ。

「肝心なところで使えない男だな。そんなことだから、閑が手も握らせてくれないのだろうに」

那月が落胆したように言い放った。

「うるせえよ！　ていうか、なんで知ってんだよそんなこと！」
「しょせん、暁の類友ということだな」
「担任教師になんだかすげえひどいことを言われてるような気がするぜ」
打ちひしがれたように落ちこむ矢瀬。那月は無造作に指を鳴らして、目の前の空間を波紋のように揺らした。空間跳躍用の門を開いたのだ。
「もういい。あとはこちらでやる。おまえは早く学校に行け。今なら、限に間に合うだろう」
「あ、おい。那月ちゃん、待ってくれ！　頼む！」
矢瀬が慌てて彼女を呼び止めようとするが、那月は振り返りもせずに、そのまま門をくぐり、虚空に溶けこむように消え去った。
矢瀬は途方に暮れたように首を振り、地面を見下ろして頭を抱える。
「どうやって降りろってんだよ、これ……」
傾いた灯台の上に一人で取り残された矢瀬の頬を、高度十数メートルの海風が撫でていく。

3

そのころ同じ埠頭のはずれには、暁古城の姿もあった。〝賢者の霊血〟の気配を察知したニーナに連れられて駆けつけてきたのだ。

しかし埠頭にはすでに〝賢者の霊血〟の姿はなく、撤収する特区警備隊の隊員たちと、圧倒的な破壊の痕跡が残されているだけだった。
「なんだこれは？　これを全部〝賢者の霊血〟がやったのか？」
残骸と化したガントリークレーンや倉庫を眺めて、古城がうめく。
港の地形が変わるほどの凄まじい被害だった。爆撃を浴びた内戦中の都市を見ているようだ。
しかし建物に残された傷痕は、爆弾のような単純な破壊兵器のものとは明らかに違っている。倒壊したガントリークレーンの切断面は、見えない巨大な刃で薙ぎ払われたように滑らかだ。そしてコンクリート製の倉庫の壁は高熱で融け崩れ、原形を留めていなかった。
「重金属粒子砲の攻撃だな」
浅葱の姿をしたニーナ・アデラードが、破壊された建物を見回して呟く。
今の彼女が着ているのは、再生された浅葱の制服だった。さすがにジャージで出歩くのは目立つということで、破れてしまった元の制服と寸分違わぬ同じものを、ニーナが錬金術で創り出したのだ。
「粒子砲？」
古城が唖然としながら訊き返す。うむ、とニーナはうなずいて、
「いわゆる荷電粒子ビームの一種だが」
「――ビーム兵器かよ!?」

驚く古城を不思議そうに見返して、ニーナは平然と言葉を続けた。
「主が想像しているほどたいしたものではない。大気中では粒子束が拡散するから、射程はせいぜい数キロメートル。直撃したものが原子レベルで分解されるだけのことだ」
「十分すぎるほどやべえじゃねーか！」
古城は総毛立つような気分で息を呑む。
半径数キロメートル内の物質を原子に分解できるビーム兵器。そんなものを市街地で使われたら、どれだけの被害が出るか見当もつかない。最悪、絃神市は一瞬で壊滅だ。
「〝賢者の霊血〟はそんな攻撃まで使えるのか!?　それとも天塚の仕業なのか？」
「違う。やったのは〝賢者〟だ」
温度をなくしたような硬い声音で、ニーナが答える。彼女らしからぬ弱々しい声だった。
「誰だよ、そいつは」
古城が困惑しながら訊き返す。するとニーナは、なぜか自嘲するように淡く微笑んだ。
「主は奇妙に思わなかったのか。あの液体金属の塊が、なぜ〝賢者の霊血〟と呼ばれているのか――いったいそれは誰の〝霊血〟なのかと？」
「あの〝霊血〟には本来の持ち主がいたってことか？　そいつの名前が〝賢者〟……!?」
「うむ」
静かにうなずくニーナを見て、古城は無意識に顔をしかめた。

「何者だよ、そいつは？」
「錬金術師の究極の目的を知っているか？」
「あ、ああ……たしか、神に近づくこと……だったか？」
人工生命体の少女に習ったうろ覚えの知識を辿って、古城が答える。
ニーナは満足そうに目を細め、
「正解だ。ただし神といっても、高次空間に存在する概念としての超存在のことではない。錬金術師が創り出した人工の〝完全な人間〟だ」
「……そいつが〝賢者〟と呼ばれているモノか」
なるほど、と古城は独りごちた。言われてみれば、それほど突飛な話でもなかった。
錬金術師たちは、人工生命体という形で、〝人間〟を創り出す技術をすでに手に入れている。ならば彼らが、次に〝神〟の創造を目指すのはむしろ自然なことだ。
「で、実際に創り出すことはできたのか？」
「成功したのだろうな。ある意味では」
ニーナが他人事のような口調で言う。古城は呆れたように彼女を眺めて、
「ほとんど失敗したって言ってるようなものだぞ、それ」
「事実なのだから仕方があるまい。完全を求める錬金術師たちが創り出した〝神〟は、当然のように完全過ぎたのだ」

「……よくわからんが、完全だとなにかまずいのか？」

古城が首を傾げて訊いた。求めていたとおりのものを創り出したのだから、その時点で彼らは満足したはずではないのだろうか――？

しかしニーナは皮肉っぽく笑って首を振る。

「簡単なことだ。個体として完全な存在は、自分以外の何者も必要としない」

「……は？」

「生物が仲間を慈しみ守るのは、それが種の存続に必要だからだ。それは同じ種族に限らん。人間が自然を保護しようとするのも、そうしなければ自分たちが滅びると理解しているからだ。愛情だの友情だの美しさだのというものは、種の保存本能が見せている錯覚に過ぎん」

「錯覚……か」

突き放したようなニーナの物言いに、古城は地味に落ちこんだ。そんなふうにきっぱり断言されてしまうと、悲しい気分になってしまう。

「まあ、実際そうなのかもしれないけどさ、もう少しなんか言い方はないのかよ」

「勘違いするな。べつに責めているわけではない。しょせん人生は限られておるのだ。ならば、たとえ錯覚でも本人が満足できるように生きるべきであろ？」

そう言ってニーナは不敵に微笑んだ。

「それに、この世界の生態系というのは、そうやって種を存続させようとする数多の意思の総

和によって成り立っておるのだ。そう考えれば、愛情が世界を支えているというのはあながち錯覚とも言い切れぬ」

「そうか……〝賢者〟は……！」

ニーナの真意を理解して、古城は表情を険しくした。うむ、とニーナが首肯する。

「〝賢者〟は、生きるために酸素も食物も必要としない。たとえ地球上のすべての生物が死に絶えて死の惑星になろうとも、彼奴は気にしない。むしろそのほうが都合がいいのだ。彼奴が唯一恐れるのは、他の生物が進化して、自分以上に〝完全〟な者が現れることだからな」

「ろくでもないものを創り出してくれたもんだな」

古城がうんざりと目元を覆う。唯一完全な存在であり続けるために、自分以外のすべての生物の滅亡を願う人工の〝神〟　邪悪という言葉すら生温く感じられる、最低最悪の存在だ。

「……で、創り出された〝賢者〟はどうなったんだ？」

「不滅の存在である〝賢者〟を滅ぼすことはできぬ。ゆえに封印した。すべての〝霊血〟を抜き取ることで、彼奴の力を奪ってな。二百七十年前の出来事だ」

「そのときに抜き取られた血が、〝賢者の霊血〟か」

ようやく事情を把握して、古城が気怠く溜息をついた。そしてすぐにふと気づく。ニーナの説明には、まだ重要なピースがひとつ欠けている。

「待てよ、ニーナ。だったらあんたはなんなんだ。どうしてあんたは〝賢者の霊血〟を操れる？」

「妾は〝賢者〟の復活を阻止するための番人だ。たまたま当時の錬金術師の中でも図抜けた霊力を持っていたために選ばれたのだ。不滅の〝賢者〟を監視するためには、監視役も不滅でなくてはならぬ。ゆえに意識をこの〝錬核〟に移して、〝賢者の霊血〟を管理していたのだ」

「そんな……それじゃあんたは……」

まるで生け贄じゃないか、と言いかけて、古城はその言葉を呑みこんだ。

不滅の〝賢者〟の復活を阻止するために、永遠に〝霊血〟に縛りつけられた孤独な管理者――それがニーナ・アデラードの真実だ。彼女に〝伝説の大錬金術師〟の肩書きを贈ったのは、当時の錬金術師たちのせめてもの罪滅ぼしだったのだろうか。

そしてニーナ本人も、そんな自分自身の立場は嫌と言うほど理解しているのだろう。

妾とて望んでこのような身体を得たわけではないのだ……

そう呟いたときの彼女の寂しげな表情を古城は思い出す。

望まずして不老不死の肉体を与えられたニーナが、なにを思って〝魔族特区〟に辿り着き、修道院を建てたのかはわからない。しかし彼女はそこで仮初めの家族を得て、穏やかに過ごしていたのだろう。五年前に修道院が崩壊するまでは――

「ニーナ？」

しばし物思いに耽っていた古城は、少し離れたところで足を止めたニーナに気づく。

激しい戦闘が行われた場所なのだろう。屈みこむ彼女の周囲には、破壊された車両の破片や、無数の薬莢が散らばっていた。そして散らばった〝霊血〟のしずくも、わずかに取り残されている。特区警備隊の攻撃で凍結した破片が、解凍されて再び動き出したのだ。

しかしニーナが手を伸ばして拾い上げたのは、〝霊血〟ではなかった。

それは散らばった人骨だった。

「この骨……特区警備隊の隊員じゃないよな。なんで、こんな……」

残された白骨の数に気づいて、古城は呆然と立ち竦む。一人や二人の骨ではない。優に十数人分はあるだろう。特に多いのは、まだ幼い子どもの骨だ。大柄な男性のものとおぼしき比較的新しい人骨が一体だけ。それ以外はすべてボロボロに朽ち果ててしまっている。

「天塚に喰われた修道女と子どもたちだ。その男はよく知らぬ。おそらく〝偽錬金〟を妾の体内に打ちこむための囮であろう」

悲しげに目を伏せたまま、ニーナが再び立ち上がる。古城は彼女の言葉にハッとした。

「修道女……？　五年前の事件に巻きこまれた修道院の住人か？」

うむ、とニーナが頼りなく微笑んだ。

「五年前、天塚は、自分を弟子にしろと言って妾の前に現れた。そのとき彼奴が持っていたのが〝偽錬核〟だ。それを調べて欲しいと言いつつも、彼奴の目的は、最初から妾の肉体だけだった。彼奴は〝賢者の霊血〟を奪うつもりだったのだ」

古城は無言でうなずいた。騙されたニーナを責めることはできなかった。

もしも〝偽錬核(ダミーコア)〟が〝賢者の霊血(ワイズマンズ・ブラッド)〟を本当に制御できるのなら、ニーナを永遠の生け贄の立場から解き放つことができるのだ。それはニーナにとって、どれだけ甘美な誘惑だっただろうか――

しかしそのちっぽけな希望すら、〝賢者(ワイズマン)〟の復活を目論む天塚の計画の一部だったのだ。

「だけど天塚は失敗したんだな」

古城の問いかけに、ニーナが苦笑する。

「〝賢者の霊血(ワイズマンズ・ブラッド)〟は妄の制御を離れて暴走し、修道院にいた者たちは皆死んだ。天塚も自分の身体を半分喰いちぎられて、そのときに死んだはずだった。暴走を止めたのは、叶瀬夏音――類希なる霊力の持ち主であったあの娘と、陰から夏音を見守っていた叶瀬賢生だ」

「じゃあ、天塚が真っ先に叶瀬とオッサンを排除しようとしたのは――」

「あの親子に再び邪魔されないようにという配慮であろうな」

そう告げるニーナの表情には、冷え冷えとした怒りの色が浮かんでいた。

「ずっと不思議に思っていたのだ。なぜ天塚ごときが〝偽錬核(ダミーコア)〟を造ることができたのかと――だが、天塚が最初から〝賢者(ワイズマン)〟に操られていたのだとすれば、スジはとおる」

「〝賢者(ワイズマン)〟が自分自身の復活のために天塚を利用していた……ってことか」

古城はこれまでの天塚の謎めいた行動を思い出す。

天塚の行為が、無意味で支離滅裂に思えたのも当然だ。なぜなら天塚は、自分自身の損得で

動いていたわけではないからだ。封印された〝賢者(ワイズマン)〟を復活させる――ただそれだけのために彼は動いている。己自身の分身すら犠牲にして――

と、そのとき、

「お、おい!?　ニーナ?」

いきなり制服の襟元をはだけたニーナを見て、古城がおろおろとうろたえた。

なにしろニーナが使っているのは浅葱の身体そのものなのだ。傍目には、浅葱が古城の目の前で、突然服を脱ぎ始めたようにしか見えない。

「〝賢者(ワイズマン)〟の支配を逃れた〝霊血〟の破片……妄の身体を造り直すには少々足りないが――」

しかしニーナは真剣な口調で呟くと、自分自身の胸元へと手を伸ばした。そして埋めこまれていた深紅の宝石を抉り取る。

「ニーナ!?」

驚く古城の目の前で、浅葱の身体がゆっくりと倒れていく。

彼女の指からこぼれ落ちた宝石が、カツン、と澄んだ音を立てて地面に転がった。

4

大型フェリー〝パエトーン〟は、順調な航海を続けていた。

紘神島〝魔族特区〟への寄港は、ほかの航路に比べて面倒が多い。運搬する荷物にも特殊なものが多く、入島管理や検疫の手続きも煩雑だ。それらの長い手続きを終えての帰路である。操舵室にいる当直の船員たちは、リラックスした雰囲気で業務に就いていた。

空はよく晴れて視界は良好。波も比較的穏やかだ。

乗客の大半を占める修学旅行生たちは少々騒がしいが、それも予想の範囲内ではある。

このまま天候が急変しなければ、特に苦労することなく本土に到着できるだろう――誰もがそう思い始めた直後のことだった。

「――おまえはなんだ!?」

どこか尋常ではない警備員の叫び声が聞こえてきて、船員たちが振り返る。

紘神島航路のフェリーには、最低四名の警備員の乗船が義務づけられていた。彼らの多くは、警察の特殊部隊や特区警備隊の出身者。銃器こそ携帯してはいないが、電磁警棒や刀剣の所持が許可された荒事のプロである。魔族相手の実戦経験も豊富だ。そんな彼らが、今は明らかに怯えている。

操舵室の中に入ってきたのは、白いコートを着た痩身の男だ。

しかし操舵室の入口の扉は、厳重にロックされて閉め切られたままだった。男は扉を開けて入ってきたのではない。天井のエアコンダクトから、滲み出るようにして出現したのだ。

「動くな　止まれ――！」

警備員たちが武器を抜く　痩身の男は、冷ややかに振り返って微笑んだ

「いいよ。ただし止まるのは、あんたのほうだけど」

「な――」

電磁警棒を構えた警備員が、なにかを言いかけた姿勢のまま動きを止めた。硬直した彼の全身が、錆びた鉄のような色に変わっていく。

錬金術師――天塚永の右腕が、触手のように伸びて警備員に巻きついていた。そして警備員を金属に変えたのだ。残る二人の警備員も、そして操舵輪の前にいた航海士も次々に金属に変えられた。操舵室の中に残っているのは、今や航海士が一人きりだ。

「待て。やめろ、ここには――」

顔を蒼白にして航海士が叫ぶ。彼は侵入者の正体を知らない。しかし目の前にいる錬金術師が、ただのシージャック犯などではないと、船乗りの直感で悟っていた。

この男は、なにかもっと遥かに邪悪で恐ろしいものだ――

「知ってるよ。操船用の電子機器が集まってるんだろ」

天塚が微笑みながら言う。そのときにはもう最後に残った航海士も金属に変わっていた。

「だから壊しに来たんじゃないか！」

刃と化した右腕を振って、天塚が荒々しく哄笑する。凄まじい勢いで火花を散らして自動操船装置が吹き飛んだ。続いて無線機とレーダーが、そして推進機関の制御装置が、一日で修理

不能とわかるほどの残骸へと変わっていく。

安全装置が働いたのか、稼働中だった推進機関が停止した。結果〝パエトーン〟は推力を失って、海上を彷徨うだけの漂流船へと変わっていた。

天塚はそれを確認して、満足そうにほくそ笑む。

しかし伸ばしていた右腕を戻したとき、そんな天塚の表情が曇った。刃に変形させていた指先が、人間の姿に戻らない。刃こぼれしたようにひび割れて、バラバラと剝がれ落ちていく。

彼の肉体を構成する液体金属の細胞が、すでに限界に達しているのだ。

「劣化がここまでに進行してるってのに……くそ。人使いの荒い賢者さまだな」

胸に埋めこまれた〝偽錬核〟を押さえて、天塚が荒い息を吐いた。

彼の表情に浮かんでいるのは、隠しきれない焦りの色だ。

「まあいい。あと少しだ。約束どおり、僕の身体の残り半分を返してもらうぞ、〝賢者〟！」

天塚は幽鬼のように微笑んで、操舵室の窓から海を眺めた。

すでに絃神島からは遠く離れて、彼の脅威となる第四真祖も魔女もここにはいない。

あとは〝供物〟を用意するだけ。

天塚の耳に聞こえてきたのは、カカ……という奇怪な笑い声だった。

5

「――雪菜ちゃん、どこ行くの？」

こっそり船室に戻ろうとした雪菜を、凪沙が不思議そうな表情で呼び止める。

彩海学園の宿泊研修生たちは、フェリー内のホールに移動中。昼食の時間になるまで、そこで教材映画を見る予定になっていた。生徒たちにとっては退屈なイベントだが、感想レポートの提出が義務づけられているので、サボるにはかなりの勇気が必要だ。しかし、

「ちょっと忘れ物。先に行ってて」

雪菜は早口にそう言い残すと、凪沙の返事を聞かずに走り出す。

無人の船室に戻った雪菜は、旅行カバンの底から細長い布包みを取り出した。包みの中身はナイフだった。刃渡りは二十五センチほど。グリップ部分にパラシュートコードを巻きつけた無骨な実用品だ。銀色に輝く刃は少しだけ〝雪霞狼〟に雰囲気が似ている。

それを二本。制服の背中に突っこんで、目立たないように上からコートを羽織る。

雪菜はそのまま船室を出て、真っ直ぐに船橋のほうへと向かった。

特になにかはっきりと異変を感じていたわけではない。

だが、なぜかひどい胸騒ぎがした。剣巫としてのカンが危険を訴えている。まるでこの船全

体を強い悪意が包みこんでいるようだ。

「――え!?」

そして階段を駆け上がっていた雪菜は、自分の前を歩く人影に気づいて愕然とする。

不安げに周囲を見回しながら立ち入り禁止の船橋に向かっていたのは、透きとおった銀髪を持つ制服姿の女子生徒だったのだ。

「叶瀬さん?」

「あ……」

雪菜に突然呼び止められた夏音が、怯えたような表情で振り返る。

まずいところを見られてしまった、というよりは、雪菜を巻きこむことを恐れているような反応だ。そんな彼女の態度で、雪菜は夏音の目的を理解する。

「もしかして、あなたも?」

雪菜の質問は曖昧だったが、夏音はその意味を正確に理解したらしい。

弱々しくうなずいて、碧い瞳で雪菜を真っ直ぐに見返した。

「この船をなにかよくないものが取り巻いてるみたい、だから――」

自分がどうにかする、と言いかけた夏音を、雪菜が微笑んで制止する。

「大丈夫　ここから先はわたしが行くから、笹崎先生に知らせてもらえる?」

雪菜が背中から引き抜いたナイフを見て、夏音は驚いたように瞬きする。やがてその瞳に、

理解の色が広がった

十月半ばの模造天使事件で、夏音は、雪菜が剣巫として戦う姿を目撃している。詳しい事情は知らないまでも、この場は雪菜に任せるべきだと納得したらしい。

「それからこれを持ってて。お守りだから」

そう言って雪菜は、夏音の前に右手を差し出した。掌の上に載っていたのは、狼を模した銀色の折り紙だ。夏音は怪訝そうにその折り紙を受け取ると、

「あ、待って」

走り出そうとした雪菜の背中に呼びかける。

立ち止まった雪菜を心配そうに見上げて、夏音が静かに言葉を続けた。胸の前で握りしめた彼女の両手が震えている。

「私はこの感覚を知ってる気がしました。たぶん前にもどこかで」

「……叶瀬さん、もしかしてあの錬金術師のことを知ってるの?」

雪菜が困惑しながら訊き返す。

夏音は五年前のアデラード修道院の事故の当事者だ。天塚と接触があってもおかしくはない。だとすれば、彼女は天塚の目的を知っている可能性がある。

「錬金術師……」

しかし夏音はゆっくりと首を振った。

「いえ、あれはもっと恐いものでした。大切なお友達がたくさんいなくなりました。だから、もう二度と、あんなことは……雪菜さんも、どうか……」

口下手な夏音の言葉を聞きながら、雪菜はじわり、と胸が温かくなるのを感じた。

夏音は雪菜を心配してくれている。いなくならないで欲しい、と言ってくれたのだ。雪菜のことを大切な友達だから、と。任務で〝魔族特区〟に来ただけの雪菜のことを――

「ありがとう。叶瀬さん――いえ、夏音ちゃんも気をつけて」

互いに力強くうなずき合って、雪菜と夏音は、それぞれ違う方向へと駆け出した。

立ち入り禁止を示すロープを越えて、雪菜は船橋の中へと入る。

操舵室に続く通路は無人だった。本来そこにいるはずの船員や警備員の姿はない。ただ肌を刺すような不快な感覚だけが強くなっていく。

辿り着いた操舵室の扉は、ロックされたままだった。

しかし雪菜は、ふっ、と小さく息を吐き、スカートを翻してその場で回転。力任せの上段蹴りで扉をぶち破る。そして吹き飛んだ扉越しの光景に、雪菜は表情を凍らせた。

「これは……」

操舵室に残されていたのは絶望と静寂だけだった。

金属製の彫像と化して床に転がった船員たち。そして火花を噴き上げている航法装置。機械の苦手な雪菜の目にも、それが致命的な事態だということは明らかだ。

すぐにこの状況を誰かに知らせなければ、と雪菜が踵を返した瞬間、ゾッとするような悪意が背後から襲ってきた。鞭のようにしなる液体金属の刃を、雪菜のナイフが撃ち落とす。

「やあ。きみか、剣巫。ご自慢の槍はどうしたのさ？」

エアコンのダクトから融けた上半身を露出させていたのは、白いコートを着た錬金術師だ。薄笑みを顔に張りつけたまま、彼はヌルヌルと流動しつつ床に降りてくる。

「天塚汞……!? どうして……あなたは死んだはず……!?」

「そうだよ。きみたちが殺したんだ」

驚愕する雪菜を見て、天塚は愉快そうに笑った。だが、完全な人の形を保てない彼の姿に気づいて、雪菜はすぐに驚きから立ち直る。

「天塚汞……あなたは……」

「さすがにカンがいいね。そうさ、ここにいる僕は分身だよ。船の中をうろつくには、こっちの身体のほうが便利だからね――！」

天塚の輪郭がグニャリと崩れた。彼の胴体を突き破って現れた新たな触手が、雪菜のナイフに絡みつく。そのままナイフと融合して、雪菜の武器を奪おうとしたのだろう。

だが、表情を歪めたのは天塚のほうだった。天塚の触手はナイフを浸蝕することができず、逆に雪菜に撃ち落とされたのだ。

「そのナイフ……呪力付与した隕鉄でできてるのか。面倒な武器を持ってるな！」

悔しげにそう吐き捨てて、天塚は背後に倒れこむ。そこにあったのは排水用のスリットだ。全身をドロドロの液体金属へと変えた天塚が、その中に吸いこまれるように消えていく。

「悪いけど、あんたの相手はあとだ。いくら分身でも、そう何度も壊されたくはないしね」

「天塚永　！」

雪菜は消えていく天塚を呆然と見送った。今の雪菜の装備では、あの錬金術師を止める手段はなかった。天塚を斃すには、あらゆる魔力を無効化する〝雪霞狼〟が必要だ。しかし雪菜の手元には、あの銀色の破魔の槍はない。

だがそれを理解しているはずの天塚は、雪菜にとどめを刺そうとはしなかった。その事実に雪菜は困惑する。なぜ彼は自分を見逃したのか――？

「まさか……！」

雪菜はナイフを握ったまま操舵室を飛び出した。

この船には、剣巫である雪菜よりも強力な霊媒が乗っている。そう、天塚は最初から叶瀬夏音を狙っていたのだ。

大切な人たちを護り切れないかもしれない――生まれて初めて感じる恐怖に背筋が凍る。

こんなとき、いつも彼女を助けてくれた少年はここにはいない。

暁古城はいないのだ。

6

「集合場所が変わったんだってさ」

船内ホールの入口の前で、委員長とシンディが凪沙を待っていた。ほかの班の生徒たちも、ぞろぞろと移動を始めているところだ。

「そうなの？　どうして？」

「知らないけど、ちょっと揉めてるみたい。船員の人たち、みんなバタバタしてるし」

シンディが肩をすくめて言う。ふーん、と凪沙は首を傾げて、

「なんだろ。火事とか？」

「や、それはないでしょ。サイレンも鳴ってないし」

「じゃあ、氷山にぶつかる？」

「ないない。どこにあんのよ、氷山。むしろ見てみたいよ」

凪沙としては真面目に訊いてみたつもりだったのだが、シンディはなぜかツボに入ったように細かく肩を揺らして笑い出した。うーん、と凪沙は唇に手を当てて、

「でも困ったね、雪菜ちゃんにも教えてあげないと」

「そうね。めずらしいわね、あの子が忘れ物なんて」

委員長がいつもの冷静な声で言う。うん、と凪沙は少し思案して、

「二人は先に行って席取っててくれる？　あたし、ここで待ってるよ」

「わかった。またあとで」

委員長がシンディの手を引いて歩き出す。凪沙は彼女たちに手を振って、急にがらんとした通路を見回した。残っていた生徒たちが立ち去ってしまうと、周囲にはもう人影はない。本来なら乗務員が常駐しているはずの売店や案内カウンターも無人だった。シンディたちの言うとおり、船内でトラブルが起きているらしい。

まあでも気にしても仕方ないし、とあえて気楽に考えて、凪沙は売店に陳列された土産物の物色を始めた。〝魔族特区〟土産のキーホルダーやストラップなどは、普通に絃神市内で生活していると目にする機会がないものばかりだ。物珍しさと旅行の解放感も手伝って、ついつい物欲が刺激されてしまう。

「あ、これいいな。買っちゃおうかな」

ローマ字でKOJOと書かれたキーホルダーを見つけて、凪沙は思わず手に取った。今ドキめずらしい名前入りアクセサリ、しかも古城などという風変わりな名前の商品となると激レアだ。こんな貴重なものを見逃すわけにはいかない。

「あ、すみませーん」

従業員用通路の扉が開いて、誰かが出てくる気配があった。凪沙は振り返って手を挙げた。

売店の係員だと思ったのだ。しかしそこに立っていたのは、奇術師を思わせる奇妙な風体の男だ。彼は凪沙と目を合わせると、酷薄に微笑んで右腕を上げた。

そして服についた泥を払い落とすように、無造作にその手を振り下ろす。

「凪沙ちゃん！　伏せて――！」

「え!?」

絶叫めいた雪菜の声につられて、凪沙はその場に屈みこんだ。

その頭上で銀色の光が散った。凪沙を目がけて飛来した触手を、雪菜がナイフで弾き返したのだ。

「ゆ、雪菜ちゃん!?」

なにが起きたのかわからぬまま、凪沙は、雪菜が握っていたナイフの無骨さにまず驚いた。そして雪菜と睨み合う男の姿に絶句する。男の輪郭がぐずぐずと崩れ、無数の触手を備えた怪物へと変貌していたからだ。

「な、なに、この人!?」

「逃げて！　早く！」

怯える凪沙を庇って、雪菜が前に出る。凪沙がいるのは広い通路の中央だ。怪物から逃げるのはそれほど難しくない。しかし凪沙は青ざめた顔で首を振り、その場に力なく座りこんでいた。

「魔族……なの？」

「凪沙ちゃん……!?」

身動きもできないほど取り乱す凪沙に気づいて、雪菜は愕然とする。

凪沙は魔族恐怖症。〝魔族特区〟の住人でありながら、彼女は魔族が恐いのだ。その場から逃げ出すことすらできないほどに。

「失礼だな。僕は人間だよ。傷つくなぁ……」

恐怖におののく凪沙をいたぶるように、天塚がゆっくりと彼女に近づいていく。

「い……いや、来ないで！」

凪沙は声を震わせながら、必死で後ずさろうとした。しかし硬直しきった彼女の細い腕は、虚しく床をひっかくだけだ。

雪菜は天塚を牽制しながら退路を探した。恐慌状態の凪沙を庇いながらでは、天塚と戦うのは不可能だ。今はこの場から凪沙を連れて離脱するしかない——

しかし雪菜のその目論見は、壁の隙間から滲み出してきた新たな人影によって粉砕された。もう一人の天塚求が、雪菜たちの逃げ道を塞ぐように現れたのだ。

「二体目——!?」

前後から近づいてくる異様な敵を、雪菜は絶望の眼差しで見つめた。

天塚は〝雪霞狼〟があったとしても、斃せるかどうかわからない強敵だ。ましてや、同時に二体の彼を相手にして、その上で凪沙を護り切るのは雪菜ひとりでは不可能だった。

そんな雪菜たちの絶望を弄ぶように、二体の天塚はさらに距離を詰め、

「い、嫌っ！　助けて、古城君！　古城君——————！」

凪沙がうずくまって絶叫した。その瞬間、彼女の全身から放たれたのは、桁外れの凄まじい魔力だった。大気が凍てつき、凪沙の周囲が白く煙る。花弁のように雪の結晶が舞い狂う。

「なにっ!?」

冷気の直撃を浴びた二体目の天塚が、身体中を白く凍らせながら転倒した。のたうつように蠕動して、必死に凪沙から距離を取る。

「なんだよ、こいつ……!?　この魔力はいったい……!?　くそっ！」

一体目の天塚も怯えたように後ずさって逃走を始めた。雪菜はそれを呆然と見送った。

天塚を追いかける余裕はなかった。凪沙の異変はまだ続いている。このままでは吹き荒れる凍気の渦に巻きこまれて、雪菜もおそらく助からない。

「凪沙ちゃん——！」

体内の呪力を限界まで高めて凍気に耐えながら、雪菜は必死に凪沙を呼んだ。

純白の凍気をまとって凪沙が悠然と立ち上がる。

しかし振り返る凪沙の瞳はなにも映していない。雪菜の存在にすら気づいていない。完全に意識を失って、何者かに憑依されているのだ。

このまま凍気の放出が続けば、いずれは船ごと破壊されてしまうことになるだろう。しかし今の凪沙は明確な意思をもって誰かを攻撃しているわけではない。彼女はただ出現しただけだ。

おそらくは凪沙を窮地から救うために現れただけ――

ただそこに在るだけで、凄まじい破壊を撒き散らす。

それとよく似た存在を雪菜はよく知っていた。それは世界最強の吸血鬼、第四真祖が従える十二体の眷獣だ。今の凪沙は、眷獣の制御に失敗して暴走したときの古城にそっくりなのだ。

だが、その破壊的な魔力の奔流は、妙にテンションの高い女の声に遮られる。

「はい、そこまで――！」

純白の凍気の渦を斬り裂くようにして現れたのは、赤髪のお団子ヘアと二つ編み、チャイナ服姿の若い女だった。気合い一閃で凪沙の懐に潜りこみ、暴走状態の彼女にデコピンをかます。

「笹崎先生!?」

担任教師の無理やりな力業を、雪菜は呆気にとられて見つめた。

赤髪の女――笹崎岬は、雪菜たちのクラス担任だ。当然、この宿泊研修にも引率教師として参加している。そして彼女はもうひとつ、国家攻魔官の肩書きも持っている。あの南宮那月の後輩で、しかも那月が唯一苦手にしている人物だというのだから、それだけでも岬がただものでないことが知れるだろう。

「……我の邪魔をするか、道士――？」

凪沙に憑依した存在が、凪沙の声で岬に訊く。

暴走状態が終わったわけではない。しかし、凪沙に憑依した存在は、対話するに足る対等の相手として岬を認識したらしい。

「まっさか。でも、あんたがここで本気出したりしたら、この船ごと吹っ飛んだりするから。そうなったら、あなたも困ったりするっしょ？」

荒れ狂う凍気の中で獰猛に笑いながら、岬が言った。その警告を受け容れたというわけでもないのだろうが、撒き散らされていた魔力の波動が不意に消失した。

「なるほど……よかろう。貴様たちに少しだけ時間をくれてやる……」

そう言って凪沙が目を閉じる。糸の切れた操り人形のように、彼女はその場に倒れていく。憑依状態が解けたのだ。

「笹崎先生……今のはいったい……」

雪菜が白い息を吐きながら、岬に訊いた。呪力の放出による防御はほぼ限界だった。あと二十秒も長く凪沙の暴走が続いていたら、雪菜の全身も凍りついていたはずだ。

「生徒のプライバシーに関わることは答えられないな」

岬は悪戯っぽく微笑んだ。事情があるのはお互い様だろ、と彼女の表情が無言で語っている。

雪菜は無言で溜息をついた。凪沙の秘密も気になるが、それよりも天塚のことが気がかりだ。

「天塚汞という錬金術師のことは――」

「知ってる。ここに来る前に遭遇したよ　那月先輩あたりからも事情は聞いてるしね。まさかこの船が狙われるとは思ってなかった。裏目ったよ」

そう言って岬は唇を歪めた。引率教師である彼女は、生徒の安全に責任を負っている。雪菜以上に事態を深刻にとらえているはずだ

「生徒のみんなは？」

「城守センセの誘導で避難中　つっても船の中だしね。結界程度で止められる相手でもなさそうだし、ちょっとまずい状況だったりするかもね」

「はい……」

雪菜は苦悩の表情を浮かべた。残念だが岬の言うとおりだ

たとえ救命艇で脱出しても、逃げ切ることは不可能だろう。肉体を自在に変形させる天塚は、おそらく水中でも無関係に行動できる。比重の重い液体金属の身体でも、体内に空気を取りこめば十分な浮力が得られるからだ。

「分裂して増える上に、どっから来るかもわからないんじゃ、正直手の打ちようがないな。那月先輩ならまだなんとかなったりするかもだけど、せめてあいつの目的だけでもわかればね」

岬がギシギシと奥歯を噛み鳴らす。そのとき彼女の背後から穏やかな声がした。

「あの人の目的はたぶん私でした」

「……叶瀬っ!?　みんなと一緒に避難しなかったのか？」

舳が驚いて顔を上げた　ごめんなさい、と夏音が困ったように首を振る

「あの人が修道院のみんなを襲ったときのことを思い出しました　彼は供物になる強い霊能力者が必要だと言いました　あの修道院には、たくさんの霊能力者が保護されてましたから」

「供物!?」

雪菜の全身から血の気が引いた　天塚は錬金術師　そして錬金術師にとって供物といえば、それが意味するところはひとつしかない。

「まさか彼は錬金術の材料にするつもりで、あなたを――」

「はい。だから私さえ近くにいなければ、みんなはきっと大丈夫です」

夏音は、覚悟を決めた者に特有の優しげな表情でそう言った　そして彼女は雪菜たちに背を向けた　そのまま避難した生徒たちとは逆方向に走り出す

「叶瀬!?　自分が囮になるつもりか――!?」

夏音の狙いに気づいて、岬がうめいた　気絶した凪沙を抱えている彼女には、咄嗟に夏音を引き止めることができなかったのだ

代わりに動いたのは雪菜だった。

「笹崎先生、暁さんをお願いします　叶瀬さんはわたしが！」

「あ……!?　待て、おまえまで――！」

岬の制止を振り切って、雪菜は船首方向へと向かった。

おそらく夏音の判断は正しい。天塚の目的が霊能力者の確保なら、アルディギアの王族と獅子王機関の剣巫――ともに最高クラスの霊能力者である二人を見逃すはずがない。少なくとも雪菜たちが囮になっている間は、ほかの生徒たちは安全なはず。

だが、狭い船の中でいつまでも逃げ切れはしない。いずれは追い詰められることになる。

それまでに天塚を斃す方法を見つけなければならない。

だが、どうすればいい――？

7

地面に落ちた宝石を中心に、散らばっていた深紅の水滴が集まってくる。

それは重力に逆らってゆるゆると盛り上がり、やがて人間の姿を形作った。艶やかな黒髪と、褐色の肌。そして見慣れた華やかな顔立ち――

「ふむ、まあ。こんなものか」

浅葱と同じ顔をした少女が、ニーナの口調で満足げに呟く。

古城は軽く呆然としながら、二人に増えた浅葱を見比べた。〝賢者の霊血（ワイズマンズブラッド）〟を寄せ集めて再生したニーナは、なぜか浅葱の形のままだったのだ。服装も彩海学園の制服そのままだ。

色違いの二人の浅葱が互いに顔をつき合わせていると、格闘ゲームの同キャラ対戦を見ている気分だ。オリジナルの浅葱が気絶したままで本当によかった、と古城は嘆息する。

「復活したのか、ニーナ……でも、なんで浅葱の恰好なんだ？」

「急に手脚の長さが変わると感覚が狂うからな」

両腕を回して新しい身体の動きを確認しながら、ニーナが言う。

「それにわたし本来の豊満なボディを再現するには〝霊血〟が足りぬ。この娘の薄っぺらい身体でギリギリだ」

「薄っぺらいとか言うなよ。失礼なヤツだな……つか、浅葱はスタイルいいほうだろ。あんたがどんだけグラマーだったか知らんけど」

気絶している親友の名誉のために、古城は渋面で反論した。するとニーナは、それを挑発と受け取ったのか、得意げに顎をツンと逸らして、

「うむ。妾は凄かったぞ。こーんなだぞ。少し再現してやろうか」

そう言ってニーナは自分の胸をいきなり二回りほど成長させた。制服のシャツがはち切れんばかりに引っ張られて、ボタンがひとつ弾け飛ぶ。

「……なんであんたみたいなのが修道院にいたんだ？」

わざとらしくバストを揺らすニーナを、古城が呆れ顔で眺めて訊いた。

するとニーナはめずらしく殊勝に微笑んで、

「修道院に用があったわけではないがな、ただ、身寄りのない霊能力者を保護するのに都合

がよかったのだ　身勝手な錬金術師どもが、そのような境遇の者を供物にするのを、飽きるほど見てきたのでな」

「ニーナ……」

古城は驚いて褐色の肌の少女を見つめた。

霊力の強さゆえに不幸な生け贄にされたのは、二百七十年前の彼女自身だった。

だから彼女は自らの名を冠した修道院で子どもたちを保護していたのだ　自分と同じ境遇の者を二度と出さないようにと。

だが、そんな彼女の願いは踏みにじられることになる。〝賢者〟と、天塚永の謀略によって――

古城は無言で拳を強く握りしめた。〝賢者〟に対する強烈な怒りを自覚する。己の存在を護るために、ほかのあらゆる生命を踏みにじることを厭わぬ人工の神。そんなものの存在を許してはおけないとはっきり確信できる。

そんな古城の背後から、舌足らずな声が聞こえてくる。

「ほう。おまえがニーナ・アデラードか」

波紋のように虚空を揺らして現れたのは、場違いに豪華なドレスを着こんだ南宮那月だった。相変わらずの神出鬼没さだ。

「……那月ちゃん!?」

思わず声を洩らした古城を、那月は無言で殴りつける　畳んだ日傘の直撃を受けて、古城は顔面を押さえて仰け反った　そして那月は、じろりとニーナの胸元を不機嫌そうに睨みつけ、

「その古の大錬金術師サマが、なぜ藍羽の顔をして偽乳を盛っているのかは気になるところだが……おまえの趣味か、暁古城？」

「違ェよ。つか、そんなことを言ってる場合じゃなくて――」

「おおよその事情は叶瀬賢生から聞いている。天塚永の正体と、おまえの素性についてもだ、ニーナ・アデラード」

古城を無視して、那月がニーナに呼びかける　ニーナは、うむ、と短く答えた。

「面倒な話はあとだ、那月ちゃん　先に天塚の居場所を探してくれ。あいつが復活させようとしてる〝賢者〟ってのは相当ヤバイんだ、早く見つけ出してなんとかしないと」

古城は、気絶中の浅葱を抱えて立ち上がる　那月は、ふん、と小さく鼻を鳴らして、

「のんびり話している暇がないというのは同感だ。天塚の居場所がわかった　フェリーの無線設備が破壊されたせいで詳しい状況はわからんが、ほぼ確定だ」

淡々とした那月の言葉に、古城は表情を引き攣らせた。

「フェリー……って、なんのことだ？　まさか……!?」

「午前七時発の東京行き　彩海学園の宿泊研修生を乗せた定期便だ」

那月が突き放すように事実だけを告げる。古城は弱々しく首を振り、

「嘘……だろ。だってあの船には凪沙や姫柊たちが……」
「だから、なのかもしれんな」
ニーナが不機嫌そうに口を挟んでくる。
「な……に!?」
「〝賢者〟を創り出す際に使われたのは大量の貴金属。そして供物となる霊能力者だ。復活直後の〝賢者〟が力を取り戻すために、それと同じものを欲しても不思議ではあるまい?」
「そうか……あのフェリーには叶瀬が……!」
古城の声が無意識に震えた。少なくとも天塚が知る中では、夏音は絃神島でも最高クラスの霊能力者だ。〝賢者〟の復活を邪魔されたら厄介だが、逆に〝賢者〟が復活した今となっては、彼女はまたとない供物になる。
そしてニーナは重々しくうなずき、
「天塚の狙いが夏音だけとは限らぬ。あの雪菜という娘も優れた霊媒であろう?」
「まずい……姫柊は〝雪霞狼〟を持ってないんだ!」
古城の顔が焦りで歪んだ。天塚には打撃は通用しない。おそらくは呪術も通用しない。雪菜がどれほど優れた剣巫でも、今の彼女には天塚を斃す手段がない。自分の身を護ることすら、できるかどうか――
「那月ちゃん、フェリーまで跳べないか?」

「助けに行くのか」
「当然だろ。あの船には姫柊が乗ってるんだぞ! 凪沙や、ほかの知り合いだって、大勢!」
噛みつくような勢いで詰め寄る古城を、那月が鬱陶しげに日傘で突きのける。
「無理だな。私には遠すぎる。空間制御の本質は距離をゼロにするのではなく、移動にかかる時間をゼロにする魔術だ。一瞬で移動できるというだけで、肉体には同じ距離を徒歩で移動したのと同じだけの負担がかかる。跳ぶのは数キロが限界だ」
「魔術も万能じゃないってことか……」
古城は苦悶するように低くうめいた。
「だったら飛行機かヘリを飛ばしてくれ。船の近くまで行けば跳べるんだろ?」
「それも無理だな」
那月の声の冷淡な響きに、古城はカッと頭に血を上らせる。
「なんでだよ!?」
「そういう条例があってな。特区警備隊は航空戦力を持てない。〝魔族特区〟内の治安維持が目的の組織だから、という建前だが、要は反乱対策だ。絃神市内の魔族と特区警備隊が手を組んで反乱を起こしたら、政府にとっては脅威だからな」
「なんだよ、それは!?」
あまりにもくだらない大人たちの理屈に、古城はやり場のない怒りを覚えた。しかし現実と

して、長距離を移動できる航空機が存在しないのでは、どうすることもできない
「じゃあ、民間の航空機を借りるってのは……!?　それも駄目とは言わないだろうな!?」
「いや、最初からそのつもりで貴様を迎えに来た　航空機のほうも手配済みだ　都合よく機体を提供してもいいと言ってくれる親切な連中がいてな」
那月の無感情な説明に、古城は腰が抜けそうなほどの安堵を覚えた　この際、どんなにボロい飛行機でも文句は言わない　フェリーまで最速で送り届けてくれるなら、そのあとで墜落しても構わない
「妾も同行させてもらうぞ。文句はないな、南宮那月？」
ニーナが強引に古城たちの会話に割りこんでくる　那月は一度だけ小さく息を吐き、
「そうしてもらおう、偽乳　暁ひとりで送り出すのを不安に思っていたところだ」
「……俺ひとり？　那月ちゃんは一緒に来ないのか？」
訝しげに訊き返す古城を見上げ、那月は素っ気なくうなずいた
「私たちはあとからヘリで追いかける。不本意だが、おまえたち以外にあれに耐えられそうなやつらの心当たりがなくてな」
「耐えられるってなんのことだ……？」
どこか不穏な那月の言葉に、古城は本能的な躊躇を覚える　しかし那月は空間を歪めて門を開くと、そんな古城を突き飛ばすようにして移動した

船酔いに似た一瞬の不快な浮遊感のあと、古城たちは見慣れない場所に出現する
見渡す限りに広がっているのは巨大浮体式構造物の上に建設された滑走路　そして駐機中のヘリや旅客機の群れだ　紘神島中央空港のド真ん中に連れてこられたらしい
「え……!?」
そして駐機スポットに停まっている航空機の姿を見て、古城は一瞬度肝を抜かれた
恐ろしく巨大な乗り物だった
紡錘形の気嚢で構成された船体は優に百五十メートル以上、大型旅客機の二倍近い巨体に、無数の機関砲が搭載されている
分厚い装甲に覆われた船体は、空飛ぶ城塞と呼ぶに相応しい威容である
特殊合金の硬殻を備えた、軍用の装甲飛行船
氷河の煌めきにも似た白群青の装甲は、黄金の装飾に縁取られている
そして船体に刻まれているのは、大剣を握る戦乙女　その紋章を、古城は知っていた
北欧アルディギア王家の紋章だった

8

「なんだ、これ……飛行船？」

その壮麗な航空機を見上げて、古城が気の抜けたような声を出す。

間近で見上げた飛行船の姿は、あまりにも巨大で現実感が乏しい。空中にわずかに浮いていなければ、ただの豪華な城としか思わなかったはずだ。

『我がアルディギア王国が誇る装甲飛行船〝ベズヴィルド〟です』

立ち尽くす古城のすぐ近くから、笑いを含んだ優雅な声が聞こえてきた。聞き覚えのある声だった。無自覚な気品を滲ませた高貴な口調――

「この声……!?　ラ・フォリアか!?」

『思い出してくれたことを嬉しく思います。お久しぶりですね、古城』

飛行船から吊り下げられた巨大なモニタに、美しい銀髪の少女が映し出される。叶瀬夏音によく似ているが、内側から醸し出される圧倒的な威厳は夏音にはないものだった。

軍隊の儀礼服に似たブレザーには、黄金の装飾が輝いている。

ラ・フォリア・リハヴァイン王女――

美の女神の再来とも讃えられる、北欧アルディギア王国の姫御子だ。

衛星回線越しの映像だけでも、彼女の存在感は揺るがない。生半可な芸能人などでは足元にも及ばぬ圧倒的なオーラをまとっている。

そのオーラに軽くあてられて、古城は冷や汗を滲ませた。

この聡明怜悧な王女が、古城は密かに苦手なのだ。頭が良すぎて、なにを考えているのかわからない。那月とは違う意味で唯我独尊の人物なのである。

そして目立ちまくっているラ・フォリアの陰に隠れて、飛行船から下りてきた人影があった。見知らぬ女性の三人組である。ラ・フォリアと同じブレザーを着ているが、王女のものほど派手な装飾はない。実用的な普通の軍服だ。ショートヘアの銀髪も、いかにも有能な軍人という雰囲気だった。

「あんたたちは――」

「アルディギア聖環騎士団所属ユスティナ・カタヤ要撃騎士、以下二名であります。ラ・フォリア・リハヴァイン王女の命により、王妹殿下の護衛を務めておりました」

「王妹殿下？」

瞬、誰のことだかわからなかったが、古城は少し考えて思い出す。叶瀬夏音はアルディギア前国王の隠し子だった。つまり現在の国王の腹違いの妹なのである。実はラ・フォリアとは、叔母と姪の関係だ。

「叶瀬の護衛をしてたのか？　もしかして、そのためにこの島に……？」

『王位継承権を放棄したとはいえ、夏音はアルディギア王家の一員です。彼女の立場や能力を悪用しようと、奸計を巡らす者が現れないとも限りませんから』

ラ・フォリアが少しだけ声を潜めて言う。飛行船のスピーカーは指向性らしく、王女の声は古城たち以外には聞こえていないらしい。

「だけど叶瀬はそんなことなにも言ってなかったぞ」

古城が眉をひそめて言った。学校での夏音を見ていても、騎士団に護衛されている気配はなかった。雪菜に四六時中つきまとわれている古城とはまったく対照的だ。

『ユスティナは有能な要撃騎士ですから。夏音の日常生活に干渉することなく、陰から密かに危険を排除していたのでしょう。ユスティナは親日家で、特に忍者の大ファンなのです』

「……忍者？」

胡乱な眼差しを向ける古城に向かって、ユスティナ嬢は神妙に両手の掌を合わせた。拝み倒すように頭を下げてくる。

「忍！　いたずらに名誉を求めることなく、その存在を陰に隠し、主君のために命を懸ける。ジャパニーズ・ニンジャこそまさに騎士の規範。自分も今回の任務を機に騎士道を極めるべく研鑽して参る所存であります」

「は、はあ。どうも」

ユスティナ嬢の勢いに気圧されて、古城は曖昧にお辞儀を返す。ふと気づけばモニタの中のラ・フォリアは、懸命に笑いをこらえるような表情を浮かべていた。あの女、絶対わかってわざとやらせてやがる　と古城は気づく。あの腹黒王女は、生真面目なユスティナ嬢をそそのかして楽しんでいるのに違いない　それにしても、忍って挨拶はなんなんだ？

「じゃあ、今回の天塚のことも」

無理やり気を取り直して古城が訊く　ラ・フォリアは、はい、と首肯して、

『早い段階で事情はつかんでいました　南宮攻魔官と協力して夏音の護衛に当たっていたのですが、残念ながらわたくしたちは〝魔族特区〟の外には干渉できません』

そう言って王女は無念そうに目を伏せた。

『ですから、古城。あなたのお力をお借りしたいのです』

「力を貸してもらうのは俺のほうだろ」

ふっ、と息を吐いて、古城は王女に笑いかける。

多少性格に問題があるとはいえ、ラ・フォリアが夏音を救いたいと考えていることに変わりはない。追い詰められていた今の古城にとって、彼女の協力は素直にありがたかった。

「この飛行船で叶瀬たちのところまで乗せていってもらえるのか？」

「いえ。〝ベズヴィルド〟の速度では、現場海域に到着するまで十五分以上かかってしまいます。一刻の猶予もない現状、それでは遅すぎる――ですので、これを使います」

「これ……？」

古城は強い悪寒に襲われながら呟いた　よく見ると飛行船の武器格納庫らしき部分が開いて、奇妙な装備が姿を現していた。

艦載ミサイル発射機に酷似した、装甲ボックスランチャーだ。

「これ……って、まさか……その発射台に載ってるやつのことか？」

『我が聖環騎士団が所有する試作型航空機〝フロッティ〟です』

超然とした口調で、王女が告げる。しかし古城は必死の形相で髪を振り乱し、

「ちょっと待て。どう見てもこれは航空機じゃないだろ！　ただの巡航ミサイルだろ！」

『試作型航空機です』

王女はにこやかに断言する。

『本来は偵察用の無人機ですが、搭載していた観測機器類を外して、中に人間を詰めこめ……いえ、乗りこめるようにしました。巡航速度は時速二千四百キロメートル。計算によれば百五秒で目的地に直撃……いえ、到達します』

「直撃!?　直撃って言ったよな!?　わざとらしく訂正したけど直撃って！」

声を裏返らせて古城は叫んだ。時速二千四百キロメートルといえば、概算でおよそマッハ二・八。ジェット戦闘機でもそこまでの速度が出せる機体は多くない。完全に超音速巡航ミサイルだ。

「時間がない。早くしろ。せっかくの王女の好意を無駄にするな」

ビビりまくる古城の背中を、那月が突き飛ばすように蹴り飛ばす。

「好意じゃなくて悪意の間違いだろ、くそ……！」

古城は苛立たしげに歯を軋ませた。一方のニーナは、最近の航空機はすごいのう、などと、ババ臭い態度で感心している。不滅の液体金属生命体である彼女は、ミサイルの中に詰めこまれても、べつにどうということはないのだろう。どうやら古城も覚悟を決めるしかないようだ。

『夏音のことを、頼みます。古城』

最後の最後に、ラ・フォリアが真摯な眼差しを向けてきた。彼女の碧い瞳を見つめ返して、古城は苦笑。無言で力強くうなずいてみせる。

「じゃあ、那月ちゃん。悪いけど、こいつをうちまで連れてってやってくれ」

抱きかかえていたままの浅葱の身体を、古城が那月に押しつける。

「やれやれ。教師にサボりの片棒を担がせるとはいい度胸だな」

端整な美貌を不機嫌そうに歪めて、那月は浅葱を受け取った。

古城はそれを確認して、飛行船のほうへと歩き出す。ミサイルに乗るのはゾッとしないが、雪菜たちを見殺しにするよりはよっぽどマシだった。

そして古城が飛行船のタラップに足をかけたとき、

「ちょっとお待ち、第四真祖の坊や」

意外な声が古城を呼んだ。雪菜の師匠が操る使い魔――骨董品店にいた猫の声だ。

「ニャンコ先生!?」

古城が声のした方角へと視線を巡らせた。

駐機スポットに走りこんできた連絡車から、煌坂紗矢華の顔をした少女が降りてくる。露出度高めのメイド服を着た彼女の肩には、黒猫がちょこんと乗っていた。そして少女の背中

には、黒いギターケースが背負われている。

「ニャンコ先生……式神も直ったのか。早かったな」

そう言って古城は無造作に、駆け寄ってきた少女の肩に触れようとした　その瞬間、彼女が、ビクッと怯えたように身体を引く　そのせいで目測を誤った古城の手は、結果的に少女の胸を鷲づかみにする形になってしまう。

「ひゃっ!?」

「え!?」

式神とは思えないリアルな悲鳴と胸の弾力に、古城はぽかんと動きを止めた。

少女の顔が見る間に赤く染まっていく。目尻を吊り上げた彼女の瞳には、生々しい殺意と怒気が渦巻いていた。

「い、いつまで触ってるのよ!?　この痴漢！　変態！　ド変態真祖！」

少女が放ったスリークォーター気味のアッパーが、古城の顎先をとらえて脳を揺らした。

激痛にうめきながら古城はよろよろと後ずさり、

「煌坂!?　おまえ、本物か!?」

「本物で悪いかっ！」

涙目になってポカポカと古城を殴り続ける紗矢華。紗矢華の姿を模した式神かと思いきや、実は紗矢華本人だったというオチらしい

式神を作り直すには時間がかかるから、本土から代理を送ってくる、というニャンコ先生の発言は、式神ではなく実物を連れてくる、という意味だったのだ　まぎらわしすぎるだろ、と古城は恨みがましい気分で黒猫を睨む。

その黒猫は、じゃれ合う古城と紗矢華を鬱陶しげに一瞥すると、

「うるさいよ、紗矢華　減るもんじゃなし、今更乳を揉まれたくらいでピィピィ騒ぎなさんな。前に吸わせてやったこともあるんだろ」

「ち、乳は吸わせてません！」

「誤解を招くような言い方すんなっ、駄猫！」

呼吸をぴったりと合わせて紗矢華と古城が反論する。

そして紗矢華はようやく少しだけ落ち着きを取り戻し、

「はい、これ」

背負っていたギターケースを古城の前に差し出した　ずっしりとしたケースの重みに、古城が目を輝かせる。

「雪霞狼か――！」

「雪菜に渡してやっておくれ。頼んだよ」

黒猫が金色の瞳で古城を見つめる。古城は無言でうなずき返す

「ニーナ！」

第五章　水精の白鋼
The Undine

「うむ」

古の大錬金術師を引き連れて、占城は装甲飛行船へと乗りこんだ。

発射機に固定された巡航ミサイルは、青く輝く水平線へと向けられている。その先に浮かぶフェリーの中で、雪菜たちは今も戦っているはずなのだ。

「ユスティナさん、頼みます」

狭苦しいミサイルの弾頭部に潜りこみ、占城が叫ぶ。

そんな占城を拝むように掌を合わせて、銀髪の女騎士が短くひと言だけ呟いた。

「忍！」

無料漫画小説雑誌ダウンロード
Manga-zone.org

1

叶瀬夏音はフェリーの船首に一人きりで立っていた。

背後には見渡す限りの青空と、紺碧の海。透きとおるような銀髪が陽光の下で舞っている。絵画のような美しい風景だが、夏音の表情に余裕はなかった。

白いコートを着た錬金術師が、彼女を追い詰めるように甲板に立っていたからだ。

「鬼ごっこは終わりだよ」

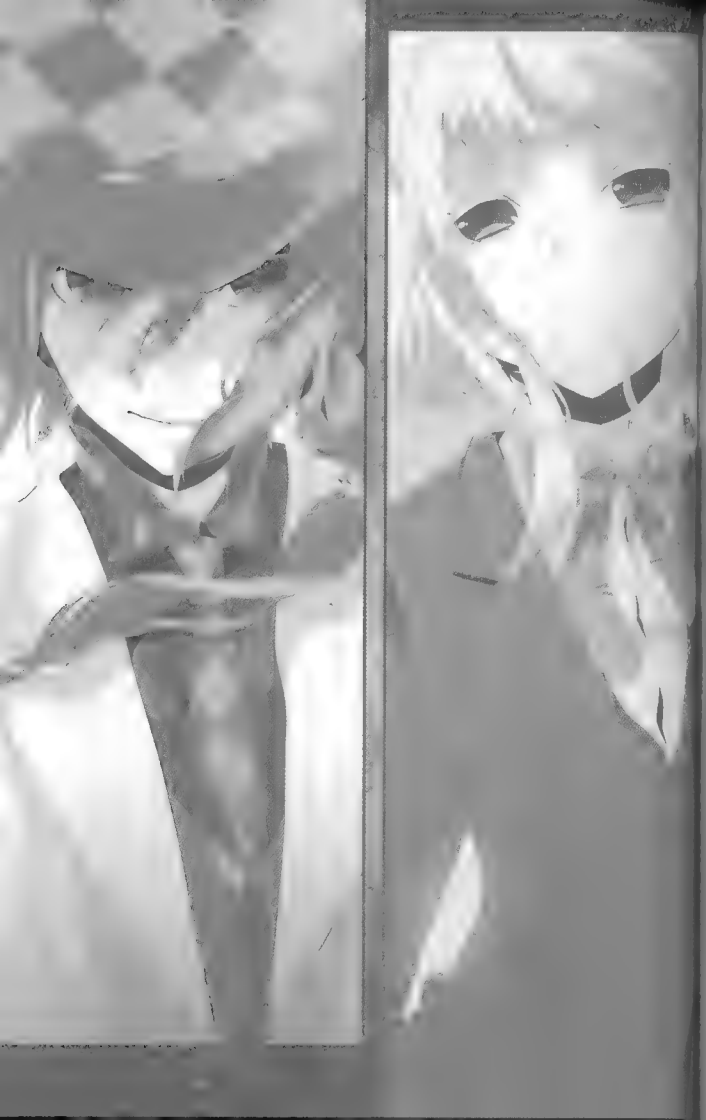
無邪気に微笑みながら、両腕を広げて天塚が言う。奇術師を思わせる赤白チェックのネクタイと帽子。そして彼の左手には、金色に輝く髑髏が握られている。

夏音は彼から逃げるように後ずさる。しかし彼女の細い背中は、すぐに手すりにぶつかった。手すりの向こう側には海面だけが広がっている。その先にはもう逃げ場はない。

それでも天塚は感心したように、夏音を見つめて首を振った。

「いい判断だね。ここならほかの乗客を巻きこむこともないし、僕も隠れてあんたに近づくことができない　その気になれば、あんたは海に飛びこんで死を選ぶこともできる　まあ、そんなことをしても全部無駄だけど」

そして天塚は酷薄に嘲笑う



「供物になる霊能力者はあんただけじゃない――獅子王機関の剣巫や、ほかにも何人か有望なのがいたしね。あんたが死んだら、そっちを代わりにするだけさ。それに〝賢者〟が完全に復活すれば、どのみちみんな殺しちゃうだろうし。僕を恨まないでよね」

天塚の右腕が銀色の刃に変わっていく。

彼がそれをひと振りすれば、夏音の命は一瞬で絶たれてしまうことだろう。しかし天塚には、今はまだ夏音を殺す意思はない。彼の目的は、夏音を〝賢者〟に捧げる供物に変えること。生きたまま〝賢者の霊血〟に取りこむことだ。液体金属の一部となって、白骨化するまで霊力を絞り取られる。かつての修道院の子どもたちと同様に――

だがそれを知りながら、夏音の瞳は、天塚を哀れむように見つめて揺れていた。

「まだ思い出せないのですか」

夏音が唐突に問いかけた。天塚がかすかに表情を震わせる。

「……なに?」

「私はあなたのことを覚えていました。修道院のみんなが殺されたときのことも」

夏音は真っ直ぐに天塚を見つめている。その表情に怯えの色はない。ただ深い悲しみを漂わせているだけだ。

「あなたは、可哀想な人でした。自分が騙されていることにも気づいていない」

「なんのことだよ?」

天塚が苛々と訊き返す。その声にははっきりと動揺が含まれていた。

夏音は頬にかかる髪を静かに払う。彼女の視線に、天塚が気圧されたように沈黙する。

「〝賢者〟を復活させて、あなたはなにをしたかったのですか?」

「決まってるだろ。人間に戻るんだ。あいつに喰われた僕の半身を復活させてもらうんだよ! でなきゃ、誰がやつのいいなりになんかなるものか!」

天塚はそう言って、コートの襟元を引き裂いた。金属生命体に浸蝕された不気味な右半身が露になる。それでも夏音は表情を変えない。穏やかに質問を口にする。

「だったら教えてください。あなたはいったい誰でしたか……?」

「え?」

「あなたが本当に人間だったというのなら、そのころの思い出を聞かせてください。あなたがいつ、どこで生まれて、どんなふうに生きてきたのかを――」

夏音が質問を終えると同時に、短い沈黙が訪れた。

天塚はなにも答えない。答えることができないのだ。そして自分が答えられないという事実が、天塚をじわじわと追い詰めていく。

「黙れよ……叶瀬夏音……」

天塚が絞り出すように呟いた。しかし夏音は残酷に首を振る。

「〝賢者〟はあなたの願いを叶えたりはしない。なぜなら、あなたが人間だったことはないの

だから　あなたは〝賢者〟が自分を復活させるために創り出した　」

「黙れえええっ！」

天塚がついに怒声を放った　刃と化した彼の右腕が、夏音の心臓を目がけて突き出される

手加減のない一撃だ。夏音はそれをよけられない。

自らの死を覚悟した夏音の胸元から、光がこぼれ出したのはそのときだ　見る間に成長した銀色の狼が、天塚の右腕を撃ち落とす

「式神だと――!?」

天塚の腕から枝分かれした触手が、四方から殺到して銀色の狼を引き裂いた

雪菜がお守りと称して夏音に預けた式神は、たちまち元の紙切れへと変わっていく

天塚は荒々しく息を吐きながら、再び夏音を攻撃しようと触手を放った　だが、その触手は夏音の前に着地した新たな人影に弾かれる　一本のナイフを構えた少女が、夏音を庇うように立ちはだかって天塚を睨んでいた。

「雪菜ちゃん……」

「よかった、間に合って」

夏音の無事を確認して、雪菜が安堵の息を吐く

お守りと称して雪菜が預けた式神は、ただ夏音を護衛していただけではない　術者である雪菜に、夏音の居場所を知らせる発信器の役目も果たしていたのだ

「よくよく邪魔をしてくれるな、剣巫……まあいいよ、おかげであんたを探す手間が省けた」

天塚が額をかきむしりながら、荒々しく笑った。

雪菜の瞳に驚愕と焦りの感情が浮かぶ

金属製の甲板をグニャリと融かして、無数の影が雪菜たちを取り囲むように現れたのだ

白いコートを着た痩身の男。天塚汞の分身体。無理な分裂と増殖を繰り返したせいか、完全な人の形を保っているものは一体もない　だが、そのせいで余計に彼らの存在は恐怖だった。

「そのナイフはたしかに少し面倒だけど、ここなら融合の材料がいくらでも手に入る。あんたたちに勝ち目はないよ。逃げ場もね」

天塚が勝ち誇ったように呟いた

その言葉が事実だということを認めないわけにはいかなかった　甲板の隅に追い詰められて、背後には海が広がっている　雪菜たちに逃げ場はない　天塚に対抗できる武器もない。

誰かに助けを求めようにも、ここは太平洋の ド真ん中だ　天塚が雪菜たちを始末するまでのわずかな時間で、この船まで辿り着く　そんな手段などあるはずもない

そんな都合のいい手段があるはずが――

「え!?」

しかし窮地に立つ雪菜の口から洩れたのは、どこか間の抜けた可愛らしい声だった

雪菜の視界の片隅に、信じられないものが映っている。

「なんだ……？」

驚く雪菜の視線につられて、天塚が背後を振り返る。そして彼もそれを見た。

水蒸気の尾を牽きながら、海面スレスレを突き進む灰色の飛行体を。

情け容赦なくフェリーの船体を貫通しようとする兵器の姿を――

「馬鹿な!?　巡航ミサイルだと!?」

それを認識したときにはもう遅かった。アルディギア王国製試作型航空機〝フロッティ〟の巡航速度はマッハ・八。人間の視界に映ったときには、それはもう目標地点に到達している。

だが、予想された衝撃は、すぐには襲ってこなかった。

巡航ミサイルが直撃すると思われた瞬間、それは銀色の霧に姿を変えて、フェリーの船体をすり抜けていたからだ。やがて再び実体化したミサイルは、フェリーから遠く離れた場所で海面に激突。バラバラに砕け散って沈んでいく。残されたのは視界を埋め尽くす濃霧だけ――

「この霧……!?　まさか!?」

大気に溶けこむ強烈な魔力の波動に、雪菜が叫ぶ。フェリーを包むのはただの霧ではない。濃霧の中に浮かび上がるのは、実体を持たない巨大な甲殻獣。

第四点祖が従える十二体の眷獣の一体。ありとあらゆる物体を霧へと変える四番目の眷獣、〝甲殻の銀霧〟が生み出す破壊の濃霧。

ドン、と耳をつんざく轟音とともに、フェリーの船体が木の葉のように揺れた

巡航ミサイルが生み出す衝撃波が、一瞬遅れて襲ってきたのだ。

その衝撃が収まったとき、フェリーの甲板には新たな人影が出現していた。銀色の濃霧が集まって実体化したのは、パーカーを羽織った少年と、褐色の肌を持つ制服姿の少女だ。

「――痛ってェ……ああくそ、着地をちょっとミスった……」

額から流れ落ちる血を拭って、少年がゆらりと立ち上がる。

そんな少年を呆れ顔で見上げて、少女が言う。

「まったく、粗忽な男よな、主も。妾が不死身でなければ死んでいたぞ」

「仕方ねーだろ。時速三千四百キロで吹っ飛ばされたんだぞ。マジで潰れるかと思ったぜ」

そして立ち尽くす雪菜を眺めて、少年は獰猛に微笑んだ。

「ま、おかげでどうにか間に合ったみたいだけどな」

「先輩……」

見開かれた大きな瞳に、暁古城の姿を映して、信じられないという表情で雪菜は呟く。

そして彼女は目の端に浮いた涙を拭い、古城のほうへと駆け出した。

2

「え!?」

半泣きになった雪菜が、古城の胸に飛びこんでくる　そんな彼女の両手には無骨なナイフがしっかりと握りしめられたままだった　そのことに気づいて古城は表情を凍らせる

「いったいなにを考えてるんですか、先輩!?　なんだって、こんな危険なことを――！」

雪菜が拳骨でポカポカと古城の胸板を殴る　その仕草だけなら可愛らしいが、彼女の手からはみ出したナイフのグリップが古城を直撃してメチャメチャ痛い。

ごふっ、と肺の中の空気を吐き出しながら、古城はどうにか雪菜の手首をつかんで、

「姫柊たちを助けに来たに決まってるだろ！」

「そんなことを頼んだ覚えはありません！」

雪菜にバッサリ好意を否定されて、古城は、うぐ、と地味に落ちこんだ。

「先輩まで危ない目に遭ってどうするんですか!?　そもそも、どうして助けに来たはずの人がミサイルで突っこんでくるんです!?」

「あー……あれはミサイルじゃなくて、試作型航空機らしいぞ。いちおうな」

「そんな子どもみたいなすぐバレる嘘をつかないでください！」

「いや、そんなこと言われても……」

雪菜が眉を吊り上げて古城を睨む。古城は途方に暮れて天を仰いだ。

「主ら、言い争うのはあとにせよ　夏音が呆気にとられているではないか」

うんざりしたような口調でニーナが声をかけてくる

雪菜が警戒したような眼差しでニーナを見た。初対面ではないのだが、この二人がまともに会話をするのは実は初めてだ。

「この方は……？」

「大錬金術師ニーナ・アデラードだそうだ。〝賢者の霊血〟の本来の持ち主っていうか管理責任者っていうか」

本人に代わって古城が紹介する。うむ、と偉そうにふんぞり返るニーナ。

雪菜は、そんなニーナの不自然な胸元をじっと眺めて、

「……どうして浅葱先輩の姿をしてるんですか。それにあの胸は……？」

「いろいろ深い事情があるんだよ。気にするな」

なぜか不機嫌そうな雪菜の質問に、古城が歯切れの悪い口調で答える。と、

「お兄さん！」

夏音が必死に声を張り上げて叫んだ。ミサイルの衝撃から立ち直った天塚が、怒りの形相でじゃれ合う古城たちを睨んでいる。

「姫柊！」

古城は背負っていたギターケースを雪菜に押しつけた。雪菜が驚いて目を見開く。

「このケース……！」

「ニャンコ先生と煌坂からだ」

「師家様たちが　!?」

微笑む古城にうなずき返して、雪菜はケースから銀色の武神具を抜いた。柄の部分がスライドし、左右の副刃がそれぞれ展開。主刃が伸びて見慣れた槍の形になる。

古城たちを取り巻く天塚の分身体が、一斉に触手を伸ばして攻撃した。四方から同時に攻撃を仕掛けてくる。

しかし、雪菜の表情にはもう焦りはなかった。古城がこの槍を持ってフェリーに辿り着いた時点で、勝敗はすでに決していたのだ。

「〝雪霞狼〟！」

雪菜が銘を叫ぶと同時に、銀色の槍が白い光を放った。あらゆる結界を斬り裂き、すべての魔力を無効化する神格振動波の輝きだ。

錬金術によって生み出された金属生命体の触手は、易々と切断されて本来あるべき姿へと還る——すなわち単なる金属の塊へと。

「疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟！」

そして古城が新たな眷獣を喚び出した。揺らめく水銀の鱗を持つ双頭龍。すべての次元ごと空間を喰らう次元喰いだ。

それは不滅のはずの天塚の分身体を次々に喰らって、この世界から消滅させていく。巻き添えになって船の甲板もごっそり消滅するが、古城は気づかないふりをする。強力すぎる第四真祖の眷獣に、精密な操作など期待するだけ無駄だ。とにかく船が沈まなければいいのだ

「ぐっ……」

すべての分身体を失った天塚が、屈辱に顔面を醜く歪めた。

そんな天塚の前に歩み出たのはニーナだった。かつて弟子と呼んだ男を寂しげに見下ろして、残酷なほどに優しい声で宣告する。

「もうやめておけ、天塚汞。主の負けだ。大人しく〝賢者〟の遺骸を渡せ」

「ニーナ・アデラード……」

黄金の髑髏を握りしめ、天塚がかすれた声を洩らした。

ニーナは、天塚の胸に視線を落とす。そこに埋めこまれた黒い宝石に——

「薄々は気づいておるのだろう？　主は〝賢者〟が、〝霊血〟の残滓から創り出した人工生命体だ。完全な人間に戻りたいという欲望を埋めこまれ、彼奴に利用されているだけだぞ」

「あんたまで……そんなことを言うのか、師匠……」

天塚が殺気立った瞳でニーナを睨め上げた。

しかしニーナは、そんな天塚の視線を優しく受け止める。

「人間であるか否かを決めるのは肉体ではない。魂の在り様だ。妾もそこの吸血鬼も、人間としての身体は失ったが、それでも人間らしく生きようと足掻いておる。主が〝賢者〟に従

う理由などないのだ」

「理由……僕が……従う理由は……」

脱力した天塚の左手から、黄金の髑髏が離れて落ちた。

それは甲板の上に転がって、鈍い金属の響きを立てる。

カタカタと髑髏が震え出したのは、その直後のことだった。

『カ……カカ……カカカカ……』

黄金の髑髏が振動して、笑い声に似た奇怪な音を放ち始める。

ニーナが不審そうに眉を上げた。天塚は放心したように髑髏を見つめている。

古城たちにはなにが起きているのかわからない。髑髏が放つ奇怪な笑声に、禍々しい気配を感じるだけだ。

『カカカカカカ……不完全なる存在たちよ。もう遅い』

そして今度こそはっきりと、自らの意志をもって髑髏が語った。古城たちの頭蓋骨に直接響いてくるような不快な声だ。

「……〝賢者〟!?」

ニーナが怯えたように周囲を見回して叫ぶ。古城は双頭の龍を実体化させたまま、彼女を押しのけるようにして前に出た

「あの黄金の頭蓋骨が〝賢者〟なのか、ニーナ!? だったら、あんなもの――」

空間ごと消滅させてやる、と眷獣に攻撃を命じかけたそのとき、古城は気づいた。

黄金の髑髏の口蓋に、凄まじい熱量が収束されている――!

「――〝獅子の黄金〟!」

新たな眷獣を喚び出したのは、吸血鬼の本能が成せる業か。

雷光をまとう巨大な獅子が、古城たちの前に実体化するのと、黄金の髑髏が閃光を放つのはほぼ同時だった。

閃光が古城たちの視界を白く染めた。爆音が船を震わせる。

大気の振動が肌を打ち、鼓膜が痛みを訴えた。間近に落雷があったような衝撃だ。

しかし古城たちに怪我はない。フェリーの船体へのダメージも軽微。

黄金の髑髏が放った灼熱の奔流を、雷光の獅子が弾き飛ばしたのだ。

生々しく空気に残る熱気とオゾン臭だけが、攻撃の凄まじさを物語っている。

「先輩……これは……!?」

「重金属粒子砲ってやつか……くそ……!」

黄金の髑髏の攻撃は、絃神島の埠頭に残されていた痕跡と同じものだ。膨大なエネルギーを投入し、荷電した重金属粒子を高速で撃ち出すビーム兵器。魔力を帯びた攻撃ではないため、雪菜の槍でも防げない。

だが、古城の〝獅子の黄金〟が、同じく膨大な電流を操る眷獣だったのは幸いだった。雷光

の獅子が撒き散らす電磁場は、粒子ビームを拡散させて無力化するからだ。

しかしそれは言い換えれば、〝賢者〟の攻撃は第四真祖の眷獣でなければ防げない、ということでもある。まさしく人工の〝神〟の名に相応しい、とてつもない化け物だ、が、

「違う……」

「え？」

ぼそり、とニーナが洩らした呟きに、古城は困惑の視線を向けた。

「違うぞ、古城。あれは〝賢者〟ではない！　もしあんなものが〝賢者〟だと言うのなら、〝賢者の霊血〟はどこにある!?」

「――あ!?」

甲板に転がる小さな髑髏を見て、古城は絶句した。そこにあるのは髑髏だけ。〝賢者〟の肉体のほんの一部に過ぎなかった。人工の〝神〟の血肉となるはずの液体金属生命体は、一滴たりとも含まれていない。

「まさか！」

雪菜が自分の足元へと目を向けた。損傷したフェリーの船体の、その更に下――

「〝賢者〟がこの船を狙ったのは……わたしや夏音ちゃんが目的ではなくて……！」

「海水か！」

ニーナが驚愕の叫びを洩らした

彼女たちのその反応で、古城もうろ覚えの知識を思い出す。どこかで聞いたことがある。海水中には〝金〟や〝ウラン〟などの貴金属が含まれている、と。その総量は数十万トンとも数千万トンともいわれている、と。いずれにせよ人工島に備蓄されている程度の貴金属など比較にならない膨大な量だ。だから〝賢者〟は海を目指したのだ。

海水中の貴金属の濃度はあまりにも微量で、効率よく回収する技術は、いまだに確立されていないという。だが〝賢者〟が、ありあまる魔力で錬金術を行使したなら――

絃神島からここまでの航海の間、彼が、船底に潜んでかき集めた貴金属の量は相当な量になるはずだ。おそらく〝賢者〟完全復活の供物としても十分なほどに。

『カカカカカ――世界よ、完全なる我の一部となれ』

フェリーの船体を貫いて、海中から巨大な〝賢者の霊血〟の塊が浮上する。

それは甲板に落ちていた黄金の髑髏を呑みこんで、ついに完全な人の形を得る。

全高六、七メートルにも達する巨人の形を――

「させるか――！」

古城が眷獣に攻撃を命じるのと、黄金の巨人が閃光を放つのはほぼ同時――

そして巻き起こった凄まじい爆発は、フェリーの船体を呆気なく二つに引き裂いた。

3

「うっ……く……」

柔らかな深紅の液体に包まれて、雪菜は意識を取り戻す。

瞼を開けると、破壊された甲板の裂け目と青空が見えた。その裂け目から船内に落下して、気を失っていたらしい。

周囲には粉塵が舞っている。破壊された船体にもまだ熱が籠もっている。気絶していたのは、せいぜい二、三分ほど。爆発からほとんど時間が経っていないはずだ。

にもかかわらず、周囲の状況は一変していた。

フェリーの船体は、船首から四分の一ほどの位置で前後に裂けているらしい。船体の後方に避難した生徒たちはおそらく無事だろうが、このままでは船が沈むのは時間の問題だ。

それに〝賢者〟の動向も気にかかる。〝賢者〟と正面から激突した古城のことも――

「先輩――！」

雪菜はハッと我に返って上体を起こした。

五感は正常。肉体にもほとんどダメージはない。銀色の槍もしっかり握ったままだ。甲板から七、八メートルは落下したはずだが、深紅の液体がクッションになってくれたらしい

「これは〝賢者の霊血〟……？　ニーナさん？」

その液体の正体に気づいて、雪菜は困惑する。

おそらく古城と〝賢者〟の激突の瞬間、ニーナは自らの肉体を液体金属に戻して雪菜たちを庇ってくれたのだ。雪菜が無傷でいられたのはそのおかげだろう。

しかし雪菜の呼びかけにニーナは答えない。そのことが雪菜を不安にさせる。

「夏音ちゃん……？　よかった……」

雪菜のすぐ隣には、気絶した夏音の姿もあった。

彼女にも目立つ外傷はない。雪菜と同様、爆発のショックで気絶しただけだ。夏音の呼吸音に異常がないことを確かめて、雪菜は胸を撫で下ろす。

そして次の瞬間、雪菜は安堵から絶望へと突き落とされることになる。

「せん……ぱい？」

甲板の裂け目から射しこむ光の中に、古城の後ろ姿が見えた。眷獣を解き放った姿勢のまま、彼は動きを止めている。身じろぎもせずに動きを止めている――

「先輩!?　しっかりしてください、先輩！」

雪菜は彼の傍に駆け寄って、そして呆然と言葉をなくした。

そこにいたのは古城ではなかった。古城の姿をした鉛色の彫像だ。

なにが起きたのか、想像するまでもなく明らかだった。天塚永の攻撃だ。古城が〝賢者〟に気を取られた一瞬の隙を衝いて、天塚は古城に物質変成をしかけた。不老不死の吸血鬼の真祖を、金属に変えることで無力化したのだ。

「そん……な……先輩……」

雪菜は古城の足元にへたりこむ。

これまでにも雪菜は何度となく、古城が致命傷を負う現場を目撃している。そのたびに彼は何事もなかったかのように復活してきた。すべては真祖の持つ異様な再生能力の賜物だ。

〝旧き世代〟の吸血鬼ですら即死するレベルの重傷を負っても、真祖は死なない。なぜなら、それは呪いだからだ。神々にかけられた不死の呪い――

しかし今の古城の状態は違う。古城は殺されたわけではない。ただモノに変わってしまっただけだ。自ら動くことも考えることもできない。金属の塊にされただけ。

殺されなければ、生き返ることもない。

馬鹿馬鹿しいほど単純な理屈だ。だが単純であるからこそ、その理屈に抜け道はない。そして古城は、このまま金属製のオブジェとして永遠に生きるのだ。

「そんなこと――」

雪菜は唇を噛みながら、銀色の槍を握りしめる。魔力を無効化する〝雪霞狼〟ならば、今の古城を救えるかもしれない。神格振動波は古城の肉体をも傷つけるが、古城は前にその傷から復活したことがある。生身の身体に戻ってくれれば、彼を救うことができるはずなのだ。

「どうして!?」

しかし、光り輝く槍の穂先を押しつけても、古城の姿に変化はなかった。彼は鉛色の塊と化したまま動かない。再生が始まる気配もない。

力を失った雪菜の手から、銀色の槍が滑り落ちて足元に転がった。

「……ひとたび物質変成によって金属に変えられたものには、もはや魔力は働いておらぬ。たとえその槍が魔力を無効化するとしても、元の姿に戻すことはできぬ。そこにいる古城は、吸血鬼ではなく、古城の形をしただけの金属だ」

放心する雪菜の耳に、途切れ途切れの小さな声が聞こえてくる。雪菜はのろのろと振り返る。そこには上半身だけになったニーナの姿があった。彼女の胸元の深紅の宝石は、ひび割れて半分に欠けてしまっている。〝賢者〟の攻撃で、やはり彼女も傷ついていたのだ。

「……一瞬だが、古城が船を霧にして粒子砲の直撃から救ったのだ。主の友人たちを護るために。だが、おかげで古城自身は、直後の天塚の攻撃から逃げられなかった」

そこまで告げたところで、ニーナの身体が砕けた。劣化した液体金属生命体が、人間の形を保てなくなったのだ。

「……妾の力では、主と夏音を護るだけで精いっぱいであった。すまぬ……」

最後にそれだけ言い残して、ニーナの言葉が途切れた。彼女の声はもう聞こえない。

〝賢者〟は、古城の攻撃で飛び散った自身の破片を回収し終えたようだった。あと数分も経たないうちに、活動を再開するだろう。

雪菜は落とした槍に手を伸ばす。だが、再びそれを拾い上げるだけの力はない。

どのみち〝雪霞狼〟では〝賢者〟の攻撃は防げないのだ。雪菜一人残されて、いったいなにができると言うのだろう。

それにこのフェリーの船体は、すでに真っ二つに引き裂かれている。

船首部分に取り残され、しかも下層に落下したこの状況では、救命艇に乗りこむこともままならない。たとえ〝賢者〟が見逃してくれても、雪菜には生き残る術はない――

「え……？」

そこまで考えたところで、雪菜はなにかがおかしいことに気づいた。

そう。このフェリーは真っ二つに引き裂かれているのだ。なのに、なぜ、まだ沈んでいない？　いまだ沈み始める気配すらないのはなぜだ？

「氷!?　海が凍りついて船を支えて……!?」

立ち上がった雪菜は、船体の裂け目から外をのぞき見て絶句した。フェリーの周囲の海面が、半径数百メートルほどにわたって氷結していた。この船は即席の氷山の上に乗っているのだ。

凍結魔法――だが、これほどの凄まじい現象を引き起こせる魔術師や魔族の存在など聞いたことがない。

否。たったひとつだけ例外がある――世界最強の吸血鬼、第四真祖の眷獣だ。

……錬金術師どもが創り出した屑鉄を相手に無様な姿だな、少年」

呆然と立ち竦んでいた雪菜は、聞き慣れた少女の声に振り返る。

声の主は暁凪沙。だが、超然とした非人間的な口調は明らかに別人のものだった。

どこからともなく現れた凪沙が、金属と化した古城のほうへと近づいてくる。

髪を解いた彼女は普段よりもずいぶん大人びて、ゾッとするような色香を放っている。

「だが、最後までこの娘を護ろうとしたことは褒めてやろう」

凪沙の細い指先が、動かない古城のおとがいに触れた。そして彼女は唇を吊り上げて笑う。

「それに免じて少しだけ力を貸してやる。目を覚ますがいい、水精――」

そう言って凪沙は古城の唇に、自分自身の唇を重ねた。

雪菜は瞬きを忘れてそれを見つめる。驚きのあまり息もできない。傍にいる雪菜の存在すら、今の凪沙の目には映っていないらしい。

どこか淫靡な長いキスのあと、凪沙は古城からそっと離れた。そして、

「え!?」

金属と化していたはずの古城が、一瞬で生身の肉体を取り戻す。
そうなることが最初からわかっていたのだろう。凪沙は古城の復活を見届けることもなく、再び背中を向けて去っていく。しかし雪菜は、彼女を呼び止めることができなかった。
唐突に凄まじい魔力が大気に満ちて、フェリーの船体を揺らし始めたからだ。
「せ、先輩!?」
魔力の源は古城だった。生身の身体を取り戻した彼が、無差別に魔力を撒き散らし始めたのだ。圧倒的に巨大で、破壊的なまでに濃密な魔力の波動を
「まさか、第四真祖の血に自我を乗っ取られて……!?」
古城の暴走の原因に気づいて、雪菜がうめいた。
凪沙に憑依していた〝彼女〟は、おそらく古城の中の新しい眷獣を覚醒させたのだ。しかし無理やり叩き起こされたことで、眷獣は怒り狂っている。古城をまだ完全には、宿主と認めていないのだ。
「駄目です、先輩！　目を覚まして！」
爆発的な魔力の奔流に圧倒されながら、雪菜が叫んだ。このまま古城が眷獣を制御できなければ、どれだけの惨事が起きるかわからない。今の古城と〝賢者〟がまともにぶつかったら、このフェリーが消滅する程度では済まないだろう。最悪、海底の地殻にまで影響が及ぶ可能性もある。

「くっ……！」
迷っている暇はもうなかった。雪菜は〝雪霞狼〟を握りしめる。そして鋭く研ぎ澄まされた銀色の穂先を、古城の心臓へと向けた。
第四真祖の魔力がどれほど凄まじくとも、雪菜の槍はそれを斬り裂いて古城に届く。
「――先輩！」
ごめんなさい、と口の中だけで呟いて、雪菜は槍を一閃した。
巨大な魔力の奔流が、一瞬途切れた。その刹那の間隙を縫って、雪菜は古城の懐へと飛びこんだ。無防備に立つ古城の背中に腕を回して、唇と唇を押しあてる。そこから彼の中に流しこんだのは血液だった。唇を噛み切って含んでおいた、雪菜自身の鮮血だ。
古城が吸血鬼の力を暴走させているというのなら、わずかな刺激を与えるだけで、彼の吸血衝動も呼び覚ますことができるはず。眷獣に意識を乗っ取られた古城を覚醒させる方法を、雪菜はほかに思いつかない。しかし、古城の欲望が眷獣の怒りに打ち勝つことができれば――
「えっ……!?」
ある程度予想はしていたが、古城に起きた変化は劇的だった。
荒々しく抱きしめられて、雪菜の息が止まった。そして無抵抗になった雪菜に、再び唇を重ねてくる。雪菜の血を一滴残らず味わい尽くそうとするような、長い長いキスだった。
ぞくりとした感覚が背中を這い上がり、強張っていた雪菜の全身から力が抜けていく。

そんな雪菜の匂いに惹かれたように、古城が彼女の首筋へとむしゃぶりついた。

「あ……」

雪菜の口から声が洩れた。仰け反る彼女の白い首筋に、古城が牙を押し当てたのだ。

痛みと恐怖に雪菜が震える。それでも彼女は古城の背中に手を回し、精いっぱいの微笑みを浮かべて彼の耳元に囁いた。

「先輩……お願い……ですから、早く……」

その囁きに誘われるように、古城が雪菜の中に牙を埋めていく。

きつく目を閉じていた雪菜の唇から、やがてかすかな吐息が洩れる――

4

意識を取り戻した古城が見たのは、変わり果てた世界の姿だった。

フェリーの船体は引き裂かれ、凍りついた海面がその周囲を覆っている。船内に残されていたのは砕け散ったニーナの〝錬核〟――

そしてなぜか頬を上気させた雪菜が、古城の腕の中にぐったりと倒れこんでいた。

「姫柊……!?」

古城は激しく狼狽しながら、彼女の耳元に呼びかける。なぜこんな状況になっているのかは

わからないが、自分がなにをしたのかは薄々想像できた。
喉の奥には今もまだ、雪菜の体液の余韻が残っている。その事実が異様に後ろめたい。
自分が魔力を暴走させたことも朧気に憶えていた。そして自分が新たな眷獣の支配権を手に入れたことも――
「よかった……です。いつもの先輩に戻ってくれて……」
古城に体重を預けたまま、雪菜がゆっくりと目を開けた。うろたえている古城を見上げて、安心したように息を吐く。
彼女の甘い髪の匂いに鼻腔をくすぐられて、古城は軽く途方に暮れた。腕の中にいる雪菜の肩は、信じられないくらい華奢で細かった。力を入れると壊れてしまいそうで迂闊に触れない。だが、古城の暴走を止めてくれたのも彼女だったのだ。
「……悪い。また姫柊に世話をかけたのか」
溜息混じりの古城の呟きに、はい、と雪菜が悪戯っぽく微笑する。
「先輩は本当にいやらしい吸血鬼ですね。でも、おかげで今回は助かりました」
「う……」
声をくぐもらせて古城がうめく。まともな記憶がないせいで、雪菜の言葉を否定できない。だが今はそれを気にしている場合ではなかった。〝賢者〟はまだ生きている。そしてフェリーの乗客たちは、この瞬間も命の危機にさらされているのだ。

「そうだ……叶瀬は!?」
古城が、腕の中に抱いたままの雪菜に訊いた。その古城の背後から控え目な声がした。
「あの……私はここでした」
振り返る古城が目にしたのは、なぜか正座して怖ず怖ずと手を挙げている夏音の姿だ。真っ赤に染まった夏音の頬が、彼女が目撃してしまったものを雄弁に語っている。
「夏音ちゃん……!?」
「か、叶瀬!? み、見てた……のか？」
雪菜と古城が、上擦った声で夏音に訊いた。
よりによって血を吸う瞬間を夏音に見られてしまった。どう考えてもバレバレとはいえ、いちおう吸血鬼であることを隠している身の古城としては、やはり動揺を隠せない。
しかし夏音の反応は、古城たちの予想とは少し違うものだった。
「凄かった……です。雪菜ちゃんは大人な感じ、でした」
そう言って夏音は恥じらいと、かすかな憧れのこもった声を出す。
雪菜が、ええっ、と表情を強張らせ、
「ち、違うの。さっきのはそういうことではなくて」
「大丈夫です。誰にも言いません」
「だからっ！」

「――細かい話はあとにせよ！　時間がない。〝賢者〟が再生を終えるぞ」

言い争う雪菜たちを見かねたのか、ニーナ・アデラードが叫ぶ声がした。残されたわずかな〝霊血〟の残滓を集めて、どうにか肉体の一部を再生していたのだ。つまりニーナの〝錬核〟はまだ生きているということだ。

その直後、古城たちの頭上から黄金の光が飛来した。〝賢者〟の重金属粒子砲だ。しかし古城は左腕の一閃だけで、その攻撃をかき消した。

上空の〝賢者〟を睨む古城の全身から、凄まじい魔力が放たれている。掌握した新たな眷獣が、古城に力を与えているのだ。

「叶瀬、ニーナのことを任せていいか？」

古城が気負いのない声で夏音に依頼する。夏音は微笑みながらうなずいて、再生途中のニーナを膝の上に抱き上げた。

「……古城……主は……」

ニーナが古城の背中を見上げて不安げな声を出す。錬金術師が秘術を尽くして生みだした、人工の〝神〟――〝賢者〟の恐ろしさを、彼女は誰よりもよく知っているのだ。

しかし古城は、禍々しい覇気を撒き散らし、不敵に微笑んで牙を剝く。

「大丈夫だ。二百七十年続いたあんたの悪夢は、あの金ピカをぶっ壊して、ここで終わらせてやるよ。ここから先は、第四真祖の戦争だ　！」

そんな古城の隣に寄り添うように、小柄な影が歩み出た。

銀色の槍を構えた雪菜が、引き裂かれた甲板の上を見つめて言い放つ。

「――いいえ、先輩。わたしたちの、です」

彼女が睨みつけた視線の先には、満身創痍の天塚汞が立っていた。すべての目的を失った彼の瞳には、ただ古城たちに対する憎悪だけが浮かんでいる。

空中に浮かぶ黄金の巨人が、カカ……と世界のすべてを嘲るように笑い出す。

それが戦いの始まりを告げる合図だった。

5

〝賢者〟の身長は、すでに十数メートルにも達していた。

形こそ人間と酷似しているが、彼の肉体には目も耳もない。滑らかな曲線に覆われた全身は、美術室に置かれたデッサン素体のようだ。しかし黄金比で構成されたシルエットは、それでも異様に美しく感じられた。

彼の全身のあちこちには、ニーナの〝錬核〟によく似た球体が埋めこまれ、眼球のように動きながら地上を冷ややかに睥睨している。

そして骸骨のように大きく開いた口の中には、黄金の光が炎のように渦巻いていた。

『カ……カカ……カカカカ……愚か……抵抗するか、不完全なる存在たちよ』

荷電粒子の輝きが、哄笑する彼の口から放たれた。

古城が召喚した雷光の獅子が、その粒子ビームの閃光を撃ち落とす。

「――黙れよ、金ピカ」

〝賢者〟は自らの腕を巨大な刃へと変形させて、半壊したフェリーの船体へと叩きつけた。

それを受け止めたのは、緋色に輝く双角獣だ。爆発的な衝撃波を撒き散らし、無数に増殖する〝賢者〟の触手を蹴散らしていく。

「おまえには同情してやるよ。わけもわからないまま、完全な存在として創り出されて、その挙げ句に全身の血を抜かれて封印されちまったんだもんな。勘違いしたまま育つのも無理はねーよ。普通ならもっと早く気づくはずのことに、二百七十年も気づかないままなんてな」

鮮血の霧を全身にまとわりつかせて、古城は荒々しく吐き捨てた。

〝賢者〟の全身の眼球が、ギョロギョロと回転して古城を見る。

『カ……カ……理解らぬ。不完全なる存在の不完全な理屈を我は理解できぬ』

「簡単な話だろうが。おまえは完全とはほど遠い存在だって言ってんだよ」

ハッ、と古城は〝賢者〟を哀れむように笑う。

「いくら口からビーム吐こうが、不滅の肉体を持ってようが、その力でおまえはなにをした？　誰がおまえの存在を認めてくれたんだ？　どうしてその〝完全〟な力を、ほかの誰かのために

使おうとしなかった？　そんな簡単なことも理解らない〝不完全〟な存在だから、おまえは封印されたんだろうが――！」

『カカ……理解らぬ。理解る必要も認めぬ。我は唯一完全なる存在であるがゆえに』

〝賢者〟が、古城の言葉を振り払うように激しく首を振る。その姿は、まるで駄々をこねる無知な子どものようだった。

「ああ、そうかよ。だったらおまえが世界の中心じゃないことを、力ずくで教えてやるよ！」

古城の瞳が真紅に染まり、黄金の巨人を睨めつける。更に二体の新たな眷獣が出現し、その咆吼が凍てついた海面を揺るがした。

その凍った海の上では、獅子王機関の剣巫が天塚と睨みあっている。

液体金属の触手がしなやかな刃と化し、亜音速で雪菜へと殺到した。しかし銀色の槍が描く美しい軌跡が、その攻撃をことごとく撃ち落としていく。

魔力を断つ〝雪霞狼〟に斬り裂かれた天塚の触手は、単なる金属の薄片となってパラパラと氷の上に舞い散った。

「……自分が利用されているだけだと知って、まだ戦う気ですか？」

雪菜が静かに彼に問いかける。天塚汞と名乗っていた金属生命体は、破壊された触手を無理やり再生しながら、虚ろな笑みを浮かべてみせた。

「悪いね。ほかになにをすればいいのか、わからなくてさ」

「天塚汞……あなたは、もう……」

彼の襟元を見て、雪菜が目を眇める。天塚の胸に埋めこまれた黒い宝石は、激しく損傷して、ほとんど原形を留めていなかった。わずかに身じろぎするだけで、砕けた破片がこぼれていく。

「恐いんだ……僕が、僕でなくなるのが……僕はいったい誰なんだ？　なんのために生まれて、なにをすればいい!?」

天塚が激しく吼えながら、自らの右腕を爆散させた。弾け飛んだ無数の破片が、散弾のように雪菜を襲う。その攻撃をかいくぐりながら、雪菜は、わからない、と首を振る。

「たぶん……その答えを探し続けるのが、人間として生きるということです！」

「……っ！」

絶え間ない天塚の攻撃が、わずかに途切れた。その瞬間を見逃すことなく、雪菜の唇が静かな祝詞を紡ぐ。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

雪菜の体内で膨れあがった呪力を、〝雪霞狼〟が増幅。穂先が放つ眩い輝きが、天塚の肉体をボロボロと崩壊させていく。

「そうか……僕は……」

その純白の光に包まれながら、どこか柔らかな表情で天塚が呟いた。

彼は〝賢者〟のために働く必要などなかった。大勢の人々を傷つけ、犠牲にしてまで、人間の肉体を求める必要などなかったのだ。人間でありたいと願った瞬間から、彼はすでに人間でいられたのだから。彼自身がそのことに気づいてさえいれば――

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

天塚の最後の攻撃をすり抜けて、雪菜の攻撃が彼の胸を貫いた。傷ついた黒い宝石が、今度こそ完全に砕け散る。かつて天塚だったものは、その瞬間、形を失って砂のように崩れ落ちた。残ったのは、光をなくした宝石の欠片だけだった。

雪菜はそっと溜息をついて、そして頭上を振り仰いだ。

「先輩……！」

第四真祖と〝賢者〟の戦いは今も続いている。

「――疾く在れ、〝獅子の黄金〟！　〝双角の深緋〟！」

雷光の獅子と、緋色の双角獣が、黄金の巨人と正面から激突する。その衝撃は海面を割り、大気を不安定にさせていた。もしもこの戦闘が市街地で行われていたなら、周囲には凄まじい被害が出ていたことだろう。

「〝甲殻の銀霧〟！　〝龍蛇の水銀〟！」

占城は手持ちの眷獣のすべてを召喚して、〝賢者〟を押さえつけていた。重金属粒子砲は雷光の獅子が、黄金の肉体による物理攻撃は双角獣と甲殻獣が無効化する。

しかし〝賢者〟を斃す決定的な力が足りない。

再生と増殖を繰り返す黄金の金属生命体を消滅させられるのは、空間ごと敵を喰らう双頭龍のみ。だが、一度に喰らい尽くすには、〝賢者〟の肉体は成長しすぎていた。

黄金の肉体は自在に形を変えて、双頭龍の顎から逃れようとする。だからといって周囲の空間を丸ごと削り取ってしまったら、周囲にどれだけの影響が出るか予想もつかなかった。少なくとも発生した巨大な空間の亀裂が、フェリーを呑みこんでしまうのは確実だろう。

結果として〝賢者〟と古城の戦いは、膠着状態に陥ってしまっている。

『カ……カカ……なぜ逆らう、不完全な存在よ……なぜ我が完全なる世界の一部になることを拒む？』

海水から抽出した貴金属を錬金の代価にして、〝賢者〟は力を無限に増していく。こうやって彼は世界のすべてを取りこんで、自分以外の存在を消滅させてしまうのだろう。このフェリーに固執しているのは、いまだに彼が夏音たちの強い霊力を供物として欲しているせいか。

第四真祖の眷獣四体と互角に戦う〝賢者〟の姿は、まさしく〝神〟の名に相応しいものだ。

それでも古城の戦意に衰えはなかった。むしろ古城が撒き散らす膨大な魔力は、更に勢いを増していく。

「言っただろ、おまえは完全なんかじゃないって」

黄金の巨人を蔑むように眺めて、古城は挑発的に笑う。

「おまえが言うとおり、俺は不完全なんだろうさ。だったら、その俺にも勝てないおまえは、不完全以下だな」

〝賢者〟の眼球が回転し、一斉に古城を睨めつけた。もしかしたら傷ついたのかもしれない。そう思えるほどに大げさな反応だ。

『あり得ぬ……そのような矛盾は完全なる我にあってはならぬ……！』

明らかな怒気の籠もった声が大気に満ちる。そんな〝賢者〟の安っぽい自尊心を、古城はバッサリと切り捨てた。

「そうやって、てめえに都合の悪いものを排除し続けて護った完全さになんの価値がある？」

『カカ……緘黙せよ！　完全なる我の命に従い、緘黙せよ！』

古城はもはやなにも語らない。激昂する黄金の巨人に向けて、ただ左腕を突き上げるだけ。その腕から噴き出した鮮血が、爆発的な魔力を帯びて青白く発光した。

「焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――」

閃光の中から出現したのは、水流のように透きとおった肉体を持つ新たな眷獣だった。美しい女性の上半身と、巨大な蛇の下半身。流れ落ちる髪も無数の蛇。

青白き水の精霊――水妖だ。

「疾く在れ、十一番目の眷獣、〝水精の白鋼〟――！」

水妖の巨大な蛇身が、爆発的な激流となって加速した。鋭い鉤爪を備えた繊手が〝賢者〟

の頭部を鷲づかみに握りつぶし、そのまま海中へと引き摺りこむ。

第四真祖の十一番目の眷獣は水の眷獣。この莫大な量の海水すべてが彼女の肉体なのだ。自在に姿を変える〝賢者〟の液体金属の肉体も、この水妖からは逃げられない。そして――

「カカカ……カ……カ……馬鹿な……馬鹿な……我が消える……完全なる我の肉体が！」

水妖の中に閉じこめられた〝賢者〟が、黄金の腕を伸ばして苦悶した。

強酸の中に浸された金属片のように、彼の肉体が溶けていく――

だが、古城の眷獣は〝賢者〟を破壊しているわけではなかった。その逆だ。錬金術によって生み出された肉体が、元の金属に姿を変えて、母なる海と大地へと還りつつあるのだ。あたかも母胎に包みこまれた、生まれる前の胎児のように――

「これは……再生……!?　吸血鬼の超回復を象徴する癒しの眷獣……!?」

海中に沈んだ〝賢者〟の姿を見つめて、雪菜が呟く。

第四真祖の十一番目の眷獣、〝水精の白鋼〟は再生と回復の眷獣だ。あらゆる存在を癒やして、本来あるべき姿に戻していく。

「だけど、これは……」

その凄まじい威力を間近に見せつけられて、雪菜はぞくりと全身を震わせた。

癒しといっても、あの水妖は傷を治しているわけではない。まるで時間を巻き戻すように、出現する以前の姿へと還しているのだ。生物を生まれる以前の姿に。強固な城壁を土塊に。高度な都市を不毛の荒野に。優れた文明を原始以前に――

それはむしろ癒しという言葉からはほど遠い。すべてを無に還す破壊の力だ。

やはりあの美しき水妖も、災厄の化身たる第四真祖の眷獣なのだ。

『カ……カカ……理解……理解した……』

ついに髑髏だけとなった〝賢者〟が、最後に呟く。その黄金の髑髏もまた、青白い水の中に溶けこんで消えていく。

『……その力は……カ……と戦うための……」

彼の最後の言葉は声になることなく、泡となって消滅した。

あとには静かに凪いだ海面だけが残された。

6

戦闘を終えた古城は、破壊されたフェリーの船体にぐったりともたれていた。そんな彼に、槍を提げた雪菜が重い足取りで近づいていく。

〝賢者〟との戦いの苛烈さにもかかわらず、凍りついた海面は無事だった。これならば救助の船が到着するまで、フェリーの乗客に危険はないだろう。

フェリーの事故の原因は、季節外れの流氷との激突ということで処理されるはずだ。事情を

知らない乗客たちも、おそらくそれで納得するだろう。この巨大な氷原を造り出したのが、たった一体の眷獣の仕業だと信じる者はいないからだ。

凪沙に憑依していたあの眷獣の正体は気にかかる。それに古城が掌握した新たな眷獣のことも。金属化した古城を救ったのは、あの水妖の癒しの力だろう。時間を巻き戻すような彼女の再生能力ならば、物質変成された古城の肉体を修復することも容易だからだ。

そしてあの氷の眷獣は、最初からそれを知っていた。だから水妖を目覚めさせたのだ。

だが、今の雪菜には、〝彼女〟の正体を確認する手段がない。

それに、その前にやるべきことが、まだほかにある。

「先輩」

雪菜が古城に呼びかけると、彼は気怠そうに顔を上げた。さすがに力を使いまくって疲れたのか、どことなくやさぐれた雰囲気だ。

「姫柊、怪我は？」

「大丈夫です。傷ももう塞がりましたから」

噛まれた首筋を押さえながらそう言うと、古城は居心地悪そうに視線をあさっての方角に向けた。そして、その場にずるずると倒れこむ。

雪菜は慌てて彼の隣に駆け寄った。

「……先輩!?　大丈夫ですか？　まさか、さっきの金属化の後遺症が……!?」

「ああ、違う違う。ただの寝不足だ」

古城は面倒くさそうに手を振りながら目を閉じる。本当にずいぶん眠そうだ。

「昨日ほとんど寝てないからな。ちょっとだけ休ませてもらっていいか？」

「それはちょうどよかったです」

雪菜は小さく溜息をついて、古城の頭を膝の上に抱きかかえた。ちょうど彼を膝枕するような姿勢になる。または彼の頭をがっちりホールドした、ともいえる。

「……え？」

雪菜の態度にどこか不穏なものを感じたのか、古城が不安そうに見上げてきた。

そんな彼に雪菜はにっこりと微笑みかけて、

「先輩が昨日の夜なにをしていたのか、わたしも興味がありましたから。特に先輩がニーナ・アデラードさんと知り合ったいきさつや、彼女が藍羽先輩の姿をしていた理由について」

「え!?」

古城がこめかみに汗を浮かべて目を逸らす。思ったとおり、やはり彼は昨夜のうちから雪菜に隠し事をしていたらしい。

どうせ休暇中の雪菜に心配をかけたくない、などと余計な気を遣っていたのだろう。その気持ちは嬉しいが、結果としてこんなふうに騒ぎを拡大させたのはやはり問題だ。

それに彼はまったくわかっていない。たとえどんな理由があろうとも、古城に隠し事をされ

たら雪菜だって傷つくのだ。そもそも雪菜が、彼を心配しないことなどあり得ないのに、たとえどんなに離れていてもだ。

「いや、それは……そうだ、ニーナは……!?」

古城が強引に話題を変えようと大きな声を出す。

返事は、雪菜たちのすぐ近くから聞こえてきた。

「ここだ。大儀であったな、古城。雪菜もな」

意外に元気そうな声だったが、ニーナはやはり今も夏音に抱えられたままだった。点検用のハシゴを使って、夏音が危なっかしくフェリーを降りてくる。そんな彼女の制服の胸元に、人形のような小さな影が乗っていた。

「礼を言う。おかげでようやく二百七十年の重荷から解放されたわ」

そう言って胸を張るニーナの身長は二十センチ足らず。妖精のようなサイズである。オリエンタルな美貌の見知らぬ女性だが、どことなく浅葱の面影が残っている気がした。

「ニーナ……その恰好は……」

「うむ。気にするな。残った〝霊血〟をかき集めてみたが、人型を保つにはこの寸法が限界であったわ。生活するのに特に不都合はないがな」

そう言ってニーナは、胸に埋めこまれた深紅の宝石を撫でてみせた。

不定型の液体金属製とはいえ、さすがに大雑把すぎるだろ、と古城が呆れている。

「叶瀬のところで世話するつもりなのか？」

「はい。マンションで飼っても大丈夫か、南宮先生に相談してみます」

占城の質問に、夏音は嬉しそうに目を細めてうなずいた。彼女は小動物の飼育をするのが趣味なのだ。ペット扱いするな、と占の大錬金術師が、むくれたように腕を組む。そして、

「ええっ!?」

船体の裂け目から顔を出して、叫んでいたのは凪沙だった。髪はやはり解けたままだが、眷獣に憑依されていたときの冷たい雰囲気はない。いつもどおりの騒々しい少女だ。

「なにこれ!?　古城君!?　どうして古城君がここにいるの!?　この船いったいどうなってるの!?　もしかして本当に氷山にぶつかった!?　ていうか、雪菜ちゃん、膝枕！」

「凪沙ちゃん……!?」

雪菜が慌てて立ち上がる。凪沙には、やはり憑依されている間の記憶はないらしい。いきなり膝枕から投げ出された古城が、後頭部を打ちつけて涙目になっている。

「わ、なにあれ、飛行船!?　おっきい！」

凪沙が空を見上げて言う。水平線近くに浮かんでいたのは巨大な装甲飛行船だ。アルディギアの騎士団が、救助に来てくれたらしい。

「残念だったな、姫柊。せっかくの休暇がこんなことになって」

後頭部を押さえたままの古城が、雪菜を気遣うように言う。

はい、と雪菜は微笑み混じりにうなずいて、
「でも、今回のことでよくわかりました」
そう言って小さな拳を強く握りしめる。
決意に満ちた雪菜の言葉に、え、と古城が不安げな表情を浮かべた。
「やっぱりわたしが少しでも目を離すと、先輩はすぐに危険なことに首を突っこんで、知らない女の人と仲良くなるみたいですね」
「いや、待て。その理屈はなんかおかしいだろ!?」
なんでそうなる、と反論しながら古城が激しく首を振る。
しかし雪菜は、有無を言わさぬ真っ直ぐな瞳で古城を見つめ、
「わたし、反省しました。これからはもっと監視を強化しないと」
きっぱりと言い切る雪菜の言葉に、古城は弱々しく空を見上げた。
「……勘弁してくれ」
世界最強の吸血鬼、第四真祖の溜息が海風に流されて消えていく。

終章
Outro

「ふんふー」

歌うように息を吐きながら、白衣の女性が聴診器を構えている。

三十路を余裕で越えているはずだが、美人というよりは可愛らしいという言葉が似合う童顔の女性だ。だがしかし巨乳である。

長い髪は手入れが悪いせいかぼさぼさで、着ている白衣もしわくちゃだ。控え目にいっても、だらしない系の大人のオーラをぷんぷんと漂わせていた。

「はーい、大きく息を吸って。そうそう、そのままそのまま」

そう言って彼女は、浅葱の胸に聴診器をあてる。ふむふむ、とわざとらしくうなずきながら、続いて喉の奥をのぞきこみ、舌を診る。最後に触診と称して全身ぺたぺたと触りまくったあと、

「特に健康には問題ないかなー。順調に育ってるみたいだし。八二・五七・八二、と……」

「え!?」

正確な数字を言い当てられて、浅葱はビクッと硬直した。相変わらず油断のならないヒトだ、と焦りつつ、慌ててタオルで胸元を隠す。

場所は病院ではなく、暁家のリビングだった。

白衣の女性は暁深森。古城と凪沙の母である。浅葱とも古くからの顔見知りだ。

そして深森は、MAR——マグナ・アタラクシア・リサーチという巨大企業の研究所で働くエリート研究員でもあった。正規の医師免許を持っているというだけでなく、過適応能力者と

呼ばれる〝天然モノ〟の超能力者でもある。彼女はいわゆる医療系の接触感応能力者なのだ。

「ふふ、それにしてもびっくりしたわ。まさか久しぶりにうちに帰ってきたら、浅葱ちゃんが古城くんのベッドで寝てるなんて」

診察器具を片付けながら、深森が愉快そうに微笑んだ。浅葱は恐縮して肩をすぼめる。正直、自分がどうしてそんなところで寝ていたのか、浅葱本人にも思い出せない。

実は古城に、うちまで連れてってやってくれ、と気絶中の浅葱を押しつけられた南宮那月が、言われたとおりに古城のうちまで運んできた、などと知る由もないのだった。

「すみません。昨日の夕方あたりから、ちょっと記憶が途切れ途切れで——」

自分のこめかみに指を当てて、浅葱が頼りない口調で言った。それもあって深森に診察してもらったのだが、彼女の態度を見る限り、身体には特に問題ないようだ。

「うん、大丈夫大丈夫」

そして深森はややタレ目がちの目を細めて、力強く拳を握ってみせる。

「心配しないで。ちゃんと古城君には責任取らせるから」

「いえ、あの、だから、そういうことじゃなくて」

絶対勘違いされてる、と不安に思いながら浅葱が首を振る。

「懐かしいな。あたしも浅葱ちゃんくらいのころには、ちょうど古城君がお腹の中にいたのよね」

「ええっ、そうだったんですか!?」

浅葱はさすがに驚いて声を高くした。二児の母にしてはやたら若いと思っていたら、そういうことか。道理でいろいろと物わかりがいいわけだ。

「浅葱ちゃん、お昼食べてくでしょ」

ふんふーん、と鼻歌を奏でながら、深森がキッチンへと歩いていく。

どうも、と浅葱は頭を下げた。どのみちこの時間からでは学校はサボり決定だし、急いで家に帰る理由もなかった。ここで待っていればそのうち占城も帰ってくるだろう。あの男には、問い詰めたいことがたくさんあるのだ。

そんなことをぼんやり考えていた浅葱は、ふと床の上に散らばっている書類に目を留めた。深森の診察カバンからこぼれ落ちたものだった。

浅葱は何気なくそれを拾い上げて順番を直す。研究所で預かっている患者のレポートらしい。レポートの上部に記載されたプロジェクト名は〝Sleeping Beauty〟——眠り姫。

カラーコピーされた不鮮明な写真には、医療用カプセルの中に横たわる少女が写っていた。逆巻く炎のような、虹色の髪を持つ少女が。

「ああっ……！」

そのとき突然キッチンのほうから、深森の悲鳴が聞こえてきた　浅葱はレポートをカバンに戻し、慌てて深森の様子を見に行った。

「ど、どうしたんですか？」

そこで浅葱が目にしたのは、冷蔵庫の前にぺたんと座った深森の姿だ。

彼女は、世にも情けない表情を浮かべて浅葱を見上げ、

「凪沙ちゃんがひどいんだよ。冷凍庫にピザの在庫がない……！　お腹ぺこぺこなのに！」

「は、はあ」

浅葱は少し困った顔で頭をかく。深森は冷凍ピザしか作れないのだと、占城が嘆いていたことを思い出す。いくらなんでも話が大げさ過ぎるだろうとそのときは思ったが、まさか事実だったとは。

「……浅葱ちゃん、お料理できる人？」

捨てられた子犬のような瞳で、深森が浅葱を見上げてくる。

浅葱は少し思案する。ここらで占城の母親のポイントを稼いでおくのも悪くない。今こそ特訓の成果を見せるときなのかもしれない。

浅葱は不敵に微笑むと、近くにあったエプロンに手を伸ばした。

腕まくりするようなポーズを取って、力強く宣言する。

「まかせてください！」

†

古城たちがマンションに帰り着いたのは、夕方近くになってからのことだった。
定員の都合上、装甲飛行船が救助してくれたのは負傷者だけで、結局、古城たちはあとからやってきた旧式の漁船に拾われて、のんびりと紋神島まで戻る羽目になったからだ。
唯一の救いといえるのは、船の上で獲れ立ての新鮮な魚を食べさせてもらったことか。少々ささやか過ぎるけれど、世界を救った代償としてはまあ悪くない、と古城は思う。
「はー……なんだかすごく疲れたよ。宿泊研修は中止だし、せっかく買ったコートも駄目になっちゃったし。荷物は弁償してくれるって言ってたけど」
エレベーターの壁にもたれて、凪沙が大きく溜息をつく。元気な声色は相変わらずだが、普段よりも少しだけ口数が少ない。宿泊研修の中止を知ってへこんでいるらしい。
古城は、彼女を励ますようにポンと頭に手を置いて、
「あんだけの事故で死人が出なかっただけでもラッキーだろ。下手したら大惨事だったぞ」
「そうだけどー……うー……枕投げー……恋話ー……」
がっくりと肩を落とす凪沙の前で、エレベーターの扉が開く。
凪沙の手を引いてマンションの廊下に出たところで、雪菜が不意に足を止めた。警戒したように周囲を見回し、眉をひそめる。
「……あの、なにか変な臭いがしませんか？」

雪菜に言われて、凪沙が、すん、と子犬のように臭いを嗅いだ。
空気にうっすらと焦げたような臭いが籠もっていることに、古城も気づく。
「わ、本当だ！　もしかして火事!?　って、煙!?」
凪沙が悲鳴混じりに指さしたのは、古城たちの自宅の玄関だった。まるで機関車の煙突のように、玄関横の換気口からもうもうと黒煙が吐き出されている。
「なんで火災報知器が動いてねえんだよ！」
古城が慌てて部屋へと走りだした。その間に雪菜は、廊下に備えつけの消火器を引っ張り出す。暁家の玄関ドアが勢いよく開いたのは、その直後だ。
中から飛び出してきたのは、白衣を着た童顔の女性だった。
「ふんふ？　あ、古城君たち、おかえりなさい」
意外に平静な深森の様子に、古城たちは動きを止める。少し焦っているようにも見えるが、火災現場から逃げてきたという雰囲気ではない。
「……深森ちゃん？」
母親の顔をじっと見つめて、凪沙が困惑の声を出す。
深森は、なぜか救われたような表情を浮かべると、

「ごめんね、あとよろしくー。急なお仕事で出かけなきゃいけなくなっちゃって。本当に急なお仕事で！」

早口でそう言い残して、彼女はバタバタと慌ただしくエレベーターへと駆けこんでいった。

そんな母親の後ろ姿を、古城たちは呆然と見送った。

「なんだあれ……」

軽く途方に暮れながら、古城は自宅へと向かう。

とりあえず火事ではないようだが、部屋の中に謎の煙が充満しているのは事実だ。なんともいえない不吉な煙だった。本能的な恐怖を感じる臭いだ。

そして玄関に辿り着いた古城が目にしたのは、包丁を手にしたエプロン姿の浅葱だった。

「あれ？　古城？　早いわね、あんた学校は？」

なぜか逆手に包丁を握ったまま、浅葱がきょとんと訊いてくる。

古城は呆然とその場に立ち尽くして、

「あ、浅葱!?　おまえ、なにやってんだ？」

「見ればわかるでしょ。料理よ、料理。ちょうどよかった。深森さんに頼まれてご飯作ってたんだけど、その深森さんが出かけちゃって困ってたのさ。ほら、余るともったいないし」

「あ……！」

慌てて職場に戻った深森の姿を思い出して、古城が顔をしかめた。あの無責任女は、浅葱を

煽るだけ煽って、逃げ出したのに違いない。

青ざめている古城に気づいて、浅葱が笑う。

「安心して。料理って言ってもただのサンドイッチだから。失敗することはない、って棚原が言ってた。パン切って具材を挟むだけだし」

「そ、そうか……」

古城はぎこちなくうなずいた。

部屋中に異臭と黒煙が充満している時点で、すでになにか失敗しているような気がして仕方ない。エプロン姿の女子高生を見ても、まったくときめかないのはどうしてなのか。

「よ、よかったね、古城君。浅葱ちゃんの手料理なんて、貴重だね」

凪沙が泣き笑いのような表情で声を震わせた。

雪菜は音もなく後ずさりながら、感情の籠もらない事務的な口調で、

「あの、先輩。それではわたしはこれで……」

「駄目だよ、雪菜ちゃん。敵前逃亡は重罪だよ」

背中を向けようとした雪菜の細い手首を、凪沙ががっちりと握りしめる。

「そんな……ここで体調を崩すと、監視役の任務に支障が……」

雪菜が懸命に言い訳する。しかし凪沙も必死である。犠牲者が一人増えれば、一人あたりの負担は減る。うまくすれば致死量は免れるかもしれないのだ。

まあいいか、と諦観しながら、古城は異臭漂うキッチンへと足を踏み入れる。
とりあえずなにがあっても、死ぬことだけはないだろう。
暁古城は第四真祖。不死身の吸血鬼なのだから――

こうしてまた〝魔族特区〟絃神島の午後が過ぎていく。
傾きかけた太陽に照らされて、人工島を取り巻く海面が、眩い黄金の色に輝いている――

あとがき

基本的に自分で操縦できない乗り物はあまり好きではない私ですが、なぜか船だけは例外で、たまに無性に乗りたくなります。特に長距離フェリーが好きです。ぼけーっと海を眺めたり、ごろごろしたり、のんびり風呂に浸かったりしてるだけで離れた土地に移動できるというあの謎のお得感。揺れたり、機関音がうるさかったりするのも、巨大なメカニックの内部にいる実感が湧いていい感じ。あと船酔いしたときには股間に冷水をぶっかけると治ると聞いたことがあるのですが、残念ながら自分で試したことはありません。仮に船酔いが治ったとしても、その方法では、人間としてもっと大事なにかをなくしてしまうような気がしますが。

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド6』をお届けしております。

前巻までの波朧院フェスタ編と比較して、今回は日常パート多めのあっさりしたエピソードを目指してみたのですが、果たして上手くいったかどうか。個人的には普段なかなか描けない中学生組を活躍させられたのが楽しかったです。あとは浅葱がいつにも増して不憫な扱いで正直すまんかった、とか。ともあれ少しでも楽しんでいただければ幸いです。

今回は錬金術師の話です。夏音が暮らしていた修道院には〝伝令使の杖〟の紋章がある、ということを以前ちらっと書いたことがあるのですが、そのあたりの事情について説明しなきゃなー、と思ってるうちにズルズル時間が経ってこんなタイミングになってしまいました。ほかにもいくつか未回収の伏線があるのですが、それについてもぼちぼち描いていければと思っております。しばしお待ちを。

そして前巻でお知らせしたコミカライズ版『ストライク・ザ・ブラッド』ですが、めでたく単行本一巻が発売になっています。TATE先生お疲れさまでした、ありがとうございます。原作を忠実に再現していただきつつも、原作以上に心理描写が細やかで、女の子たちを非常に可愛く描いてもらっております。『月刊コミック電撃大王』誌上での連載も続いているので、こちらもなにとぞよろしくお願いいたします。

それからイラストを担当してくださったマニャ子さま、今回も本当にお世話になりました。これまで以上に得体の知れないオーダー（「不定型のドロドロ」）にもかかわらず、新キャラのデザインがイメージどおりで幸せでした。また担当の湯澤さんをはじめ、この本の制作・流通に関わってくださったすべての皆様にも心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗